

LI-TWEET

SUMMER



このリフツに100円
のカードを挿入
して通話してください



10円・100円

100円はリフツ専用
の100円カードのみです
※お支払いに100円カードを
入れてお通話ください

カードの残り回数



カードをここに挿入
してください

カード投入



目次

特集「君とハナシがしたい」

うさぎ

「彩子な夢」

五

日居月諸

「力強く暴力的な愚か者によるフォリア」

五六

エッセイ競作

テーマ「電話」

あんな

「一本の電話」

一一二

安部孝作

「電話にくたびれて」

一一六

うさぎ

「電話と言えば……」

一三二

日居月諸

「孤独の音」

一三五

自由投稿

イコ

歌集「セキレイの心」

一四一

小野寺那仁 「酒茶漬けの味」

一四七

連載

常磐誠 「I believe your brave heart」(第二回)

一九三

読書会・対談・インタビュー

読書会 6、あんな、日居「後藤明生『挟み撃ち』を読む

二〇四

対談 日居×小野寺 「突然な女たち」

二二三

編集後記

二二八

特集

君とハナシがしたい

特集 戯曲

彩子な夢

うさぎ

○彩子の住むマンション外観・(夜)

あんまり大きくないマンション。

ところどころに明かりがついている。

○彩子のリビング・(夜)

本や雑誌がたくさんあるリビング。

机のパソコンに向かって渡久地彩子(二六歳)が台本を書いている。

離れたところで、西口乃亜(二四歳)ファッション雑誌か何かを笑って読んでいる。

乃亜「あっ、ごめん」

彩子「ううん、気にしてないよ。乃亜ちゃんのそれには慣れてるから。こっちこそごめんね」

乃亜「いいですよ。渡久地先生の台本の完成を待つのが私の仕事ですから」

彩子「先生ってそんな」

乃亜「いや、先生の台本のおかげでうちの劇団は大きくなってきたようなものですか」

彩子「だから、先生なんて柄じゃないよ。それにみんなが頑張ってるから大きくなったんじゃない」

乃亜「いや、台本あってのうちの劇団ですよ。台本が良くなきや、客も役者も今はいませんよ」

彩子「でも、それを具現化してる方が私はすごいと思うよ」

乃亜「全然、先生の方が」

彩子「だから、先生って呼ばないでよ、いつもの感じで呼んで、なんかそれだと書けるものも書けないから」

乃亜「いや、彩ちゃんはそんなに謙遜することないよ。彩ちゃんの零から一を作る能力は私は欲しいな」

彩子「そんなの書いてれば、力はずくよ」

乃亜「いや、でも、彩ちゃんにはかなわないよ」

彩子「私は誰かの作品の模倣を書いてるつもりだけどね」

乃亜「でも、その彩ちゃんを書く作品は、模倣のように見えないよ」

彩子「そんなことないよ。どっかで読んだことあるでしょ」

乃亜「うーん、そうなのかなー」

彩子「私の書いた作品は、その本棚の小説のどこかに埋もれてるよ」

ぎっしりと本が敷き詰められた本棚。

乃亜「へー。いいんですか、私にそんなこと言っちゃって」

彩子「別にー。そんなに先生って称えてほしくないからさ」

乃亜「へー。私も書きたいなーなんていつてみたりして」

彩子「書いてみれば？」

乃亜「昔、高校で書いたことあるんだけどね、それは散々に言われたの」

彩子「どんなの書いたの？」

乃亜「うーん、たしか、ロミオとジュリエットをベースにして、ロミオはか弱い男で、

ジュリエットが男勝りな女なの」

彩子「へー、面白そうじゃん」

乃亜「バルコニーのシーンは逆なの」

彩子「あー、それは面白いじゃん。なんで散々言われたのかわからない」

乃亜「いやー、たぶん、ギャグが面白くなかったんだと思う」

彩子「そうなんだ」

乃亜「うん、そんな時の同級生に、お前のはギャグで全部を台無しにさせてるって言うてもん」

彩子「じゃあ、ストレートプレイにすればよかったじゃん」

乃亜「なんかそれじゃあそれで面白くないというか、私の書きたいことにならなかつたんだよね」

彩子「でも、書いてたんなら、今でも書けるでしょ？そうやって、悪い部分直してさ」
乃亜「書けるかなー」

彩子「書けるよ。実際、私なんて、初めて書いたの乃亜ちゃんより遅いからね」

乃亜「まじで？」

彩子「うん、私は大学の文芸部で、映画同好会とコラボ企画で書いたのが初めて」

乃亜「へー。今日は珍しくおしゃべりですねー」

彩子「そうかな？」

乃亜「そうだよ」

彩子「だって、乃亜ちゃんが話しかけるからじゃない？ わたしより乃亜ちゃんが書けば面白いんじゃない？」

乃亜「私は書きませんし、彩ちゃんみたいになれないよ」

彩子「うーん、私は、こんなでいいのかなーって思ってるけどね」

乃亜「どーゆーこと？」

彩子「私は社会人やりながらなのに、みんなはバイトしながら、夢に向かって頑張ってるさ、悪い気がして」

乃亜「いいんだよ。作家さんは書くのが仕事。書いてくれれば、あとは何しててもいいの」

彩子「でも、私はみんなのためになれてるのかな？ 稽古場も行かないしさ」

乃亜「いいじゃない？ 彩ちゃんはたまに来るぐらいがちょうどいいよ。ちょっと来て、的確なダメ出して、そして、帰る。かっこいいよ」

彩子「そーかなー？」

乃亜「私もそう思うし、みんなも彩ちゃん言葉には感心してるよ」

彩子「ならいいんだけどさ。でも、このまま大きくなったら、私、ついていけないかもよ」

乃亜「えー、それに見合ったお金払いますよ」

彩子「お金じゃなくてさ、なんてゆーの、やっぱり、私は安定した暮らしがしたいな」

乃亜「そー言わずに、なんとか」

頭を下げる乃亜。

彩子「いや仮の話だからいいよ。そん時話そう、この話は」

乃亜「ですね、取らぬ狸のなんちゃらいいますもんね」

ドアのチャイム音が鳴る。

乃亜「あいつが帰ってきたよ」

彩子「そんな彼氏にそんなこと言わないでよ」

乃亜「あいつはどーしよーもないやつですよ」

チャイムの音が鳴る。

彩子「何で、出ていかないの？」

乃亜「いじめです」

彩子「意地悪ってゆーのそれは。私は今、いいところだから、乃亜ちゃん出て」

乃亜「それこそ、意地悪ですよー」

彩子「出て、お願い」

乃亜「はぁーい」

乃亜、部屋を出る。

パソコンに向かって台本を書き続ける彩子。

部屋のドアが再び開く。

末松俊（二三歳）と乃亜が言い合いして入ってくる。

末松「お前がほしいって言うから、この寒い中買いに行ったんだろ」

乃亜「乃亜は欲しいって言ったけど、あんた遅いのよ」

末松「しょうがないじゃん、コンビニ遠いんだから」

乃亜「走って買いに行きなさいよ、役者でしょ？ 体力あるんでしょ？」

末松「いいじゃんかよ、歩いて買いに行っちゃって」

乃亜「それにしても遅い！ 立ち読みとかしてたんじゃないの？」

末松「してねーよ、探すのに苦労したんだよ」

二人の方を向く彩子。

彩子「はいはいはい、喧嘩なら外です。私のうちでしないでよ、それとも台本上がるの遅くなっていいの？」

乃亜・末松「すいません」

彩子「わかればよろしい」

画面のほうに顔を向ける彩子。

末松「聞いてくださいよ、彩子さん。こいつ紙パックのミルクティーじゃないと嫌だ
ってわがまま言うんですよ」

彩子「いいじゃない、紙パックのミルクティー、美味しいじゃない」

末松「でも、あそこのコンビニ置いてあるのはダメとか、わがまま言うんですよ」

彩子「こだわりがあっというじゃない」

末松「でも、わがままじゃないですか？　ってか、来るときに買えばいいのに、さっき飲みたいって言い始めて」

乃亜「だって、飲みたくなっただもん」

末松「だったら、あらかじめ買っておけよ」

乃亜「だって、来るときは、バイト明けて、忙しくてそんな気分じゃなかったんだもん」

末松「だから、あらかじめ買っておけて話だよ」

彩子「うるさいよー。ここは、君たちの部屋じゃないよー」

乃亜・末松「すいません」

彩子「でも、なんだかんだ言って仲いいよね、何年目？」

末松「二年目です」

彩子「いいねー、若いねー」

乃亜「そんなこと言ってどーしたんですか？」

彩子「うーん？わかんない。なんか二人見てたら、若いなあーって思って」

末松「彩子さんだって、俺達と二個違いじゃないですか」

彩子「もう、二〇代後半だよ。四捨五入したら三〇だよ。若くないよ」

乃亜「そーいえば、彩子さんって浮いた話聞かないですね」

末松「あーそうかも」

彩子「うーん？　しないでくださいよ。しても面白くないし」

乃亜「えー、隠してるんですか？　もしかして、不倫とかしてたりして？」

彩子「そんなことはないよ。私は自分の話が嫌いなだけ」

乃亜「怪しい」

彩子「全然、私はやましい気持ちはない」

乃亜「ますます、怪しい。そーいえば、彩ちゃんが演出やめて脚本家一本になったのって、2年くらい前の話だよね」

末松「あー、違うよ、俺が入ったときだから、3年前だよ」

乃亜「そっか、そんなときに就職するからって理由で、脚本だけになったんだっけ」

末松「そうだね」

彩子「何、昔の話してんの？」

乃亜「いやー、なんで、演出しなくなったのかなって思ってる」

彩子「就職したからじゃん」

乃亜「そんなとき、最上さんから止められなかったんですか？　演出もしてくれて」

彩子「いや、向こうは二つ返事でいいよって言うってくれたよ」

乃亜「そうなんだ、なんかゴタゴタがあったんじゃないかなあーって」

彩子「乃亜ちゃんは制作でしょ？ その時の話知ってるでしょ？」

乃亜「いや、たしか最上さんからメール来て、後日電話で話聞いただけです」

彩子「彼らしいね」

乃亜「なんかその言い方だとなんかあったんじゃないんですか？」

彩子「ないよ、彼には、前前から言っていたもん」

乃亜「そうなんだ」

彩子「ごめん、ラストスパートかけたいから、黙ってていい？」

乃亜「いいですよ。あっ、なんかDVD見えていいですか？」

彩子「そこらへんにあるやつ漁っていいから、黙って笑ってね」

乃亜「はい」

乃亜と末松はDVDラックからDVDを探す。

彩子はキーボードをひたすら打ち続ける。

十一時半を指す時計。

末松と乃亜は二人仲よくDVDを見てる。

二人の見ている前に、原稿を差し出す彩子。

彩子「ごめんね、今あがったよ」

末松・乃亜「おつかれー」

彩子「ごめん、もうクタクタだわー」

乃亜「今回もこんなにポリウムあるのに、たったの1か月って、さすが彩ちゃん」
彩子「まあ、プロットは決まってたから」

あくびをする、彩子。

乃亜「じゃあ、欲しかったものは、もらったし、帰ろうかなー」

彩子「ごめんね、こんな遅くまで」

乃亜「大丈夫、見てくれだけのボディガードはいるから」

彩子「ちゃんと守ってあげてね」

末松「俺そんなに信頼ないっすか？」

彩子「私は信頼してるけど、パートナーから信頼されてないんじゃないねー」

乃亜「じゃあ、帰るよ。お邪魔しました。また、台本のこととは後日メールするから」

彩子「わかった、おやすみねー」

乃亜「はい、おやすみなさーい」

乃亜と末松が彩子の部屋から出る。

彩子、時計を見る。

彩子「あー、もーこんな時間。寝なきゃ」

寝室へ行く彩子。

○彩子の寝室・(夜)

ベッドと、二、三冊の雑誌と本がある程度。

彩子が入ってくる。そのまま着替えずにベッドに倒れこむ。

○鵜飼法律事務所

机に突っ伏して、彩子が寝ている。

彩子に近づいてくる、鵜飼美紀子(三五歳)

美紀子「渡久地さん」

彩子、体をびくってして起きる。

美紀子「渡久地さん、もうお昼休みは終わりよ」

彩子「えっ？」

周りを見回す彩子。

十三時を過ぎている時計。

彩子「えっ？えっ？あれ？私、今日ちゃんと来たんだ」

美紀子「何？寝ぼけちゃって、嫌だ。頭が起きたら、私のところ来て頂戴ね」

彩子「はい」

もう一度、周りを見渡す。

二月のカレンダー。

彩子「あっ、そうだ。あれ言っておかなきゃ」

彩子、デスクから資料を取り出し部屋から出ていく。

○事務所内、美紀子の部屋

美紀子がパソコンを打っている。

そこにノックがある。

美紀子「はい」

彩子が入ってくる。

彩子「失礼します」

美紀子「一昨日の言っていた資料できた」

彩子「あっ、はい。持ってきました」

美紀子「ありがとう、助かるわ」

彩子「あの、来月の休みの件なんですけど……」

美紀子「来月休まれると困るのよねー」

彩子「期末なのは、わかってますよ。でも、私も私用で」

美紀子「私は別にあなたへの活動に対して否定はしないわ、でも、やっぱり、社会人なんだから、きちっとしてほしい時はあるかな」

彩子「すいません。午前休だけでもいいので、その日だけはお願いします」

彩子、頭を下げる。

美紀子「しょうがないわねー。わかったわ。じゃあ、午前中だけ、休みね」

彩子「はい、ありがとうございます」

美紀子「で、今回はどこでやるの？」

彩子「下北沢のスズナリという劇場です」

美紀子「すごいじゃない。」

彩子「そんなことはないですよ」

美紀子「すごいわよ、もうすぐプロになってここからいなくなっちゃうんじゃない」

彩子「いやいや、それはないです」

美紀子「でも、本当に劇団が忙しくなったらそんなこと言ってもらえないかもよ」

彩子「そうなんですかね？ 私にはわかりません」

美紀子「若いんだから、いつかは自分の道を決めなきゃだよ」

彩子「はい」

電話が鳴る。

美紀子「はい、はい、わかりました。私に対応します」
彩子「じゃあ、私は失礼します」

彩子、部屋を出る。

○鵜飼法律事務所の廊下

部屋から出てくる彩子。

彩子、自分のデスクに戻ろうと歩き出す。

彩子「自分の道か……どうしよう」

○鵜飼法律事務所内・(夜)

8時過ぎを示す時計。

周りには誰もいない。

パソコンに向かっていている彩子。

彩子「終わったー」

伸びをする彩子。

美紀子がコーヒーを持って近づいてくる。

美紀子「お疲れ様」

彩子「お疲れ様です。(コーヒーを受け取って)ありがとうございます」

美紀子「もう、休みに向けての帳尻合わせ？」

彩子「はい」

美紀子「あなたのもじめなところ、私は買ってるわ。それにやっぱりパソコンの扱いには慣れてるのね」

彩子「いやいや、台本書く程度でしかパソコンなんて触ってませんよ」

美紀子「でも、まあ、こんな資料作るのなんてすごいわね」

彩子、携帯が鳴る。

美紀子「どーぞ」

彩子、携帯を取り出す。

彩子「あっ……」

美紀子「いいわよ、私に気を使わないで」

彩子「じゃあ、失礼します」

彩子、メールを見る。

乃亜からメール。

「台本、最上さんからだいたいOKでいただきました」という内容。

美紀子「劇団の人から？」

彩子「はい、この前あげた台本の修正だと思えます」

美紀子「大変ね、作家さんは」

彩子「いや、好きでやってるんでいいんです」

美紀子「私はこれから一軒行くけど、あなたのその様子だと行けなさそうね」

彩子「すいません、じゃあ、お先に失礼します」

コーヒーを一口で飲み、急いで部屋を出る、彩子。

○鵜飼法律事務所・外・(夜)

駅の方へ歩き出す彩子

○駅・(夜)

電車を待つ彩子。

電車が入ってくる。

それに乗る彩子。

○電車内・(夜)

帰りの電車の中。

彩子座って寝ている。

○彩子の夢・居酒屋・(夜)

劇団の打ち上げをしている。

参加者は、乃亜、末松、小崎純(二四歳)、堀田信吾(二五歳)、霧谷春美(二一歳)。

五人は皆楽しそうに飲んでいる。

乃亜「いやー、よかった。今回も無事に怪我もなく終わって。あたしは安心したよー」

末松「俺は自分のことでもいいっばいっばいだよ」

堀田「それは、いつものことだろ!!」

一同「あはははー」

純「それより遅いね、彩さん」

乃亜「まだ会社に入ったばかりだから忙しいんだよ」

春美「大変なんですね」

末松「みたいだね。俺達なんかぬくぬくしすぎかな」

堀田「いいじゃん、夢に向かって走ってるんだから」

純「でも、なんか最上さん見てるとねー……」

一同「……」

そこに彩子が入ってくる。

彩子「お疲れ様ー」

堀田「おっ、真打ち登場！ー」

春美「お疲れ様でーす」

彩子「お疲れ様。ごめんね、一次会参加できなくて」

乃亜「いいの、いいの気にしないで」

彩子「乃亜ちゃんもちゃんと仕切れてるみたいだし、嬉しいよ」

末松「まあまあ、話したいことあると思いますけど、とりあえず一杯」

末松、彩子にビールを注ぐ。

彩子「ありがとう。末松君も、今回評判良かったみたいだね」

末松「いやー、それほどでも。やっぱり、脚本がいいからですよ」

彩子「いやいや、それを舞台に上げた最上さんだよ。って、最上さんは？」

純「考えたいことがあるから、散歩だって」

彩子「そう……」

堀田「最上さんのことは後にして、それより聞かせてくださいよ、感想」

彩子「うーん……」

乃亜「ダメみたいだよ」

純「うん、なんか電源がオフになったみたい」

彩子「えっ？」

乃亜「この話も聞こえなかったの？」

彩子「ごめんね、感想だっけ？堀田君はやっぱり、私の思ってた通りで嬉しかったよ」

堀田「マジっすか？」

彩子「うん。で、末松君は、やっぱり、メインの役だけあって、なんか引き付けられた」

末松「ありがとうございます」

彩子「それで、純ちゃんは、いつも思うけど色っぽいね。アンケート少し見たけど、純ちゃん目当てがいるのが面白かった」

純「それって、褒めてるの？」

彩子「最後に、春美ちゃん。この劇団のヒロインだけあって、すごいね。アンケートの人気投票1位らしいじゃん。書いた私もここまで人気出るとは思わなかった」

春美「えへへ」

彩子「なんか、あれだけど、みんな甲乙つけられないよ。みんなよかった」

乃亜「ねー、あたしは？」

彩子「乃亜ちゃんは、さっき言ったじゃん」

乃亜「えっ？あれだけ？」

彩子「だって、初めての制作にしては、よかったよ。私と最上さんの橋渡しして、みんな仕切って」

乃亜「それは、困った時は彩子さんにメールしてたからですよ」

彩子「でも、それにしても出来すぎだよ」

乃亜「ありがとうございます」

乃亜「本当は、客演してくれたみんなにも言いたいんだけど、仕事のせいで……」
純「仕方ない、仕方ない」

彩子「いいのかな、私、こんなんで」

乃亜「だって、それは、彩子さんと最上さんで決めたことしょ？」

彩子「そうだけどさ」

乃亜「だったら、いいの。気にしない」

彩子「うーん……」

乃亜「そんな声ださないですよ。次回もこれで行くんでしょ？」

彩子「まあーね」

乃亜「だったらしかたない、作家先生は、作家に徹するべきだよ」

彩子「うーん」

乃亜「ねー、さっきから、最上さんのこと気になってるでしょ？」

彩子「うーん、うん」

乃亜「だったたら、いっそ探してきなよ。こんなんじゃダメだよ」

彩子「うん、ごめんね」

乃亜「じゃあ、とっとと行ってきないな。で、連れて帰ってきてね」

彩子「ごめんね。みんな、ごめんね」

彩子、申し訳なさそうに席を立つ。

残った面々は、話を続ける。

○彩子の夢・繁華街の路地・夜

最上智裕（二七歳）が缶ビール片手にたばこを吸いながら座り込んでい
る。

その姿を見つける彩子。

彩子「あっ、いた」

最上「おー、来たんだ」

彩子「ごめんね、仕事遅くなってごめん」

最上「いいよ、それより、大好評だったよ」

彩子「よかったじゃん」

最上「みんな、作品が良かった、脚本が良かった、役者が良かったって」

彩子「よかったね。今度はあそこよりキャパ大きい所でやるんでしょ？」

最上「あー」

彩子「これからも頑張らなきゃだね」

最上「あー」

彩子「ねー、酔ってる？」

最上「酔ってないよ。いたって正常だよ」

彩子「じゃあ、なんでそんなに気のない返事なの」

最上「俺のこと褒められてないんだよ」

彩子「えっ？ だって、作品が良かったとか言ってたじゃん」

最上「それは全部。俺は演出だよ、役もちよっとだけ。俺って、この公演やる意味あったのかな？」

彩子「主宰がそんなこと言ってどーすんの？ これからが勝負だよ」

最上「俺が演出やる意味あんなのかな？ 彩子を書いて、彩子が演出すれば、全部が丸く収まるじゃん」

彩子「それは無理だよ。私は仕事で忙しくて、稽古に付きっきりは無理だよ」
最上「なんで、就職しちゃったの？」

彩子「それは……安定した収入がほしかったから。いつまでもフラフラしてられないし」

最上「それって、俺たちのこと馬鹿にしてるってことでしょ？」

彩子「違うよ。そうじゃなきゃ、私は脚本なんて提供してないよ」

最上「お前は安定が欲しいんだろ？ 不安定な俺達から離れたんだよ」

彩子「……」

最上「だから、俺と別れたのか？」

彩子「違う。それは、違う」

最上「じゃあ、何なんだよ？ なんで、俺に何も言わないでアパートから出てたんだよ！！」

彩子「違う、違うの、それは、それは！」

○彩子の部屋・(朝)

ベットから飛び起きる彩子。

服装はパジャマ。

彩子「あー、夢かあー」

周りを見渡す。

彩子「あれ？ 帰ってきてたんだ」

携帯のランプが光ってる。

携帯を見る。

乃亜からのメールが来きている。

「電話のことよろしくお願いします。今日、台本の改訂の打ち合わせに彩子さんち行きまますのでそれもよろしく」

彩子「あちゃー、そういう約束しちゃってたんだ。返信してるし」

返信内容は、「OK、乃亜ちゃんに時間任せるよ」

彩子「あー、どーしよう……とりあえず、シャワー浴びようかな、ダメだ」

○彩子のリビング・(夕方)

時計は午後5時過ぎを指している。

TVにはお芝居のDVDが流れてる。

それを見ている乃亜と堀田。

彩子はパソコンで何か書いている。

乃亜「やっぱり、この俳優さんかっこいいよね」

堀田「えー、俺とどっちがいい？」

乃亜「それはー、信吾ちゃんだよー」

堀田「やっぱりー」

乃亜「うん。ねー、喉乾いたー」

堀田「はい、これ」

堀田がビニール袋からミルクティーを取り出す。

堀田「はーい」

乃亜「おっ！ 気が利くじゃーん。いただきまーす」

乃亜がミルクティーを飲む。

乃亜「やっぱり、このメーカーだよね。わかってるね、信吾は私のことわかってるね」

堀田「まあーね」

彩子「ねえー、二人って何年目だっけ？」

堀田「えーと、一年半かな」

彩子「長いねえー」

乃亜「でも、だいたい毎日メールしてるもんねー」

堀田「だねー」

彩子「そんなこと聞かなくても、二人の仲の良さはわかるから」

堀田「あざあーす」

彩子「それよりいいの？ 堀田君は稽古行かなくて」

堀田「今日は自主練ですよ。だって、今日は最上さん休みだし、台本改訂されるんでしょ？」

彩子「そうなんだー。でも、行かなくて大丈夫なんだ？」

堀田「うーん、彩子さんにそう言われると心配だ」

乃亜「私は行かなくてもいいと思うけどね。どーせ台本の内容が変わるから、また明日から頑張ればいいよ」

堀田「乃亜がそういうからいいや」

彩子「乃亜ちゃんは、甘やかすねー」

乃亜「いいんですよ。今日のここに誘ったのは、私ですから」

彩子「そうなんだ……」

自然と堀田と乃亜がDVDを見る。

彩子はパソコンに集中する。

○彩子のリビング・(夜)

時計が午後8時を指している。

彩子と乃亜と堀田がテーブル囲んでいる。

それぞれ台本をもっている。

乃亜「こういう流れなら、このセリフいらなないと思ってるんだけど」

堀田「彩子さんほいけどなあー」

乃亜「でも、おかしいでしょ？ 話が偏ってるじゃない女に」

堀田「いいじゃん。俺は、どっちも共感もてるよ」

乃亜「今回はどっちかと言うと、このロリコンの男に集中させたいし、共感させたいの。あくまで、その女は話をまわすだけ」

堀田「えー、だけど、それじゃあ、彩子さんの脚本ぼくじゃないじゃん」

乃亜「最上さんの変更のリクエストもそういうのなの。男も女にも共感されちゃうと話が薄れるの」

堀田「そうかなー」

乃亜「だから、彩ちゃんには悪いけど、このラストはもっかい考えてほしいんだけど」

彩子「うーん……。とりあえず、考えてみるけど、乃亜ちゃんの言うことは、最上さんの言うことと合致してないよ」

乃亜「そうかな？」

彩子「うーん。だって、今回の台本改訂はあくまでみんなに均等に山を作ってあげることですよ？ だったら、このラストは、ありだと思っただけだね」

乃亜「えー、だって、二人に愛があったら物語がきれいじゃないですか。なんかそれだと今までと違う色だとおもうんだけど」

堀田「ロリコン男が小学生を一四年監禁した後、大人になった小学生を愛せるかっていうのが今回のテーマなら問題ないでしょ」

彩子「うん、そう。私の中のシミュレーションだと、今回の台本みたいなのだと思っただけだね」

乃亜「そうなのかなー」

彩子「でも、乃亜ちゃんがなんて言おうと、もう最上さんにはメールで改訂版送ってあるし、最上さんのみぞ知って感じじゃない？」

堀田「そうだよ。乃亜がなんて言おうとも、最終的には演出の最上さんが決めるんだから、乃亜は口をださない」

乃亜「ブー」

堀田「そんな顔してもダメ」

彩子「堀田君のほうがよくばど状況をわかっているとっとうよ」

乃亜「ブーブー」

彩子「まあ、これで駄目だったら、乃亜ちゃんと一緒に考えるから、ね？」
乃亜「わかったー」

彩子「じゃあ、今日はお開きということで。長い時間ごめんね」

堀田「いいですよ。気にしないで」

乃亜「うん、たまには稽古場に顔出してね」

彩子「わかった。台本が決まったらね」

乃亜「みんな待ってるから」

彩子「はい」

堀田「じゃあ、失礼します」

乃亜「お邪魔しましたー、またねー」

二人出ていく。

溜息をつく彩子。

台本を手に取り寝室へ向かう。

○彩子の寝室・(夜)

台本を読みながら入ってくる彩子。

彩子「そんなに変かな」

ベッドに寝そべりながら、台本を読む。

彩子「おかしくないと思うんだけどなー。まあ、いいか」

台本を投げ捨て、蒲団をかぶる。

○鵜飼法律事務所

パソコンに向かって資料を作成する彩子。

そこに携帯のバイブ音。

彩子が驚く。

携帯をこっそりのぞくと乃亜からのメール。

「今日、通しの稽古をするんで見に来てもらえませんか？最上さん今日は休み

なんですすよね」

返信する、彩子。

そこに美紀子が現れる。

美紀子「今夜、暇？」

彩子「あー、今夜はちょっとあれが……」

美紀子「あー、もうそろそろ本番よね？」

彩子「はい」

美紀子「ねー、私の分のチケット取っといてもらえない？」

彩子「あっ、はい、ありがとうございます」

美紀子「あなたの書いた脚本ってすごく面白いのよね。なんか女性独特の感性っていうのそれがうまく言葉になってるって感じで」

彩子「いや、私は台本を書いてるだけです。実際に演技をしているのはみんなだし。演出をしているのは、主宰だし」

美紀子「でも、あなたの台本ですべてが成り立ってるのよ。自信もっていいんじゃないの？」

彩子「私なんて、ただの一脚本家ですよ」

美紀子「でも、それがあるから劇団が成長してるんでしょ？ あなたの賜物よ」

彩子「そうなんですかねー」

美紀子「そうよ。自信持ちなさい。私応援してるから。でも、そっか、じゃあ今夜も無理か」

彩子「すみません」

美紀子「でも、仕事は手を抜かないですよ」

彩子「それはもちろんです」

美紀子「じゃあ、頑張ってるね」

彩子「ありがとうございます」

美紀子、彩子のデスクから去る。

美紀子を見送りながら、どことなく嬉しそうな顔をする彩子。

○鵜飼法律事務所・夕方

彩子、資料の作成が終わる。

大きく伸びをし、時計を確認。

彩子「あー、これなら余裕だな」

彩子、帰り仕度をすませ事務所を出る。

○稽古場・夜

劇団の面々がフォームアップをしている。

乃亜はパソコンで作業をしている。

そこに入ってくる彩子。

一同がそれを見る。

一同「おはようございます」

彩子「おはよう。えっ？ 私、待ちだった？」

乃亜「そうだよ」

彩子「いいのに、勝手に始めちゃって」

末松「演出しないのに、しかも、こいつしか見てないのに、始めても意味ないっすよ」

純「乃亜ちゃんだけじゃやってる意味ないし」

彩子「思ったんだけど、最上さん休みってどーゆーこと？」

堀田「あれっす、バイト」

彩子「なんでこんな時期までバイト入れてるの？」

乃亜「なんかお金が必要みたいよ」

彩子「まああー、いいや。私でいいなら見てるから、始めちゃおう」

乃亜「お、なんかスイッチ入りました？ このまま演出復活しちゃう？」

彩子「私は乃亜ちゃんを信じて、仕事も早めに上がってきたのに」

乃亜「ごめん、ごめん」

彩子「じゃあ、10分後に通しはじめよう。各自、それまでに準備していてね」

一同「はい」

彩子、かばんから台本とたばこを取り出し部屋を出る。

○稽古場の喫煙所・夜

台本を眺めながら、煙草を吸う彩子。
1本吸い終えたら、稽古場に戻る。

○稽古場・夜

各自が自分のセリフを確認しながら、うろうろしている。
そこに彩子が入ってくる。

彩子を見る一同。

彩子「じゃあ、やろうか」

一同「はい」

彩子、演出席につく。

役者達も自分のポジションにつく。

彩子「よいい、はい」

芝居の通しが始まる。

○稽古場・(夜)

時計は9時過ぎを指している。

純「私が生まれてきたこと自体が、罰ゲームみたいなもので、私が生まれてこなければ

お兄ちゃんも、パパもお継母さん幸せになれたんだよね？ そうだよね？」

末松「違う。俺は、愛子と出会えたことが幸せだった。それを俺は裏切った。俺がいけないんだ。だから、俺がここからいなくなっても、愛子のことは認める。全肯定する」

純「ありがとう。ありがとう、お兄ちゃん！ 私、待ってるから。ここで待ってるから。ずっと、絶対に」

末松「愛子、じゃあ、お兄ちゃん行ってくるな。戻ってくるからな」

純「うん」

末松、堀田に連れられてはけていく。

純「大好き、お兄ちゃん」

彩子「はい！ おつかれー」

乃亜「お疲れ様ー」

各自が水を飲んだりしている。

彩子「いきなりダメ出してゆーのも、みんな疲れてることだし、乃亜ちゃんここ何時まで？」

乃亜「一〇時に完全撤収です」

彩子「じゃあ……」

彩子、時計をみる。

彩子「九時一五分まで休憩で」

一同「はい」

彩子、台本とペンとたばこを持って出ていく。

○稽古場の喫煙所・夜

煙草を吸いながら、台本にダメを書いていく彩子。

そこに純と末松が入ってくる。

二人「お疲れ様です」

二人とも煙草を吸う。

彩子「お疲れ様」

末松「なんか、彩子さんのその姿懐かしいッスね」

彩子「そう？」

末松「様になってるってゆうか、なんかいいッス」

純「で、どーだったの？」

彩子「えー、それはどーゆう意味？」

純「いや、全体でも、私だけでも、どっちでも」

彩子「あんまり、演出はいじっちゃ悪いと思うから、あれだけど、なんかね」

純「なんですかー？」

彩子「いやー、なんか私が思ったのと違うところがちよつとあるかなって感じ」

純「たとえば？」

彩子「うーん、愛子は何歳？」

純「二六歳ですよ、設定では」

彩子「そこだよ、純ちゃんの中では愛子は二六歳というのがもう間違えなのよ」

純「えっ？どーゆーことですか？」

彩子「詳しくはダメ出しの時に言うけど、愛子は一に歳なんだよね。一二歳のままの二六歳なの」

純「あー、あーあーあー」

彩子「つまりは、そのギャップなんだよね、愛子のキャラを作るうえで、今のだとセリフ回しが大人なの、わかる？」

純「あー、そういうことー」

彩子「で、末松君は逆なの。そこわかる？」

末松「今の聞いてなんかわかりました」

彩子「逆なのよ、お互いが、私の意図したことは違ってる」

末松「あー、やっぱり彩子さんですね。最上さんと、そこまで言ってくれませんが
ん」

彩子「まあ、書いた本人だからこう言えるだけで、最上さんは最上さんで何かある
かもよ」

末松「うーん……」

春美がやってくる。

春美「あの、もう時間ですよ」

純・末松「はい、行きまーす」

彩子「ごめん、あと五分頂戴」

春美「わかりました」

彩子「ごめんね」

純と末松と春美は稽古場へ向かう。

彩子は煙草を取り出し、煙草を吸い始め、台本に書いていく。

各々がリラックスして、何かしている。

そこに彩子が入ってくる。

彩子「ごめんね、じゃあ、ちゃっちゃとダメ出し行くよー」

一同「はい」

彩子「ダメ出しと言っても、脚本家からの要求程度だと思って今後の参考にしてください」

一同「はい」

彩子「じゃあ、一場から……」

彩子のダメ出しが始まる。

○稽古場・夜

彩子からのダメ出しが続いている。

彩子「だから、全体的にいえば、純ちゃんの愛子っていうのは、さっき言った通りで、二六の体をもつ一二歳の女なの」

純「うん」

彩子「二六歳の大人になった女性をロリコンの男が愛していられるかっていうのが、

私を書きたかったこと」

末松「うん」

彩子「で、堀田君と春美ちゃんはこの二人の世界を壊す役割なの、しかもそれに対して罪悪感とかなしでね」

堀田・春美「はい」

彩子「だから、今のキャラよりもっと楽天的でいいと思うのね。だから、二人の世界を明るくぶっ壊して欲しいの」

堀田・春美「わかりました」

彩子「じゃあ、それで。でも、私の話は参考程度で、最上さんに言われたことのほうを守ってね」

一同「はい」

乃亜「そろそろ時間です」

彩子「じゃあ、撤収準備して、帰ろう」

一同「お疲れ様でしたー」

○稽古場の帰り道・夜

それぞれが、誰かと喋ってる。彩子は、乃亜に話しかける。

彩子「ねー、乃亜ちゃんさー」

乃亜「なんですか？」

彩子「台本のことなんだけどさ、ラスト改訂したいなーなんて思ってるんだけど」

乃亜「えー、大丈夫なんですか？本番まで時間ありませんよ？それに最上さんとも話さなきゃだし」

彩子「そうなんだけど、今日見て思ったんだけど、ラストもう一段階なんかあってもいいかなーと思って」

乃亜「私はいままで賛成しませんねー」

彩子「最上君とは、私が話しとくから、お願い」

懇願する彩子。

乃亜「わかりました。じゃあ、彩ちゃん直々に話してくださいよ」

彩子「サンキュー」

○ 駅・夜

各々がそれぞれ話している。彩子だけ、反対方向の電車を待っている。先に彩子の乗る電車が来る。

彩子「じゃあ、みんなお疲れー」

一同「お疲れ様でした」
電車に乗る彩子。

○彩子の寝室・夜

疲れた表情の彩子。

最上に電話するが、つながらない。

彩子「まったく、お気楽だねー。嫌になっちゃう」

彩子、ベットに倒れこむ。

彩子「明日でもいいかー」

彩子、そのまま眠りにつく。

○彩子の夢・鵜飼法律事務所

彩子、普段通り仕事をしている。

そこに携帯のメールが来る。

乃亜からのメールで、内容は「なんか大変なことになってるんで今日稽古場来てください」

彩子、こっそり返信する。

○彩子の夢・鵜飼法律事務所・夕方

仕事を切り上げて帰ろうとしている彩子。

そこに、美紀子がやってくる。

美紀子「最近、帰るのが早いわねー」

彩子「すいません」

美紀子「みんな頑張ってるのに、悪いと思わないの？」

彩子「自分の仕事は終わらせました」

美紀子「だからって、早く帰っていいってことにはならないでしょ？」

彩子「そうですね」

美紀子「今日も稽古？」

彩子「そうですね……」

美紀子「だよね、本番前だと忙しくなるよね。しょうがないから、今回だけは見逃してあげる」

彩子「すいません」

美紀子「でも、帰ってきたら、ちゃんとやってね」

彩子「わかりました」

美紀子「行ってらっしゃい」

彩子「失礼します」

彩子急いで、事務所を出る。

○彩子の夢・稽古場・夜

急いで入ってくる彩子。

誰もいない。

携帯で、末松に連絡。

彩子「もしもし？末松君？」

末松の声「なんすか？」

彩子「今日稽古じゃなかったっけ？」

末松の声「稽古ですよ、本来なら」

彩子「えっ　？どーゆーこと？」

末松の声「それよりもなんで彩子さん言ってくれないんですか？　乃亜？　二股かけ

られて？」

彩子「だって、それは知らないほうが幸せかなーって思っ……」

末松の声「今、堀田とも一緒にいるんで変わります」

彩子「はっ？」

堀田の声「乃亜の二股のこと、なんって言ってくれないんですか？俺、彩子さんのこと信じられませんよ。俺、彩子さんの作品好きなんですから」

彩子「ありがとう。でも、二人のことも私は好きだったから言えなかったの」

純の声「彩子さん、私も彩子さんのこと好きだから、今まで付いていこうと思いましたが。でも、こんなことになるなんて」

彩子「えっ？ 純ちゃんも一緒なの？なんで？」

春美の声「嘘つき」

彩子「春美ちゃんも？ えっ？ どういうこと？」

その時、携帯にキャッチホン。

相手先は鵜飼法律事務所。

彩子「ちょっと待って、仕事場から電話あったからいったん切るね。もしもし？」

美紀子の声「もしもし、渡久地さん？」

彩子「はい」

美紀子の声「この資料どーなってるの？この前、作ってもらった資料。先方に見せたらカンカンに怒っちゃって、仕事できなかったじゃない！！」

彩子「すいません」

美紀子の声「すいませんで済んだらね、全然いいの。鼎肩にしてもらってる方なの。その人がこんなことははじめてだって。今回で縁を切らせてもらうって」

彩子「……」

美紀子の声「そうそう、あなた、明日から休み取ってたわよね、お芝居で。丁度いいから、しばらく来なくていいから、それじゃあ」

一方的に電話を切られる。

呆然自失の彩子。

携帯からは、通話が切れた音。

そこに乃亜と最上が入ってくる。

彩子「ねー、今日は稽古じゃないの？」

乃亜「稽古の予定でしたよ」

彩子「予定でしたってどーゆーこと？」

最上「今日、お前が働いてる間に劇団員で会議したんだよ。今後について」

彩子「今後って、もう稽古期間一週間しかないのに、何で今後のことを話し合いするの」

最上「実はな、次回公演から、作演をこいつに任せようと思って」

彩子「なんで、乃亜ちゃんに？」

最上「こいつ面白いやつなんだよ。最初に俺に台本持ってきたときは駄目だったんだけど、書きなおさせるたびに良くなっていったんだよ」

彩子「それで、みんなは？」

最上「他の劇団員の連中は、彩子の台本でやりたいって言ったんだけどよ、彩子は芝居を辞めたいって言ったら、みんな戦意喪失しちゃってさ。みんな辞めるって」

彩子「私は、芝居を辞めるなんて一言も言ってない！！勝手なこと言わないで」

最上「でも、前の打ち上げの時、そんなこと言ってたよな」

彩子「それは、あなたにもっといい役者になってほしかったから、今のままでダメだから」

最上「それは本当か？」

彩子「本当よ、だからあなたが輝く役を書きたくて作家をしてるの」

最上「それも本当か？」

彩子「本当。私はそんなつもりで智裕のもとを離れたんじゃない？」

最上「じゃあ、なんで正社員で働く？」

彩子「私はみんなと違って、アルバイトで暮らせるほど裕福じゃなかった」

最上「違う、自分だけ安全な場所が欲しかったんだろ？」

彩子「違う、違う、違う！」

○フラッシュ・彩子のリビング・夜

乃亜「いや、彩ちゃんはそんなに謙遜することないよ。彩ちゃんの零から一を作る能力は私は欲しいな」

○彩子の夢・稽古場・夜

彩子「あの言葉はなんなの？」

涙を流しながら頭を抱える。

○フラッシュ・繁華街の露地・夜

最上「お前は安定が欲しいんだろ？ 不安定な俺達から離れたいんだよ」

○彩子の夢・稽古場

彩子「私はそんなつもりはないの、作家としてみんなに認められてたらそれで十分なの！」

○フラッシュ・居酒屋・夜

純「彩さんはすごいねー」

末松「俺はこんな本にあえて嬉しいです」

堀田「こんなセリフ言ってみたかったです」

春美「ありがとう」

○彩子の夢・稽古場・夜

だんだんと彩子の周りが暗くなる。

彩子「みんな。ああー！！」

彩子の雄たけびが活字になって画面に出る。

○未来の彩子のリビング

白を基調とした部屋。

壁一面には本棚。

その本棚の一角には、彼女が書いてるハードカバーの本が並んでいる。パソコンに向かってる彩子。

その姿は雄叫びをあげた時の格好。
パソコンに書いていてことを全部消す。

彩子「あー、ダメだー」

机に突っ伏す彩子。

彩子の後ろから編集者の萩原健一（二八歳）が近寄る。

萩原「大丈夫ですか、先生」

彩子「大丈夫よ。昔の嫌なことを思い出しただけ」

萩原「無理しないでください」

彩子「いいの。そうしないと良い作品は書けないから」

パソコンの画面に向き直る彩子。

彩子「私は過去売っているの」

萩原「とにかく無理しないでください」

少し困惑する萩原。

彩子「（小声で）私は間違っていないよね？」

パソコンの画面に同じ文字。

そのあとに、「うん、それでいい」と入力される。

END

特集小説

力強く暴力的な愚か者によるフォリア

日居月詰

答案にはちゃんと **dance** と書いたつもりだったのに、**a** の上の部分がつながって
れなくて、**dunce** と読まれてしまったらしい。もともと大した結果じゃないから一点
や二点失ったところで気にも留めないが、他でもない俺に対して **dance** の採点を厳し
くするというのは当てつけだろうか。これくらいで減点するのはおかしい、とカジに
詰め寄ったところ、**dunce** の意味を調べてこい、と言われた。

「**dunce** 音節 **dunce** 発音記号 [dʰʌns]

【名詞】【可算名詞】のろま、覚えの悪い生徒、劣等生」

兄貴によればこれもダンスと読むのだそうだ。もっとも、**dance** はダンスとでも
書くべき発音だから厳密には違う。

「お前はダンス、ダンス、って発音してるよな。正しい発音さえ出来ない、まさに
dunce ってやつだよ」

英語の答えは破り捨てて川に溶かしてやった。これで **a** を **o** と書いてしまった事実は、きっとプランクトンが分解してくれる。もしくは太平洋を渡る大魚の腹の中におさまって、カリフォルニアのスシ屋のネタとして並べばいい。有名なダンサーの腹の中におさまってしまえばいい。そして **a** を **o** と発音させるように仕向けるんだ。ヤツがそういうのならば、これからは **dance** を **dunce** と発音することにしよう、そんなムーヴメントがやってくれば、俺は予言者となれる。

いや、そんなまどろっこしい回り道なんて歩かなくても、俺が **dunce** を正式な発音にすればいいだけだよな、と河川敷を離れてゲーセンへと向かうと、ニッタがすでに筐体の前で踊っていた。

「よお、ドゥンス」

目の端で俺を捉えながら軽やかな足取りを見せるコイツの目の前ではハイスコアが計測され、今も加算を続けている。英語の答えはクラス中に広まって、俺のあだ名はドゥンスとなりつつあった。どんな経緯があったのかは知らないが、確かにダンスと呼ぶよりもドゥンスと呼んだ方がわかりやすいし呼びやすい。それなら何一つ構いやしない。

「明日の試合も見ねえの？ 本田も長友も来てるんだぜ？」

ミスがカウントされない画面を横目に見つつ、ニッタはサッカー観戦に誘ってくる。

この間は、確かチャンピオンズリーグとかいう試合を見ようと言ってきたのだったか。「どうせワールドカップには行けるんだろ。なら来年から見よ」

もったいねえ、と画面から目を離さずに言うのに対し、それはお前だって同じだろう、と言いかけてやめた。俺がサッカーを見ないことでメリットを得ているのと同様、こいつにとってもサッカー部をすっぽかしてゲーセンに入り浸っていることが後々役に立ってくるのだろう。それどころかいつだってサッカーをやっているつもりである可能性だってある。この軽やかなステップがドリブルの役に立つかもしれないし、ゲーセンの雑音が歓声に聞こえているのかもしれない。

「ていうか、来年は絶対見てくれるのか。ならいいや」

最終スコアをまるで気にも留めず、こちらを振り返ってくるニッタの姿は、交代でフィールドに入ってくる俺を待ち構えているように見える。

「さあな。今は見るつもりだけど、来年になったらその時はその時だ」

なんだよそれ、と言ってニッタはパッドから降りて順番を譲った。明日の日本代表の試合さえ見る気がないのだから、来年になったら忘れてるのが普通だ。第一、一年すればこいつはまた誘ってくる。こいつが誘ってくれるんだから、いちいち俺が心に留めている必要なんてない。

一年しても結局観戦する気にならないかもしれない。ひょっとしたら、ニッタがサ

サッカー部に戻っていて応援を頼んでくるかもしれない。そしてまた断る。次は四年後のワールドカップ、その次は八年後、ピッチにこいつはいるんだろうか、もしかしたら今書いているサッカー選手にまつわる小論文のおかげでライターになれていたりして……どの道こいつはいつまでも、どこにしよう、スパイクをはいていなかろうと、ボールを蹴っていなかつたら、サッカーをしているのだろう。サッカーの楽しさがわかっていから、こうして誘ってくるのだろう。俺がいつもダンスをしているのと同じなのだ。いつもダンスをしているのが楽しいから、こいつがダンスを教えてくれと言ってくるのを受け入れたのと同じなのだ。もっとも、だからといって俺がサッカーを見るとは限らない。

*

二〇〇二年の日韓ワールドカップは日本サッカーにとってメルクマールとなる出来事だった。九三年のJリーグ創設にもなつて、サッカーにはバブル的な人気が寄せられたが、同時期の経済状況の後を追うように、熱狂は長く続かなかつた。観客動員数の平均を見ればわかるように、九四年の二万人弱をピークに客足は遠のく一方で、日本が初めてワールドカップに出場した九十八年でさえ多少の上がり幅を示した

程度、その上がり幅も継続的な成果の土壌にはなれなかった。

様々な原因が挙げられるが、つまるところ世間はレベルの高いものを見せてくれなければ飽きてしまうのだ。当時の日本代表はワールドカップに出場したところで予選敗退が関の山、サッカーが盛んなヨーロッパとは決定的な差がある。しかし、トップクラスのプレイを見るには時差の問題をクリアしなければいけない。いかにレベルが高かろうと、日本時間の深夜に開催されるヨーロッパの試合を見ようと思いう不眠症の患者は多くなかった。

そんなレベルの高いサッカーが、〇二年になってようやく日本に上陸したのである。チケットの争奪戦を制せずとも、テレビを点ければサッカーにまつわる話題一色、あわよくば練習場に足を運んで選手を肉眼で見ることだって出来る。何よりこれらは普段の生活に溶け込んでおり、会社帰りであろうが休日であろうが（場合によっては職場であろうが）、気が向けば手軽に楽しめるものだった。いわば一か月のお試し期間が与えられたようなものだ。そんな事情を知ってか知らずか、トッププレイヤー達は世間の目を惹くプレイを披露してくれたし、日本代表も予選突破を果たして成長株として売り込むことに成功した。以降、Jリーグの観客動員は爆発的な増加を遂げる。もっとも、日本人だけが旨味を吸い上げたわけではない。大した成績を残せなかったにもかかわらず、憧れの眼差しを向けられ続けた選手が存在する。デイヴィッド・

ベッカム。あれから十年近く経ったとはいえ、その名前を忘れていた日本人は少ないはずだ。十年前に比べ記憶力が衰えている老人だって、ゆるやかなトサカを立てている金髪を見かければ、あんだサッカーやっとなね、と言ってくれらるだろう。第一この男は、ファッションブランドのイメージキャラクターも務めているのである。子供だってサッカー選手とはわからずとも、ハリウッドスターか何かとして認識しているかもしれない。

ともかく、ベッカムは規格外の人間だった。フットボーラーとしてではなく、広告塔として。彼の代わりになる選手はいくらでもいるだろうが、彼以上に話題を振りまける選手は今後一切現れないだろう。なにより、フットボーラーが広告塔になれるのだということを実証した選手として語られ続けていくだろう。何も初めてCMに出演したフットボーラーというわけではない。言っておきたいのは、それ以前のプレイヤーに比べて桁違いの知名度を誇ったという事、そしてサッカーのビジネス化に拍車をかけたという事だ。

たとえば、彼がかつて所属したマンチェスター・ユナイテッドは、強豪であると同時に現在一番稼いでいるクラブとされているが、それはベッカムがいた頃から変わらない。それどころか、土台を作り上げたのはベッカムなのかもしれない。要するに、カッコいい選手をフィールドに出し続けたことでスポンサー収入は増え、補強費にあ

てることによってチームはより強くなっていった、というわけだ。

そうしたビジネスモデルにあやかかって、多くの富豪はサッカークラブを買収し、商業のための広告塔に据えた。資本家だけではない、選手も収入が増えるのならばCMに出るしセミヌードだって買って出るようになった。そんな、フットボーラーがフィールドの外にあっても鍛錬を積まなければならなくなった時代における、最高の成功者がベッカムにほかならないのだ。

無論ベッカムだって、自身が商売の対象として見られていることを十分に自覚していた。フィールドの外ではいわずもがな、ボールを蹴る時も左手を大きく振り上げ、まるでマントを翻す貴族であるかのようなポーズを取る。これから蹴りあげられるのは、民へと分け与えられる黄金であるのだと誇示するように。ゴールを決めれば喜びを爆発させるが、自らを売り出すことも忘れない。ユニフォームを両手でつかんで自らの代名詞である「7」の番号がしっかりと見えるようにし、デイヴィッド・ベッカムが決めたんだ、という周知の事実を濃厚に印象付けるために、重ね重ねアピールし続ける。彼の一挙一動はそういう具合に計算されているのである。

○二年のワールドカップにおいて、他の選手はともかく、ベッカムは間違ひなく自分の名前を売り出すためにプレイしていた。あるいは、いつも自分をコーディネートしながらプレイしている様子を目の当たりにしやすかったのが、日本人だったというだ

けのことかもしれない。ともあれ、大会を通じて一ゴールしか決めておらず、チームも優勝出来なかったのに、なぜあんな熱狂が生まれたのか、という問いには、そういう背景があったのだとの答えを与えるだけで十分だろう。

そんなベツカムが、今シーズンをもって引退した。自らの価値を証明出来る格好の手段であるフットボールに別れを告げ、これから彼はどこに向かうというのだろうか。ハリウッドスターにでもなるのか、それとも実業家としての一步を踏み出すのか、はたまた監督になってフットボールへの情熱を絶やさないつもりか——しかしその場合、彼は守られる存在ではなくなる。これまではスポンサーもいたし、監督もいた。その下で好き勝手に振舞っているだけでよかった人間がフットボールを辞めた以上、これからは自分で責任をもって出資しなくてはならなくなるし、時には選手を守る必要だって出てくる。それがベツカムに出来るのだろうか？ 妻に髪型やファッションを決めてもらっている人間に——ロサンゼルスに移籍した時も妻の意向を受け入れたような選手に——一人で歩いていくための道は伸びているのだろうか？

*

プリントの説明通りにエクセルのファイルを作りこんでいたはずが、気付くとマス

目は全て真っ白になってしまった。ヨシノに事情を説明したところ、今日の授業はやり直せる所まで、残りは時間を作って完成させて次回の授業までに提出しろと言われたので、遠慮なくグーグルを立ち上げた。と言っても、学校のパソコンで検索出来る範囲なんてたかが知れている。エロ動画も見られないインターネットなんて、何の役にも立たないじゃないか。

ふと、「ドゥンス」という単語で検索してみてもどうかと思いつき、入力してみたところ聞き覚えのない外国人の名前が先頭に来た。わかっただけだが、俺のページは一つとしてない。仕方なく「ヨハネス・ドゥンス・スコトゥス—Wikipedia」を開いてみるものの記述も簡素だし、業績も今一つわからない。しかし、「備考」の項目にはこう書いてある。

「英語で『のろま、劣等生』を意味する *dunce* という普通名詞は、スコトゥス学派に対して反対派が蔑称として *Dunses* と呼びかけたことに由来すると言われている」

自分の先祖を知った気分だ。もしかしてこいつも有名なダンサーだったのではないか、と思っただけでしつかりと調べようとしたのだが、ヨシノもこの謎の人物に興味があるのか、後ろから画面を覗きこんでいた。哲学をやってるんですよ、れっきとした学問でしょ、と見かけたばかりの言葉を頼りに弁解をしたのだが、どうやら学校では学問をやっていけないらしい。

スマホの接続速度は遅い上に、スコトゥスにまつわるサイトはPC用のページしかないから見づらいたばかりで腹立たしく、結局図書室の分厚い人名事典をめぐっていたところ、

「ゴトー君、もう授業はじまってるよ」

とレイカが声をかけてきた。まだドゥンスと呼ばないつもりのようなのだ。ここで返事をしてしまったら俺はスコトゥスとは何の関係もない日本人になり、彼の生涯を追えなくなってしまうような気がしたので、返事をしなかったのだが、

「ゴトー君の好きな生物だよ、行かなくていいの？」

レイカは隣に座ってページをめくりづらくしてきた。本読んてるなんて珍しいね、と事典を覗きこんでくることでどの項目を見ているかもわからなくする。別に生物を放っておいて本を読んでいたって構わないだろう。勉強が嫌いでも生物だけは好きなのと同じことだ。

「今は生物が嫌いでも本が好きなんだよ」

「私だって生物嫌いだよ、キャラ被せてこないで」

ふざけた言葉だ。県内十位以内に入れる学力の持ち主が言うべきセリフじゃない。そう言いかけたが、かといって勉強が好きとは限らないとっぺ返しを食らわされる

と予測し、事典を閉じることにした。まあ、これでレイカもサボれなくなったから、おあいこだろう。

「俺の授業で不真面目になったらいいよ救いようがなくなるぞ、お前」

遅刻の謝罪は形式どおりに済ませたが、パパ先生の言い分はごもつともだ。とはいえ、冗談めかしてなだめてくれる上に、俺の置かれている状況を的確に言い当ててくれる先生の許を離れるなんて考えもしないが。一方レイカは、問題児を捕まえてきたことを褒められていた。

スコトウスにまつわる情報は兄貴のパソコンから仕入れる他なかったのだが、運悪くデートにかちあってしまった。今日はおっぱいの小さいバイト先の同僚だ。ドアの音を消してくれた声を分析しつつ、冷凍庫を開くと業務用のバナナアイスが仕入れられていたので、マグカップでパフェを作る気が湧いてきた。フレークを底につめてアイスをかぶせ、これまた業務用のホイップを重ねてバナナを敷き詰めチョコレートシロップをかければ出来上がり。スプーンでほぐしている分にはウマくて仕方ないが、赤いカップを眺めながらベッドのきしむ音を聴いていると、やっぱりパフェは透明のグラスで作るべきだと認識は確かになる。様々な具材が折り重なっている姿を目でも楽しめるから美味しいのであって、舌だけで楽しんでいるのはパフェではない。家にはそんな演出を助けてくれる適当なグラスは存在しないから、口の方から覗いてデコレ

ーションの一部を眺めるしかないのだが、それがいかにもさもしくて一気に空にしてしまった。とはいえ、中身が空になった赤いマグカップの断面を見つめているのも寂しい。寂しさの中でおっぱいの小さい女の子が精いっぱい張り上げた声だけが響く。彼女だって、自分が兄貴の本命だと思っている。サークルの仲間も、高校の同級生も、院生の先輩も。この家で鳴り響いた声を兄貴に当てつけるようにもう一度反響させていても、天井越しにいるドン・ファンには届いていかない。ひょっとして、兄貴自身も誰を本当に愛しているかわからないんじゃないか……寂しさが募るのに耐えきれなくななんてたかが知れている。エロ動画も見られないインターネットなんて、何の役にも立たないじゃないか。

ふと、「ドゥンス」という単語で検索してみてもどうかと思いつき、入力してみたところ聞き覚えのない外国人の名前が先頭に来た。わかつてはいたが、俺のページは一つとしてない。仕方なく「ヨハネス・ドゥンス・スコトゥス—Wikipedia」を開いてみるものの記述も簡素だし、業績も今一つわからない。しかし、「備考」の項目にはこう書いてある。

「英語で『のろま、劣等生』を意味する *dunce* という普通名詞は、スコトゥス学派に対して反対派が蔑称として *Dunses* と呼びかけたことに由来すると言われている」

自分の先祖を知った気分だ。もしかしてこいつも有名なダンサーだったのでない

か、と思っただけでしつかりと調べようとしたのだが、ヨシノもこの謎の人物に興味があるのか、後ろから画面を覗きこんでいた。哲学をやっているんですよ、れっきとした学問でしょ、と見かけたばかりの言葉を頼りに弁解をしたのだが、どうやら学校では学問をやっていけないらしい。

スマホの接続速度は遅い上に、スコトゥスにまつわるサイトはPC用のページしかないから見づらいためばかりで腹立たしく、結局図書館の分厚い人名事典をめぐっていたところ、

「ゴトー君、もう授業はじまっているよ」

とレイカが声をかけてきた。まだドゥンズと呼ばないつもりのようなのだ。ここで返事をしてしまったら俺はスコトゥスとは何の関係もない日本人になり、彼の生涯を追えなくなってしまうような気がしたので、返事をしなかったのだが、

「ゴトー君の好きな生物だよ、行かなくていいの？」

レイカは隣に座ってページをめくりづらくしてきた。本読んでるなんて珍しいね、と事典を覗きこんでくることでどの項目を見ているかもわからなくする。別に生物を放っておいて本を読んでいたって構わないだろう。勉強が嫌いでも生物だけは好きなのと同じことだ。

「今は生物が嫌いでも本が好きなんだよ」

「私だって生物嫌いだよ、キャラ被せてこないで」

ふざけた言葉だ。県内十位以内に入れる学力の持ち主が言うべきセリフじゃない。そう言いかけたが、かといって勉強が好きとは限らないとしゃべ返しを食らわされると予測し、事典を閉じることにした。まあ、これでレイカもサボれなくなったから、おあいこだろう。

「俺の授業で不真面目になったらいいよ救いようがなくなるぞ、お前」

遅刻の謝罪は形式どおりに済ませたが、パパ先生の言い分はごもつともだ。とはいえ、冗談めかしてなだめてくれる上に、俺の置かれている状況を的確に言い当ててくれる先生の許を離れるなんて考えもしないが。一方レイカは、問題児を捕まえてきたことを褒められていた。

スコトウスにまつわる情報は兄貴のパソコンから仕入れる他なかったのだが、運悪くデートにかちあってしまった。今日はおっぱいの小さいバイト先の同僚だ。ドアの音を消してくれた声を分析しつつ、冷凍庫を開くと業務用のバナライスが仕入れられていたので、マグカップでパフェを作る気が湧いてきた。フレークを底につめてアイスをかぶせ、これまた業務用のホイップを重ねてバナナを敷き詰めチョコレートシロップをかければ出来上がり。スプーンでほぐしている分にはウマくて仕方ないが、

赤いカップを眺めながらベッドのきしむ音を聴いていると、やっぱりパフェは透明のグラスで作るべきだと認識は確かになる。様々な具材が折り重なっている姿を目でも楽しめるから美味しいのであって、舌だけで楽しんでいてはパフェではない。家にはそんな演出を助けてくれる適当なグラスは存在しないから、口の方から覗いてデコレーションの一部を眺めるしかないのだが、それがいかにもさもしくて一気に空にしてしまった。とはいえ、中身が空になった赤いマグカップの断面を見つめているのも寂しい。寂しさの中でおっぱいの小さい女の子が精いっぱい張り上げた声だけが響く。彼女だって、自分が兄貴の本命だと思っている。サークルの仲間も、高校の同級生も、院生の先輩も。この家で鳴り響いた声を兄貴に当てつけるようにもう一度反響させていても、天井越しにいるドン・ファンには届いていかない。ひよっとして、兄貴自身も誰を本当に愛しているかわからないんじゃないか……寂しさが募るのに耐えきれなくなつてダンスホールへと向かうことにした。

時間が経つ中でスコトゥスにまつわる認識は不安定になっていく。ともかく名前だけでも覚えやすいようにしなければ調べる余地もない。だから、経歴を勝手に作り上げていく。

有名なダンサーである彼が四十二歳という若さで亡くなったのは、独自に編み出したダンススタイルを披露したところ、あまりの革新性に観客が興奮しすぎて乱闘騒ぎ

が起こってしまいスコトゥスまで巻き込まれてしまったせいだった。ダンスに対する探究心が強すぎたために「精妙博士」と呼ばれるほどだったが、自由奔放なスタイルを求める派閥と対立しており、乱闘騒ぎに巻き込まれ死亡に至ったのもドサクサにまぎれて暗殺されたのではないかという見方がもっぱらである。dunceが「のろま」を意味するのもひとえに、一つ一つの動作を重視するがあまりリハーサルで一曲踊りとおすのに何十分もかかってしまうからだ。彼は人間がダンスを操るとは全く考えておらず、その逆に、ダンスが人間を操ると考えており、あたかも神の啓示を聴くかのごとくダンスの方からふさわしい動きを教えてくれるのを待ち続けていた。だからこそ、自由奔放なスタイルを奉ずる連中の言い分には耐えきれなかった。ヤツらはダンスのおかげで食っていけると考えてはいない、あたかも犬を散歩させるかのごとくダンスを扱っている、逆だ、犬だって人間を散歩へと心向けさせるように従順なフリをしているだけにすぎないんだ……。

「よう、今日は調子悪いな」

パフェをつついていけると、シーさんが声をかけてきた。どのあたりが、と訊いても詳しくは言えないようだったが、なんでも楽しそうにダンスをしていないらしい。少なくとも今はダンスに比べてスコトゥスについて考える方が楽しい。

「シーさんはさ、ダンスしながら神を考えたことってある？」

「ハハッ、ふざけたこと言い出すな。神様が見てたら罰しか与えないんじゃないか？」
シーさんが指さす先では、シャツのボタンを開けてブラジャーをさらけ出した女が店長を立たせてポールダンスといわんばかりに全身をくねらせている。

「でもあれって、元をただせば男の体を見立ててるわけだから……」

「コピーの上にコピーを重ねてるわけだ」

ブラジャーは肩ヒモが外れて今にもおっぱいが露わになってしまっそうだ。パッドのおかげでズレたところで問題はないのだけど。

「あるべき姿に戻った、とは言わないんだね」

「宗教によっちゃ姦淫も罪になりかねんからな」

スコトゥスは紊乱を極めたダンスフロアに入り浸りながらも聖書を読むことは忘れなかった。人間の体は神の被造物である、聖書の記述は曲げられない。その可能性を最大限に引き出そうと努める行為はすなわち、神への敬虔を示す祈りと同義なのである。

「本物も偽物もひっくりかえりて愛してくれる神様なら信仰するんだけど」
「だったらこの世にいる人間はみんな神を信じてるってことになるな」

今日のところは「Dunce」について教えてくれ」とメッセージボードに書きとめて引

き上げた。♫と♫が間違っていると抜かすヤツはその時点で相手にするまでもない。

*

フットボーラーがファンから愛され続けるには、なにより鮮烈な第一印象を残さなければいけない。人間は一目惚れから抜け出せない生き物なのだ。これまで見てきたプレイとは一味違うパフォーマンスに出会った時、人は情報を処理しきれずに思考停止に陥ってしまうだろう。だからこそ、人々はスタジアムに足を運び続ける。あの時見せてくれた衝撃的なプレイの意味を明らかにするために、あるいは、再び我々の理解からはかけ離れたプレイを見せてくれる瞬間を見逃さないために。

その意味において、ベツカムは過不足ない“デビュー”を飾った。九六年のリーグ開幕戦にて、ハーフラインでボールを受けると、ベツカムは突如左腕を大きく振りかざした。どうやら、相手ゴールめがけてボールを蹴りあげるらしい。とはいえ、ハーラインからゴールまでは五〇メートルあるのだ。よしんばボールが枠内を捉えたにしても、キーパーが反応するには十分な滞空時間が掛かってしまう。この細身にして金髪をなでつけている、バツキングガムに住んでいそうな坊ちゃんの企ては、無謀に他ならないというわけだ。蹴りあげた瞬間、キーパーもこの愚行をたしなめんどばかり

に後ろへと下がっていった。しかし、思いのほかボールには勢いがある、おいおい、スピードの割にはしっかりとゴールマウスを捉えているじゃないか——あわてて手を伸ばして飛び込んだキーパーは、ボールと一緒にゴールネットへと突き刺さっていた。

もっとも、こうしたプレイ自体は（技術が必要とはいえ）キーパーが蝶々にたぶらかされでもすれば一年に一回は見られるものだ。この貴公子が平民と違っていたのは、ボールを受け取ったと同時に、背筋を伸ばして悠然とゴールを見据えた点である。普通ならば功を焦って猫背になってでも蹴り出すところだが、ベッカムはキックしてからも姿勢を保ち、ボールが描く放物線を見守っていた。誇張すれば、彼にとつてゴール出来るかどうかは問題ではないのである。終始均整の取れた態度を取り続けていられるかどうか、最大の関心事だった。

ファンはファッションとフットボールを両立させる新星に愛を寄せたが、それはチームメイトとて同様だった。キャプテンのエリック・カントナは、このゴールが決まる前からベッカムを練習のパートナーとしていた。若き有望株から放たれる正確なパスは、エースによって豪快にゴールへと叩き込まれる。そんな光景を象徴とするように、二人は対照的な特徴をもっていた。育ちの良さそうなベッカムに対して、カントナはギャングそのものであり、一メートル九〇の巨軀を持つ上に坊主頭でヒゲまでた

くわえている。カントナのファンサービスといえは罵声を浴びせてきた観客にカンパーキックをお見舞いするといったものだし、引退してからは俳優業に精を出しているものの、ベッカムの垢抜けた佇まいに比べてイロモノの感はぬぐえない。

もっとも、「チームなんてどうでもいい、俺が目立てばいいんだ!」と思っている点では、彼らは間違いない似た者同士だった。自分の信念を遠慮なく言葉にしたカントナと、韜晦を続けければファンから愛され続けるとわかっていたベッカムという違いがあるだけで。

同じユニフォームをまといながら、ベッカムはカントナを参考にライフ・プランニングを進めていた。破天荒なギャングの跡を継いだのが愛想の良い美男子となれば、上手い具合にコントラストを作り出せるから人気は高まっていくだろう——そんな出世のための目論見を知ってか知らずか、キャプテンは正確なボールを蹴れと要求し続けた。どういう態度を取るにせよ、目立つことを考えるのならば努力だけは忘れな

いでおくとアドバイスするかのようには。

ベッカムがイングランド代表にも召集されるようになる、カントナは伝統あるエースナンバー「7」を明け渡すためにピッチから去った。少なくとも実力において、ベッカムはナンバー「7」にふさわしい選手となっていた。問題は、精神面において卓越したプレイヤーになっているかどうかだった。カントナなら、ブライングを浴び

せられても相手をタコ殴りにしてしまえば勲章として語られるだろう。だがベッカムは、苦境にあってもヤケになっただけとはいけないと自分を律さなければならなかった。こうして彼は初めての大舞台である、フランスワールドカップに臨むこととなる。

決勝トーナメント初戦の対アルゼンチン戦、ベッカムは予選リーグでゴールを決め、意気揚々とこの日を迎えていた。ファンに愛されている上に、容姿もよく、実力も確か。そんな若造に嫉妬を向ける人間がいてもおかしくはない。アルゼンチン代表のキヤプテン、ディエゴ・シメオネはその中でも最も狡猾な選手だったろう。この選手は相手の性格を見抜く力があつた。なんでも田舎生まれの成り上がりだそうだが、きっと自分一人で自信を支えているに違いない、ちょっと上手くいかないことがあればすぐにポロを出すだろう……試合開始から反則スレスレのボディコンタクトがベッカムを襲った。全ては審判の見えないところで行われ、違法を訴える声は証拠不十分として棄却される。膝で背中を蹴られても、ほかならぬ被害を受けた身体が一部始終を隠してしまふ。倒れた際に押し掛かれても、勢い余つての事だからやむなしと情状を酌まれる始末。いよいよ耐えきれなくなつて、義憤に燃える青年は倒れ伏しながら卑怯者を蹴りあげた。きっとこれも起き上がった拍子の事故とみなしてくれるだろうと、ヘボ審判への当てつけを見込んで。しかし、彼の演技はあまりに下手糞だった。レッドカードを掲げられ退場を命じられたのはシメオネではなく、ベッカムの方だった。

アルゼンチンに敗れた翌日、イギリスのメディアは一斉にこの大根役者を罵倒する。カントナには観客にカンフーキックを浴びせたシーンこそ人生のハイライトだと言うだけのふてぶてしさがあつたが、ベツカムはこの時引退を考えたという。狡猾な選手やへポ審判に対する復讐心はあつたが、ファンを見返してやろうという反骨心はなかつたらしい。

これに見かねて手を差し伸べたのが、マンチェスター・ユナイテッドの監督である、アレックス・ファーガソンだった。ベツカムをスターダムに押し上げた恩師にしてみれば、やれやれ、と言つた心境だった。田舎町から“養子”として預かつて以来、この子供には手を煩わされっぱなしだったのだ。カントナが暴挙によって出場停止になつていた間、若い選手を中心に据えたチームは苦戦を強いられ、メディアからもユーザーチームで戦おうなんて笑わせる、と言われたものだが、きつとお前ならやれると声をかけ続けた末に、リーグ優勝を成し遂げた。ヴィクトリアとかいう売女のようなポツプスターを嫁に迎えた時も、性病を疑う声に苦しむ“息子”に対して、こう声をかけたものだ、お前は観客とサッカーをするわけじゃなかろう……何も変わっちゃいない、いつもと同じ事が繰り返されるばかりだ、きつとこれからもうに違いない、なにより全ては初めからわかつていたことである、この程度の苦勞なら買つてでも引き受けよう。

*

「ねえ、あそこに連れてってよ」

ホームルームが終わるとレイカが声をかけてきた。ラブホテルに？ と訊ねてはみたが、お気に召す答えではないらしく、平手打ちのポーズを取って頬に手を添えてくる。

「ダンスホール。今日は友達と遊びに行くって連絡済み」

ラブホテルと何か違いがあるんだろうか？ ダンスの種類が違うだけなのだが。もっとも、レイカと手を取り合って踊ったことはない。シャル・ウィー・ダンス？ と誘いかけようものなら、レイカは意味をそのままに受け取って、代わりにあなたの方へ行くお店に連れて行ってよ、と言う。まかりまちがっても、優等生が行くような場所ではないのに。少女の将来を思ってたとか、親御さんへの責任を取るのが面倒だから、言い訳は色々と考えられるのだろうが、つまるところお前には似合わない場所なんだよ、と言って俺はつないだ手を離してきたのだ。

「ゴト―君がそんなに冷たいと、そのうち一人であそこに入り浸っちゃうよ」

「その前に店長やシーさんに追っ払われるだろ」

ニツタまで入り浸らせている時点でフーエーホーに抵触しかねないのだ。荷物は軽い方がいいだろう。

「じゃあ余所の店に入り浸る」

本末転倒だ、と言いかけたが、愛想を尽かすぞ、とのメッセージとも取れる。愛する人を大事にしる——親父が言いそうな事に従ったのに、何でこんな目に遭わなきゃいけないんだ？ やっぱり、親の言う事なんて聞くべきじゃない。

後ろにレイカを引き連れながら、このままラブホテルに連れ込んでここがダンスホールだよ、と言えば話が丸く収まらないだろうか、と思いつつ校門を抜けると、道の向こうから黒人が手を振っていた。視線がこちらを向いている。初夏とはいえベージュのポロシャツに短パン。懐の余裕がちょっとくらいの涼しさでも我慢させるってなつもりか。

エキゾチック・パブのスカウトだろうな、とレイカを後ろに隠したが、それでもひるむ様子はない。むしろ俺に用事があるらしく、指を差して何やら声をかけてきた。振り向いて通訳を仰ぐが、英語ではないそうだ。

「アナータガ、ゴー・トークン？」ようやく日本語らしい声が聞こえてきた。

「マイネームイズ、ドゥンス……」

とぼけたつもりだったが、よく考えれば英語を解さない可能性がある相手だった。

ところが、お望みの答えに巡り合ったかのごとく黒人はオーと声を上げ両手を広げた。そうしてスマホを取りだし、「Dunee について教えてくれ」と汚い黒字で記されたホワイトボードの写真を示しながら、こう言った。

「ドゥンスニツイテ、シッテール」

よりによってそこだけしっかりとした日本語をしゃべりやがって。もしかして練習でもしていたのだろうか。

にこやかな顔をしている黒人に対して、どんな態度を取っていいものか迷った。スマホに写る汚い字を書いたのは俺だ。が、あの頃とは違ってドゥンス・スコトゥスなんてどうでもよくなっている。もっとも、逃げ道がないわけではない。Dance じゃないよ、Dunee だよ、と言えば勘違いとして扱われる可能性が残っている。失望するに違いないが、被害は最小限に抑えられるだろう。今は勘違いに賭けるしかなかった。偉大なるダンサーについて語り合えるはずだった少年が、彼を忘れ去った世間と同様の冷たい反応を示すなんて、耐えきれない事実だろう。

しかし、意に反して相手は小首を傾げた。精いっぱいジェスチャーで、ダンスなんて教えてほしくない、ドゥンスについて教えてほしいんだ、と伝えたが、黒人はわけのわからないジェスチャーで返してくる。唯一つかみとれるのはスキンヘッドを手でなでつけた意味くらいのものだ——ズラが取れそうな天気だな——雲がまばらに

広がっている空を見上げているのだから、間違いない。

「もしかしてさ」それまで黙っていたレイカが口を開いた。「この人も♫と♫を間違えてるんじゃないの？」

どういふことかわからずに、目の前の男の青い瞳を見たところ、まばたきをしながらこちらを見つめているので、疑問を抱いている点において俺達是一緒らしい。段々とコミュニケーションが取れていると感じた。

「要するに、この人も♫・♫・♫・♫・♫っていう風にスペルミスしてるってこと」

もう一度青い瞳を見据えると、再びスマイルが浮かんだ。女子高生の口からスペルマなんて言葉が聞けるとは、と喜んでいいる可能性もあるが、ともあれ、途端に親近感がわき上がってきて、ダンス、もといドゥンスをレクチャーしてもらいたいという気が湧いてきた。

彼の名前はグルークと名付けた。文脈を頼りにそう呼んだところ嬉しそうにしていたのだから、間違えていたとしても構わないだろう。アメリカから来たのかと訊くと、首を振った。ブラジル、メキシコ、サウジアラビア、知っている国をとにかく挙げてみたが、すべて違うと答えられた。試しにスコトウス、と言ったが、そんな国はないとレイカにとがめられてしまう。

セイジによって国を追い出された、とグルークは言った。

「セイシ、ナイ」

政治によって窮地に追い込まれたのならば、精子だって枯れるだろうし、生死を賭けることにもなるだろう。どの道、死活問題というわけだ。

それからはレイカも理解出来ないほどの複雑な話が続いたが、ドゥンス、ドゥンス、と連呼していることから、彼がダンスに全てを賭けていること、それから自分の持っているすべてを俺に伝えようとしていることは知れた。

それに、悔しそうに日本に來た経緯を話している様子だけでも何もかもわかるものだ。おおよそはこんなところだろう。彼の祖国ではダンスのスキルこそがステータスであり、出世するにも支配者に媚態の舞を披露することが必要なのだ。グルークはホープであり、皇帝の寵愛を得られたものだけがのし上がれるシステムに疑問を抱く者だった。ダンスは国民全員によって自由に踊られるべきものだ。誰もが疑いえないパフォーマンスを見せれば、この国は変わるだろう。しかし、彼の努力が実を結ぶことはなかった。というか、陰謀によって夢への道は閉ざされてしまった。

あいにく我が国のダンスに対する風当たりだって最近はよろしくないが、グルークにとってみれば生ぬるいものだろう。もっとも、沸騰に向けてのト口火は焚かれていると見ている。今のうちに優秀なダンサーを育て、権力に対抗出来るだけの力を蓄えておかなければいけない。少なくともこの国ではまだ、踊る力があれば社会は変えら

れるのだという分析のもとに。

「だけど俺だって、自分より力の劣るダンサーに師事するつもりはなかった。いかに彼が祖国では有数のダンサーとはいえ、いまだに前時代的なテクニックに頼っている可能性もあるのだ。まずはダンスを見せてくれる？ とレイカ力の通訳を介して伝えると、自信ありげにうなずいてみせた。

「じゃあ行こうぜ……お前は来るなよ」

「私がいなきゃ何言ってるか全然通じないでしょ」

店長にはJKパブのキャッチから逃げ切れなかったと言っておいた。幸い、平日の夕方は静かな雰囲気か店を包んでいる。客がまばらに席を取り音楽だけがうるさく流れるだけで、ステージもガラ空き。これなら何一つ魅力に感じることなく帰ってくれるだろう。レイカはきよるきよると店内を見回しているが、靈感がない限りランチキ騒ぎなど見られやしない。

ステージはグリークのために空けられていたらしい。シーさんはすでにそのパフォーマンスを目の当たりにしていて、これなら俺にも会わせないと損だと思ったという。「すっげーぜ、なにがすげえて、俺でも理解出来ねえところがすげえ」

胸やけがうつりそうな息を吐きかけながらシーさんは言う。グリークがステージを上っていった、ライトが点いていないから顔色はほとんどわからなくなった。BGM

が途端に消えて、客も何事かとステージへと注意を向け始める。スキンヘッドが灰色に照らされたかと思うと、前傾姿勢を取る黒豹が姿を現し、イントロと共に動きだした。

*

有能なる監督アレックス・ファーガソンのおかげでベッカムは立ち直り、その後チームとともに最盛期を迎えることとなる。ワールドカップの翌年、マンチェスター・ユナイテッドはあらゆるコンペディションで強さを見せつけ、三冠の快挙を達成した。特筆すべきはヨーロッパ最強のクラブを決するチャンピオンズリーグのファイナル、対バイエルン・ミュンヘン戦。このドイツリーグチャンピオンが有利に試合を進め、○対一のまま勝敗は決するかに思われた。トロフィーには今や遅しとバイエルンの口ゴを認めたりボンが巻かれていく。その瞬間をベッカムは見逃していなかった。怒りのあまり吐き気さえ催した彼は、試合終了間際のコーナーキックを苛立ちながら、それでいて正確に蹴りあげる。勝利を目前に浮き立っていたバイエルンのデイフェンダー達は処理を誤り、結果、シェリングラムによる同点ゴールを許してしまった。動揺を抑えきれないバイエルンは、延長に逃げ込む事も出来ず、またもコーナーキックを与えてしまう。ベッカムは容赦なく鋭いボールを放った。いつもと同じフォームで、態

勢を崩すことなく。シェリンガムの頭に届いたボールは、ゴール前で待っていたスールシャルへと渡り、ゴールへとダイレクトで蹴りこまれていく。あとはユニイテッドの勝利を告げるホイッスルが鳴るだけだった。

その後、精密機械のような右足はイングランド代表の危機も救い、かつての汚名は完全に雪がれたかに思われた。日韓ワールドカップこそ、骨折の影響により本調子のプレイは見せられなかったものの、かつてのような罵詈雑言は聞こえてこない。この救世主がいなければ極東へのチケットは手に入れられなかった上に、足をひきずらせてまで旅のご同行を願ったのだ、これ以上高望みをすれば罰が当たるといふものだろうか？

国の威信をかけて闘った選手達に向けて、エリザベス女王はバッキンガム宮殿への招待状を送った。普段ユニフォームを着て荒々しくプレイしているフットボーラー達が、いまさら宮殿の仕来たりに恐縮することなく従えるはずもない。そんな中、何を間違えたのか選手達の列に王族の青年が、端正な佇まいを保ちながら混じっている。いや、鍛え上げた肉体がスーツ越しにうかがえるからフットボーラーなのか、もしかしたら王族のご依頼で極東調査にでも派遣された、ともかく由緒正しき方なのだろうか……国民はそんな風に謁見の様子を見守っていた。

一方、ファーガソンは怒りを込めてテレビを見つめていた。あいつは骨折のリハビリ

りを途中で切り上げて極東へと向かったのだ、となれば次のシーズンへ向けて一刻も早くコンディションを整えなければならぬのである、女王陛下から与えられる名誉がなんだ、フットポラーはフットボールによって名誉を築き上げていくべきだろう！

とはいえ、女王との謁見だけならファーガソンも目をつむったかもしれない。彼だって大英帝国からサーの称号を贈呈されているのだ。問題は、“息子”がフットボールをおろそかにするのは今回が初めてではないということだった。とくに芸能人であるヴィクトリアと結婚してからは急情に拍車が掛っていた。ミーティング中にデートの約束を取り付ける電話がかかってきて集中を削いだこともあれば、ファッシュションに精を出す妻の代わりに子供の看病をして練習を休んだこともある。加えて、日々名声が高まることによって舞い込んでくる取材要請に応えることで練習の時間はさらに削られていった。これまではベッカムが結果を残していたから良かったものの、“舅”と妻の機嫌を取るための綱渡りは荒業だった。そして均衡は、日韓ワールドカップの翌年に崩れていく。

ある試合の前半終了後、ユナイテッドのロッカールームではいつも通りファーガソンの怒号が響いていた。矛先はベッカムに向けられている。なんでも相手選手のマークを怠って失点の原因となったとのことだ。まあ、ここまで何十試合もこなしている

のだから、疲れているのだろう。チームメイトは事態を深刻にとらえていなかった。それよりも後半に備えることが大事だ、たとえ“親父”がシューズを蹴り飛ばそうが……しかし、シューズの金具はベッカムの左眉をかすめた。

事態はヴィクトリア——メディアのやり口を知りつくしているゴシップの女王——によってリークされ、新聞記者の飯のタネとなった。ベッカムが事件後初めてファンの前に姿を現した際、これみよがしに傷口を晒したことで、ファーガソンも言い訳は出来なくなっていく。

それにしても、男前の左眉に貼られたテーピングはマヌケだった。傷は眉に沿って直線を形作っているのに、二枚のテーピングは傷口の真ん中を中心として「×」印を作るばかりで、治療の事なんかまるで考えていないのだ。観客に向けて同情を引くにも、我々は悲劇を見に来たのだが、と踵を返されるのがオチだろう。自分一人でそんな策を選んだのならオツムが弱いことは疑いようがないし、弁護士か妻にでも入れ知恵されたなら尚更だ。

もっとも、当時二八歳の大人がそれまで取ってきた態度を鑑みれば、失望するほどのことでもない。この男はフットボール以外の報復の手段を知らないのだ。シメオネに嵌められた時も拙い立ち回りしか出来なかったし、痛がるフリをして時間を稼ぐ相手選手めがけて正確なボールを蹴りつけたこともある。そうしてフットボールでやり

返せないとわかると、たいてい他人にすがりつかざるをえない。ファーガソンなり、メディアなり、あるいはヴィクトリアなり。

とはいえ、繰り返すことにはなるが、フットボールで報復が出来るなら彼は無類の力を発揮するのである。事件の二カ月後に行われた、チャンピオンズリーグの準々決勝、対レアル・マドリー戦。ファーガソンはベッカムをベンチに据えていた。いうまでもなく懲罰である。もっとも、世界最高クラスのプレイヤーを複数擁するチームを相手に、中心選手を欠いては太刀打ち出来るはずもない。リードをじわじわと広げられ、勝利への望みが絶たれていく中、どういふ風の吹きまわしか監督は反逆者をピッチに送る。

すぐさまフリーキックのチャンスが訪れた。ベッカムはいつも通り左手を振りかざし、キーパーが一步も動けないほどの美しいシュートをゴールへ送り込む。勢いを取り戻したユナイテッドだったが、時間は残されていなかった。やけくそにでもボールを前線に送って奇跡を待たせない。無理にでもシュートを打ってキーパーのミスを誘うしかない。ようやくボールがゴールへと転がっていくが、ディフェンダーもフォロウに走っている。だがそれよりも先に、背番号「7」の右足が伸びている。

しかし、その二つのゴールで勝敗が覆るわけでもなく、ユナイテッドは敗れた。ベッカムはチームを去り、この時の対戦相手であるレアル・マドリーへと移籍することと

なる。師弟関係が崩壊した理由を探ろうとするジャーナリストは、シーズンが終わってからも後を絶たなかった。旧時代のフットボーラーであるファーガソンと、新時代のフットボーラーであるベッカムという御大層な対立構造を作り出す者もいれば、若手にチャンスを与えることでチームを活性化する狙いがあったと結果論を語る者もいる。

ハッキリしているのは、“父親”が自分の言う事を聞かなくなった“息子”を放逐したということだ。差し詰め、これまで育て上げてやったのはワシだというのに、甘い言葉を並べるスポンサーやピッチにうつつを抜かしおって、といったところだろう。ヤツは人間としても、フットボーラーとしても、一人では何も出来やしない。誰かに助けてもらいながら生きていくしかないのだ。

そんな恨み節は的外れでもなかった。元々マドリーには、ベッカムを招く必要のない戦力が揃っている。それでもなお獲得に動いたのは、彼が引き連れてくるスポンサーから多額の資金を吸い取れるからだだった。スポンサーの庇護がなければ、移籍交渉はまとまらなかったかもしれないのだ。

念のため付け加えれば、実力がなかったわけではない。ユナイテッドでの功績は言うまでもなく、マドリーに入ってからも広告塔として出場させるために慣れないポジションを任されたが、与えられた役割はしっかりとこなし続けたし、右足のキックは

チームでも一、二を争うレベルだった。とはいえ、涙ぐましい努力が勝利に結びついたわけでもない。ベツカムを出場させるため、チームは大きくバランスを崩した陣容で臨んでいたのだ。

結果、三シーズン続けてマドリーはタイトルから遠ざかっていった。いくら人気がある選手を擁していても、勝てなければ収支の折り合いは悪くなっていく。方針を転換した首脳陣は、フレッシュな若手を多く獲得して現場の刷新を図り、一方でベテランを粛清した。補強費を捻出してくれるベツカムはひとまず残留させたが、ベンチ以外に与えられる居場所はなかった。

*

「精子と卵子でもわかる通り、二つの細胞が一つに融合して生殖が果たされるのが普通なんだが、ゾウリムシの接合はちょっとわけが違う」

ババ先生は黒板にゾウリムシの絵を描いていく。だけど細胞内部の図が雑すぎて、明太子を思い出させた。とりあえず、大きな核と小さな核の二つが見える。

「二匹のゾウリムシは一つにくっつくが、融合はしない。二匹の境界はくっきりとわかれている。それから小核が分裂して四つに分かれるが、残るのは一つだけ。あとは

捨てられる。これが再び分かれて、片方が口を通じてもう一匹の方へと運ばれていく」とくに描き加えることなく説明されていく接合の様子は、頭の中で動画を組み立てるしかない。口が開いて、喉の奥には核が覗く。赤黒く、脈打っているそれは早く相手の鼓動を感じたいと言っているようだ。お望み通り、口を差し入れて取りだしてやる。そして呆けたように開けっぱなしにしている口を、内側からえぐりだした核で塞いでやる。

「残っていた核と、交換された核が融合して受精核となる。ゾウリムシはまた二つに分かれるだけだ。細胞内部で受精核は分裂を繰り返して、大核も巻き込んでごちゃ混ぜになっていく。やがて新しい大核が現れ、古い大核は細胞分裂の手助けをするだけになって、若返りに成功。おかげさまでゾウリムシの寿命は延びて、めでたし、めでたし」

ちなみに、古い大核は細胞分裂と共に消えていく、と言ってチョークが置かれた。最終的にはゾウリムシの内部に大きな核が二つ、それから小さな核がいくつか散らばっている。とりあえず明太子を思い出すことは避けられたが、今度はブラックホールだらけの生き物に見えてきた。

「でも、相手の小さな核もヨボヨボだったんでしょ。なんでそれで若返られるの？」
「この受精核が新しい組み合わせと認識されるから。要するにこれは知らないものだ

から新しいものとして育てようと思う。しかも育てるべきものは自分の年齢を決めるものだから、年齢がリセットされるって寸法だ」

それで十分だろうと言わんばかりに黒板を消していった。ひとまず明太子の形をしたゾウリムシはそれでリセットされたことになる。次はどんな形をしたゾウリムシが現れるのだろうか。

「接合する前と接合した後って、違うゾウリムシなのかな」

「ゾウリムシはゾウリムシだよ。今は二匹でしかやらなかったけど、こういうことが何千何万回と行われてる。目の前にいるゾウリムシ達の小核の断片が、自分の中に全部取り込まれているかもしれない。それどころか、皆が皆同じ小核の断片の組み合わせで出来ているかもしれない。個体差なんて、皆無に近いんだ」

なるほど、あのブラックホールがゾウリムシをことごとく吸い取ってしまうのか、と黒板に描かれていた核だらけの姿を思い出す。次に、レイカの顔が浮かんでくる。レイカとキスしたら、俺の中の何かはあいつへと移って、あいつの中の何かは俺へと移る。俺は劇的に変わってしまうだろうが、レイカは変わるのだろうか？ やっぱり不真面目になってしまふのか、それとも何かが間違っって真面目になっていくのか。どっちも虫唾が走る。ほどよく真面目で、ほどよく不真面目のレイカのほうが、ずっと好きだ。

「面白いね、口移ししたおかげで生まれ変わるって。しかも、恋人の核と一緒にずっと生きていくわけか」

「浮気者だからずっと、ってわけにはいかないけどな」

「なるほど、ゾウリムシに生まれたかったな」

「それじゃお前の個性もなくなっていくぞ」

ぶっきらぼうに椅子へと座り込んだ先生は、窓へと目を向けながら溜息をついた。そろそろタバコが恋しいらしい。吸ってきなよ、と言ったが、切らしてしまっているようだ。

「ま、何事も自分に引きつけて考えないことだ。ゾウリムシの世界はゾウリムシの世界だし、ミドリムシの世界はミドリムシの世界である」

ニコチン中毒とモットー中毒が混ざった蹴りが机を転がした。でも、こうして余所の世界を覗き見するのは人間ならではのよね、と言いかけたけど、そりゃ哲学の話だ、とまた怒られてしまうのでやめにした。

ゾウリムシのように人間が生きられたら、と思い描いてみる。人間が不死に近付いたら地球がパンクしてしまっておしまいだろうが、キスするだけで生まれ変わる世界がどこかにあるのはいいものだ。老いぼれた爺ちゃんと婆ちゃんが、キスしてお互いの細胞を交換し合い、人生を再び育んでいく。難病に冒されようと、不慮の事故

が見舞おうと、キスをすればやり直せる。取り返しのつかない失敗をして、路頭に迷っている時、同じような面を浮かべた女が向こうからやってきて、言葉が無くてお互いを理解しあい、唇を合わせる——ああ、生まれ変わったら記憶はなくなってしまうかもしれないから、爺ちゃんも婆ちゃんもまた出会えるとは限らないのか。けれど細胞はお互いの中で生き続け、遺伝子にも似た、変えようのない事実としてお互いを支え続けていくのだろう。それで何も問題ない。皆が薄々、誰かのおかげで生きているのだとわかっていれば。

ハッハー！ という高笑い公園から聞こえてくる。遠くで黒人と日本人がワン・オン・ワンをしているのが見えた。まだまだ世界の壁は高いらしく、黒豹があっさりとは抜き去って未熟なサルはあえなく芝生に倒れていく。巧みにボールを操るグリークを見ながら、ニツタは悔しそうに叫び声を上げた。ドゥンス！ というコールとともに黒い手が大きく振られる。

「サッカーサポってダンスなんかやってるから負けるんだよ」

煽り文句を気にも留めず、ニツタはあっけらかんとした様子で起き上がった。

「グリークはダンスやってもサッカー上手いじゃん」

指差されたグリークは褒められているとわかるらしく、それほどでもない、とばかり

りに手を振った。

「ダンスが上手けりゃサッカーも上手い。だけどサッカーが上手くてもダンスが上手くはならないってわけだ」

「どういこうった？」

「お前もそろそろサッカーに専念したらどうだって話」

「ははっ、負けたからには言い返せねえな」

グリークは聞いていたのかどうか、脈絡もなくボールを俺に渡してきた。下手糞だからノーサンキューとボールを返しかけたが、自分の言葉には責任を取れと言っているのか、顎を軽く振ってくる。まあ、ワン・オン・ワンをやるうとは聞いていないからヘソを的にして思い切り蹴りつけてもいいわけだ。が、すんでのとこでかわされた。その勢いでニヤケ顔を浮かべながらこちらに近づいてくる。

「ビックリ、ビックリ！ カンベン、カンベン！」

ニッタとともにゲラゲラと笑うグリークに対し、わざとらしく指を鳴らしてやると、敵わないと言うように首を横に揺らし続けた。

「ドゥンス、オシエテヤラナイ」

「ボールを当てたら教えてくれる？」

「俺なら間違いないで当てられるね」

グリークは首を振りながらニヤニヤとしていた。もっとも、言葉がわかったところで怒ることはなかっただろう。

*

人はヴィクトリア・ベックカムをエゴイステックなワイフだと評するが、最初にアプローチを仕掛けたのはデイヴィッドの方だという事実を忘れてはならない。デイヴィッドが工業地のファンの心をつかみ始めていた頃、ヴィクトリアはスパイス・ガールズのメンバーとして世界的なムーヴメントを起こしていた。抜群のスタイルを持つポップスターを画面越しに見ながら、田舎生まれのサッカー少年は興奮のあまりチームメイトに向かって、彼女と結婚する、と宣言して憚らなかつた。いざ面会の機会を得ても、試合が終わったばかりで汗だくになっているからきつと嫌われてしまうと思つて、まともな会話さえ出来なかつた。自分に向けてられた目線を分類する能力に長けたエンターテイナーにとって、それだけでも乳臭い男の胸の内を察するには十分だった。元々、二人の身分はそれほどかけ離れていたのである。

とはいえ、スパイス・ガールズにとって、ヴィクトリアは数合わせだった。歌唱担当にセクシー担当、それからキュート担当もいるし、ボーイッシュ担当まで揃えてい

る、これでひとまず何とかなるだろうが、予定では五人スカウトするつもりであるから、高飛車担当も入れておけば男には簡単に媚びないグループとして認知してもらえるか——そんな算段に基づいて採用された女は、歌も下手だったし減多に笑いはしなかった。裕福な階級に生まれながらも、それゆえに反感を買いやすかったヴィクトリアは、コケットリーに振舞ったところで売春婦同然に男にかしづくことにしかならないと知っていた。それならば多少の反感を買ってでも自分らしく生きた方が、ずっといい。

メディアが何と言おうと私は働き続ける。なんでもフットボーラーは大抵三〇代でキャリアを終えてしまうというではないか。人生においてはまだ倍の月日が残っているのに。特に、妻に頭が上がらないような男が監督やコーチとしてやっていけるようには中々思えない。それならば早い内からフットボール以外の稼ぎ口を確保しておいた方がいいに決まっている。夫にも、いつ怪我でキャリアを終えてもいいようにファッションアイコンとしての立ち回り方を教えておいた方がいいだろう。

このキャリアウーマンは家を空けてあちこちで商談を進め続けた。かといって家政婦は雇わない。それでは夫の頭の中から家庭の概念が抜け落ちてしまう。試合と試合の間は、たとえリフレッシュが必要であろうと家事を任せ続ける。そうすれば確固とした家庭への愛着が生まれ、穏便な老後を迎えることが出来るだろう。

レアル・マドリーがデイヴィッドを必要としなくなった時、ヴィクトリアはずばやく手を打った。ロサンゼルスに住居を構えれば、アメリカという莫大な市場を持つ土地で商売が出来るし、言語に悩まされる必要もないから子供達も安心して青春を送る事が出来るだろう。セレブとして名が通っている割に、ヴィクトリアの生活感覚は確かなものであった。

ただ、一方で決定的に欠けていたものもあった。彼女は夫の職業に興味を寄せることが無かったのである。大方、アメリカはスポーツが盛んな国だからモチベーションも保たれると思っていたのだろう。が、あいにくフットボールはさっぱり人気が無かったし、まだまだトップレベルでプレイ出来るはずの夫には似つかわしくないレベルの対戦相手しか存在していなかった。要するにこの少しだけマヌケな実務家は、夫をフットボーラーの墓場に送り込むための手続きを首尾よく進めんとしていたのである。

ヴィクトリアが首尾よく新居の契約を結んだことで、メディアは一斉にベッカムのアメリカ行きを報じた。フットボーラーとしての契約は交渉段階にあったにもかかわらず、いかにトップレベルでのプレイを望もうと、そこまで来たら後戻りも出来ないから、サインにあたって躊躇する暇などない。〇七年の一月、ベッカムはロサンゼルス・ギャラクシーと契約を結んだ。

とはいえ、ロスへと住まいを移すのは、スペインでの契約が終わる七月になってからの取り決めになっている。この間にコンディションが落ちてはまずいだろうと、クラブは練習への参加を認めてくれた。しかし、半年後にいなくなるプレイヤーを使えばチームの士気にもかかわるし、伸び盛りの若手にチャンスを与えた方が有益だということも明らかである。とうとうベッカムはベンチからも外れ、スタンドで試合を見るしかなくなった。

だが、どういうわけだかこの男はいつも通り、周囲から面倒見よく扱われることになる。マドリーのキャプテンであるラウール・ゴンザレスは、やたらと良いボールを蹴り続ける戦力外選手を不思議そうに眺めていた。元々ウチの中でも一番いいボールを蹴る選手だったが、よくヤケにならないものだ、それどころか、精度に磨きがかかっていような気もする、まさかアメリカでもう一花咲かそうなんてつもりでもあるまいし……ああ、そういえばプロモーションに忙殺されても、練習は熱心にやっていたっけ、試合でも一切手を抜いたことはないな、それとなんら変わらないのだろう、要するにいかなる状況にあるうとこの男にとってフットボールは自らの心を癒してくれる、かけがえのないものなのだ。

ラウールはチームメイトを引き連れ、監督の許へと直談判に向かう。我がクラブはまだまだ優勝の可能性を残している。そんな状況にあって戦力をフル活用するのは当然

だろう。現在使われている若手よりも、ベッカムは走るし良いボールを蹴る。あなただってこうした事実をトレーニングスタジアムに立ってその目で確かめているはずだ。

長きにわたるベンチ生活により実戦感覚が乏しくなっていたベッカムは、かつてほどの活躍は見せられなかったが、若手をさしおいてピッチに立ち続けるだけの實力はあるのだと証明することは出来た。チームも逆転でリーグ優勝を果たし、ベッカムの最後に華を添えてくれた。それどころか、ファンからはどうにかして契約の穴を見つけて残留させられないかという声も出てくるようになる。

しかし、ロサンゼルス・ギャラクシーだってエースとドル箱を兼ねた選手をそう簡単に手放すわけにはいかない。何よりフットボールに興味のない妻は、アメリカでの生活をすでに始めている。惜しまれつつベツカムはスペインを後にした。置き土産としたのは、一度のリーグ優勝と、積み重なった営業利益だった。

*

雨の音が二度寝を許してくれなかった。地面やら屋根やらが静かなスネアを鳴らし、意識に向かって明晰であれと促してくる。そんな声があれば覚醒するのにやぶさか

ではなかったのだが、命令されるのは癪で仕方ない。俺を立ち上がらせたいなら、まずお前が命令するのをやめることだ。そうしてストライキの態勢に入る。もっとも悪い条件は揃っていなかった。雨が降る中を出歩くなんてごめんだし、このまま天候がチャチな交渉を続けているのならば学校に行く必要もなくなるのだから。

何十回も流し続けた曲に、聞き慣れない音が混ざっている。耳鳴りかと思ってイヤホンを外したところ、あれはチャイムだったのだと知らせる甲高い音が家中に響いた。ドアを開けると、やっぱり、とピースサインを作るレイカが立っていた。サボりたくなる気持ちはわかるが、お前には似合わないだろ、と言うと、なんでもこの雨をもたらししているのは台風らしい。午後には直撃するとの予報を受け、県内の学校は全て休校を選んだ。

「ていうか、メール返してくれないなんて酷過ぎない？」

「台風のおかげで宛先が変わったんだろ」

ではどこに行ったかって？ おそらく、日本海を渡ってロシアに行ったのだろう。梅雨とはいえ亜寒帯の地に不時着するのは難しく、おまけに寒々しい風に吹かれて北極まで飛ばされたのだ。そしてメッセージと共に凍りつく。あるいはクマのエサと化してしまう。

「雨が止んだら、またあそこに連れてって」

これで何度目だろう。今は弱みにつけこんでいるが、その内なんの気兼ねもなくダンスホールに入り浸るようになるかもしれない。

「パフェおごるから、それで勘弁してくれない？」

安い女と見積もられたと思ったのか、レイカは何の返事もよこさずに家へと上がりこんできた。マグカップに盛り付けたパフェはあえなく平らげられてしまう。かといって、それでダンスホールへのチケットが破り捨てられたわけでもない。

「代わりに期末試験の勉強は教えてあげるけどね」

教えなくてもいいから諦めてくれないかな、と抵抗する暇も与えてくれないまま、机の上に教科書が広げられていく。

「英語はグリークに教えてもらうから」

「あの人英語しゃべれないじゃん。そもそも、私のためにも必要なの。人に教えることで要点が確認出来て自分で考えることになるんだから」

つくづく勉強ばかり考えてるんだな、と言ったものの、早くノートを取ってくる、と命じられたので立ち上がらざるを得ない。せっかくレイカと一緒にいられるのに、勉強に邪魔される。学校は管理に満ちたシステムだと言われるが、どうやら恋まで管理するらしい。きっと今もどこかで高校生の恋人達がこんな会話を交わしているだろう。なあ、どうして俺と付き合ってくれないんだよ、だってあなたの遺伝子はメンデ

ルの法則に従うと相性が悪いんだもの。

英語は相変わらずで、数学はどうして二つのふくらみが上と下に分かれるのかさっぱりだった。現実在即していない学問に、何の意味があると言うのだろうか？

昼飯はレイカが美味しい親子丼を作ってくれた。雨は止まない。けれど、レイカを引きとめられるなら止まなくてもかまわなかった。

「ずっと雨が続けばいいのに」

「学校に行けなくなるから？」

学校どころか町が水没して、この家だけが浮島になる光景を想像する。まずニッタがたどりついて、グルークもやってくる。ババ先生やシーさんがいてもいいだろう。皆にはねぎらいとしてパフェを差したず。ババ先生がこの世界に適應する方法を教えられて、グリーンクは念願の施政者の地位へと就く。レイカはその二人の補佐役で、ニッタはサッカーボールを蹴りあげて他の浮島との交流を図る。シーさんは宴会の拍子に海へと飛び込んで死んでしまうかもしれない。店長を始めとしたなじみ深い仲間が他の浮島から吊問にやってきて、また帰っていく。そして俺は……。

やけに落書きが捗ると思ったら、レイカが眠っているせいだった。顔も見せてくれないほど疲れているらしい。ベッドに寝かせてタオルケットをかけて、少しだけ外の様子を見に行くことにした。と言っても、横殴りの雨は直に家に入り込んでくるので、

出入り戸も開けられないくらいだ。

部屋に戻ると、タオルケットのふくらみがベッドに横たわっていた。もしこの中にレイカがいなくて、抜け殻だけを残していったとしたら。そんな考えが頭をよぎる。たとえば剥ぎ取ってみたら、クッションが並べられているだけで、ほんの少し匂いだけが残っていたでしょう。メールを確認しても、台風で休校になったから遊びに行くというメッセージしか残されていない。雨は止まずに外へ出ていけなくなる。晴れの日が来ないから匂いはかろうじて感じられるが、一向に連絡がつかなくなる。

タオルケットを取れば、そんな妄想は意味のないものとなるかもしれない。けれど、せっかく疲れを取るために眠っているのだから、起こさない方が良いのかもしれない。それからはずっと、イヤホンをはめて何十回と聴いた曲を流し続けていた。

机に突っ伏しながら起きると、もう夕方になって雨も止んでいた。タオルケットが背中にかげられ、メールが残されている。眠ってる間に勉強してるのかと思ったらノートが真っ白で驚いた、といった内容だった。ちゃんと勉強しなよ、とは言っているが、何も返す気にはなれない。勉強するとは言えないし、勉強しないと書いてもレイカを怒らせるだけだ。

*

○三年、ベツカムはスポンサーのアディダスによって一人の男と引きあわされた。ラグビー界において屈指のキッカーとして知られるジョニー・ウィルキンソンこそ、その人である。

それぞれの競技において類稀なるキックスキルを持つ二人が、所を移して違ふボールを蹴ったらどうなるか？ そんな好奇心に基づいてコマージュの撮影が行われたのだが、これはベツカムの人柄がよく表れた仕上がりとなっている。

場数を踏んだことがうかがえる低い声でコミュニケーションを取るウィルキンソンに対し、ベツカムはハニカんだような甘ったるい声で応じた。まずはウィルキンソンがサッカーボールを蹴る。ラグビーにおいては高々とボールを蹴り上げる必要があるから、フォームは勢い豪快になって、枠内から大きく逸れてしまう。

——もうちょっと軽く蹴った方がいいのか？

大丈夫だよ、と答えて、ベツカムが見本を披露する。いつも通りの端正なフォームで、ゴールキーパーが動けないほどのボールを蹴っていく。しかし、ウィルキンソンはポイントを見逃していない。一見軽やかな動作ではあるが、インパクトの瞬間はしっかりと強く足を振り抜いている。

——コントロールするためには軸足が重要なんだ。軸足さえしっかりしていれば振

り抜いても的を外すことはない……ラグビーも同じだろうけど。

ベッカムのアドバンスによってウィルキンソンの照準はゴールへと順調に合わせられていく。しかし、豪快なフォームを崩すことはない。ラグビーの方がもっと軸足の力強さを求められるのだと、自分のスタイルの確かさを誇示するかのようになつた。

要領をつかめば、ベッカムのリクエストに応じて右に左に卒なく蹴り分けられるようになった。豪快なフォームでゴールに叩き込む男と、端正なフォームでボールを送り込む男、それだけでも十分絵になる構図だった。

——僕より上手いね。

——そういうことにしておくよ。

次はベッカムがラグビーボールを蹴る番だ。サッカーボールと違って、ラグビーボールは風に立ち向かう事も考えなければならぬ。

——風が強ければボールからズラして蹴る必要だってあるんだ。でもボールに回転が掛かっていなければ、風に押されるための勢いもないからあさっての方向に行く。ウィルキンソンの蹴るボールは二つ並んだボールのほぼ真ん中を射抜いていく。簡単そうに見えるな、とベッカムは言う。

——回転のかけ方はサッカーと同じ？

——つま先を使って、それから腕を振ることも忘れないこと。

お得意のフォームであるにもかかわらず、ベツカムは左手を握りしめながら教えに忠実たらんとしている。腕を忘れずに、腕を忘れずに。もらったアドバイスを逐一確認しながら、ウィルキンソンが言葉では伝えきれないでいる部分を読み取るうとしていく。

——それにしても遠いな。届くかどうか。

——自信をもっていい。何もかもすっかり頭に入れたら、あとは思い切り行くことだ。

わざとらしいほどに左手は大きく振りかざされたが、やはり態勢を崩すことなく右足は振り抜かれ、ボールはしっかりとした孤を描いた。

使えるショットが粗方撮れたので、撮影陣はオーケーを出す。二人は最後の会話を交わした。

——今度ユニフォームを送ってもいいか？

——もちろん。試合を見に行ってもいいかな？

——じゃあこうしよう。今度ラグビーのワールドカップがあるんだ……。

結局は同年に行われたビックイベントのプロモーションに、ベツカムは引き立て役として選ばれたにすぎなかったのだが、そんな中でも役割をこなしつつ、自分の魅力を伝えることは忘れなかった。大きい見返りを得るために相手の機嫌を取るが、かど

いって媚びるような真似はしない。相手に敬意を払いながら、自らのポジションも確保しておく。

アメリカに渡ってからの足跡については、書くべきところは少ない。ロサンゼルスは長期契約を結んでベッカムを引きとめたため、ヨーロッパからオフターが来たとしても容易にはチームを離れることが出来なくなった。後にイタリアのクラブが交渉に動くが、保有権はあくまでロサンゼルスのみままで、サラリーを肩代わりしてベッカムを貸してもらおうという方法でしかチームに迎えることが出来なかった。もちろん、レンタル期限を迎えればまたアメリカへと帰っていく。

御世辞にもレベルが高いとはいえないリーグに所属してしようと、ベッカムはトレーニングを欠かさなかった。当面の目標は、南アフリカで行われるワールドカップのメンバーに選ばれること。監督もリーダーシップを見込んで選出することにやぶさかではなかった。イタリアという厳しいリーグを相手にしても、いつ引退してもおかしくない三五歳は十分に、渡り合っていた。

しかし、ベッカムは試合中にアキレス腱を切ってしまう。同情と、輝かしい功績への慰労を込めながら、イングランド代表はコーチのポストを用意して彼の帯同を許した。選手とコーチの橋渡しをするという役割を与えられたが、予選突破がやっとだっ

た結果を前にしては、効果的であったかは怪しいものだった。大会期間中、イナセにスーツを着こなし、取り澄ましながらベンチに座る姿を見せ続けたことで、監督になっても絵になる存在であるとアピール出来たのは、無駄ではなかっただろうが。

雪辱のためにロンドン五輪代表入りを目指したが、三七歳の体に若手を押しつけられるだけの力は残っていなかった。だがベツカムはトレーニングを続けた。ヨーロッパでのプレイを望み続けた末に、ようやくパリへの移籍が叶ったが、世界最高の選手であるリオネル・メッシに力の差を見せつけられた。そこで、ベツカムはどうとう引退を決意する。

こう書いてみると寂しい晩年を送ったかのように思えるが、収入の面ではもっとも財産を得ているフットボラーであり続けた。フットボールでしか見せられなかった不屈の信念を、いよいよビジネスでも発揮出来るようになったのだ。

ビジネスとフットボールの両立を求められる時代にあって、これほどまでに規格外を示す人間もいなかった。同時に、これほどまでに自分の人生に忠実たらんとした人間もいなかった。マーケティングの餌食にされていなければ、もっと優秀なフットボラーとして名を馳せることが出来たらうと人は言う。ベツカムはそういう声を見込んだ上で、トレーニングを欠かさなかった。もしかしたら有り得たかもしれないもう一つの生涯への道を保ち続けることで、たとえ衰えようとも人々が夢を見ていられ

るように取り計らった。

大人らしく振舞っていれば、たとえマーケティングに振り回されようともフットボラーとしては着実な人間として評価されただろうと人は言う。ベッカムはどこまでも幼稚であり続けた。ロサンゼルスでの試合中、痛がるフリをして時間稼ぎを目論む相手選手に向かって、ベッカムが怒りのあまりボールを蹴りつけたことがある。またやってくるよ、シメオネやファーガソンの件で懲りなかったのかね、まったく仕様のないやつだ……そうやって彼は人々の庇護欲を駆り立て続けた。

ベッカムが意図してこれらの行いを選んでいたかどうかは、あまり問題ではない。彼は自分の人生をたやすく否定しなかった。同時に、自分の歩んできた道で起きた出来事を別の場所で、そこで起きていたのはこういうことだったのだと説明するように何度も繰り返していた。問題はそこにこそある。

たとえばカントナの練習パートナーを務めていたシーンは、ラウールが見ていた練習風景へとつながっていくだろう。窮地にあっても自分を保つのであれば努力は欠かさないことだ——キャプテンの教えにしたがって、ベッカムはスペインで不遇に見舞われても自分のままであり続けようと努力した。今の自分を作り上げた弛みない練習という出来事を再現しながら。

あるいはヴィクトリアやファーガソンが、いつまで経っても幼稚であり続ける彼の

ために奔走し続けた事實は、ウイルキンソンとの僅かな交歓によって端的に表現されているだろう。自分から弱みを見せることで、相手から有意義な意見がもたらされることを待っている。そればかりか、相手の置かれたポジションを明確にすることで、同時に自分の置かれたポジションも確かにしていく。

こうした事實を鑑みれば、ベツカムは自分らしく生きていく術を備えている人間だと言えるだろう。急いで付け加えておく、ここでいう自分らしさというのは、一人で生きていくということの意味しているわけではない。自分らしさとは周囲の状況によって作り出されるということを、彼は十分に表現している。とりわけ、周りを取り囲んでいるものを自分の中に取り込みながら生きていく術を知っている。他人からの視線はいわずもがな、過去の自分も取り込みながら彼は生きているのだ。そしてそうした事實は、観客からの視線を十分に意識しつつ、練習に練習を重ねて編み出した端正なフォームへと表現されていく。

なおかつ、こうして積み重ねられた人生は、おそらく未来をも指し示しているだろう。監督になるにせよ、ハリウッドスターになるにせよ、彼が自分のスタイルを崩すことはないだろう。決して一人で歩いていくことなく、他人からの視線を常に意識しながら、それでいて自分らしく生きていくことだろう。四〇に近づき、その風貌は衰えていくだろうが、その生き様は一層たくましくなっていくだろう。ヴィクトリアの

言葉を借りれば、フットボーラーは引退したところでまだ人生の半分を終えたばかりなのである。

力強く暴力的な愚か者によるフォリア

〈了〉

特集 エッセイ

一本の電話

あんな

電話、という単語を口にする時、思い浮かぶ像は一体どんな形状なのだろうか。そんなことを考える。

私が小学生だった時、仲の良かった友達も、自分の家も黒電話だった。あのじーじーと番号をひとつずつ回していくやつだ。途中で離してしまうともう一度きって最初から。遊びに行く時、今から行くよーなんて電話したり、ものすごい線を伸ばして自分の部屋まで持って行ったり。

今はなんだか電話と言ったら携帯のことで、携帯と言ったら電話っていうよりも小さいパソコンみたいになっちゃっているからあまり電話って感じがしない。でも今の子供たちはやはり電話と言ったらスマートフォンなんかが思い浮かぶのだろうか。その他にも色々連絡手段はあって、今はパソコンを使って気軽に海外の友達と話ができたりしてしまうのだ。電話の形が多様になって、どんどんみんなが繋がって、どうしているかわからなかった友達と数年ぶりに会話したりできてしまう。そんな便利な面倒くさいのかよくわからない今の電話事情の中で、忘れられない電話にまつわる話がある。

十八歳の時オーストラリアに留学していた。何も知らずに飛び込んだ初めての海外生活は想像以上に前途多難であった。まず、留学するというのにまったく英語を勉強していなかったのでホームステイするに当たって家族とのコミュニケーションが取れず四苦八苦した。テレビもラジオも意味がわからず一人で外出できず暇を持て余しながら思いっきりホームシックになっていたので、日本から持ってきたCDを聴きまくりながらカレンダーに丸をつけて帰国日までの一年をカウントダウンするほどだった。

そんな中唯一外界と接触でき気分転換できる時間が学校に行く時間だった。しかし私はクラス分けのテストでまったくわからず開き直ってほぼ無回答で出したため結構日本人がいたにもかかわらず一番下の日本人が一人もいないクラスに入ることになった。留学してから半年日本語をほぼ話さずに暮らす生活がこの時始まったとはつゆ知らず……。

授業はかなり初心者向けのものが多く、「キャナイハブデイス?」「イエス、シユアアー」などと店員と客になりきり買い物ごっこみたいな授業もあった。クラスで仲のいい子もできた。韓国人のエリィと香港人のヴィヴィアンの二人。エリィはいつも私の隣に座り先生に当てられて答えがわからない時教えあったり宿題を確認しあったりした。控えめだけど可愛らしい女の子。ヴィヴィアンは年上だけとお茶目な少女み

たいな人でよく休憩時間にお喋りした。すごく気が合って英語がお互い話せないことなど微塵も感じさせないほどだった。

でも授業はだいたい一日三時間ほど。それが終わるともう暇だった。まだ留学して日が経っていないのでほとんどの人が携帯も持っていないかったし仲は良かったけれど学校以外で会うということはなかった。

ある日いつものように学校が終わりお昼頃帰宅した。家族がそれぞれに学校や仕事に出掛けており、まだ誰もいない家で暇していると、突然家の電話が鳴った。一人で見ていることが多かったのですが、この日はよくあった。初めて電話がかかってきた時に動揺して切ってしまった。からは電話がかかってきた時の受け答えを日本から持ってきた本で何度も練習し割と落ち着いて対応できるようにはなっていたので、へロー？とちょっとかっこつけて出た。すると電話口から「レッツゴーシヨッピング、アンナ！」というヴィヴィアンの豪快な声が聞こえた。その瞬間今までモノクロだった世界が一瞬にして色がついたような感覚になり、私は高揚する気持ちを抑えきれず「イエー！」と叫んでいた。ヴィヴィアンはどうにかして私のホームステイ先の電話番号を調べてくれたらしい。その時から私のホームシックはびったりと止まり、それから二年もの間オーストラリアに滞在することとなった。

一瞬にして何かが変わる一本の電話。そういうものが私の人生の中では片手で数え

るほどはある。ヴィヴィアンとエリイとは帰国するまで何度も遊び、クラスが変わっても交流は続き、帰国する数日前には一緒に映画を見に行ったりした。

さらに最近、帰国後十年間連絡が取れなかったヴィヴィアンとFacebookで再会し、オーストラリア人と結婚して可愛いハーフの息子がいた！というサプライズつき。そんな出来事を思い出していると、なんとなく電話っていいなって思えてくる。

(了)

特集 エッセイ

電話にくたびれて

安部孝作

今わたしが待っているのは一本の電話にすぎない

——ロラン・バルト

現代において誰もが恋人からの電話を待ち受けたことがあるだろう。そして思い切
ってこちらからかけてしまおうかと逡巡したこともあるだろう。あるいは、恋人では
なくて、師であったりするかもしれない。とかく誰かとコンタクトを取りたいとき、
私たちは電話という手段を一つ獲得している。そして、テレビドラマや映画の多くで
も、恋人たちが長電話に興じたり、電話をかけあうシーンが散見される。だが私には、
こうしたシーンに大きな違和を覚えるのだ。確かに今にもあなたの声を聴きたい、と
いう心情が働くのであるが、そういう希求にとって電話とは相応しいものであるの
だろうか。

そうした問の前に一つ別の問いを用意しよう。これは至って単純で、電話とはかけるものだろうか、かかってくるものだろうか、というものだ。そして人は電話を掛ける衝動から耐えるか、掛かってくるのを待つことに忍耐するのか、というものだ。しばしば私は一つの電話が、消えたり現れたりするのを目撃する。電話機が目の前に存在していても、殆ど機能性に特化したその道具は頻繁に目の前からその影が消失してしまう。一定の実在性を確保しているのも関わらず、普段においては大した存在を持つことはない。だからこんな発言が繰り返されることはないだろうか。

「私の携帯電話はどこへいったらどう？ 誰か鳴らしてみてはくれないか？」

そして先ほどまでどれだけ探しても見つからなかった鞆の中から着信音が聞こえてくるのだ。場合によってはポケットに入っていて、体と密着していてもあり得ることだ。また、固定電話が日常生活の中ですっかりその存在の影を消してしまっていることは誰もが気が付いている。電話はいつでも不如意に表れて、私たちに驚きをもたらす。急な表象は、曲がり角で突然自転車と出くわすことに等しい。それはともすれば身に危険を覚える感覚である。ところが、その電話がなる事をいまかいまか待ち

望むことがある。

恋人や仕事相手、大きな災害に見舞われた時、家族や友人からの一報、等々。それほど待ち望んでいればそれは驚きではないかもしれない。だが、それでもかかっていた瞬間驚くのである。高校生が受験番号を確認し、あつた時にこそ大きな驚きを覚えるのと同じように。または競馬で当てた時のように。予想が当たるからこそ、期待が叶うからこそ驚いてしまう。（私たちは期待や希望を抱かせるものに、少なからず「裏切り」の嫌疑を常に抱いているから、現実化されてしまうと肩透かしを食らうのである）

しかしながら電話が急報をもたらすことによって私たちに引き起こす感情は、驚きにとどまらない。それは通路であることを忘れてはいけない。何よりも私たちが待つのは電話の相手の声であり、報せ自体である。そして重要な報せや声を待つときには、もはや私たちはただ待つというより待機、つまりかかってくるはずであることを予見し、いつでも出られる準備をしている。心待ちにして、かかってこない時間に従って不安でもなく焦燥感でもない、狂気じみた昂奮が訪れる。この状態に至って、電話の持つ存在は膨れ上がっていく。見逃すことはできない。とにかく待たされることに耐

え続けなければならぬ。

次の一節はロラン・バルトが待つことについて書いたものだ。

『舞台はとあるカフェの中。ここで会う約束なのだ。わたしは待つ。「プロローグ」では、ただひとりの役者であるわたし(当然のことである)が、相手の遅参を確認し、記録している。この段階ではまだ、それは、数学的で計測可能な遅れでしかない(わたしは幾度となく時計を見る)。「プロローグ」はひとつの衝動で終る。つまり、わたしが「気をもむ」ことにきめ、待機にまつわる苦悩を始動するのである。そこで第一幕が始まる。この幕が始まる。この幕はさまざまな推測にみちている。ひよっとして時間を、場所を、間違えたのではないか。約束を交したときのこと、おたがい確認しあったことなど、思い返してみる。どうしたらよかるう(行為の苦悩)。別のカフェへ行くか。電話するか。でも、席を立っている間にあの人 cameたら…… わたしの姿がなければ帰ってしまうかもしれない、等々。』[ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』三好郁朗訳・みすず書房、p.59]

この劇の役者は、現代にとっては少なからず滑稽に映るだろう。ところが内心はさほど変わりはない。とにかく待つ人は気をもむのだ。気をもむ、あるいは手をもむ、は緊張感や注意力の散漫を表している。何事に集中できない状態であり、それは未だそこにはない状態のものへと注意力を注いでいるからである。視線をあちこちへと走らせ、待つ人の顔を探さるうし、先に注文しておいたコーヒーは、始めの数口を最後に冷めたまま残されている。多少の待ち時間を潰すために持ってきた文庫本も、実際は最初の三ページを詠んだ（それも何度も同じ行を読み返し、揚句今となっては何も覚えていない）きりである。周囲の雑音が原因ではなく、私は未来に訪れるであろう人に気を取られているのだ。私も同時に既にここにはいない。想像力の世界での出会いを先んじて楽しむ余裕もないのだ。

ここでこの一節を少々現代風に書き換えてみたいと思う。

舞台はとあるカフェの中。ここで会う約束なのだ。わたしは待つ。「プロローグ」

では、ただひとりの役者であるわたし（当然のことである）が、相手の遅参を確認し、記録している。（…中略…）そこで第一幕が始まる。この幕が始まる。この幕はさまざまな推測にみちている。ひよっとして時間を、場所を、間違えたのではないか。約束を交したときのこと、おたがいに確認しあったことなど、思い返してみよう。そこでわたしは相手と交わした電子メールを開いて読んでみる。すると確かに正しい時間が互いに了解されているようだった。（ならばなぜ相手は遅れてくるのだろうか）。わたしは当然の権利のように、遅参する理由を連絡してくることを要求している。それが果たされていないことに不満を抱く。「なぜ連絡一本よこさないのか」それを相手に伝えることもあれば、心の内にしまっておくこともある。（だが現代においてここで何も言わずにおける人は、よほど気が長いか、呑気か、自分自身時間感覚に疎い人であるだろう。それとも相手のことがどうでもいいのだろうか？）どうしたらよからう（行為の苦悩）。別のカフェへ行くか。電話するか。でも、席を立っている間にある人が来たら…：わたしはの姿がなければ帰ってしまうかもしれない、等々。それに電話をよこさないということは、相手が電話を利用できない状況にあるのかもしれない。ならば電話をすることも無駄であるかもしれない…：やはり私はなにもできないし。確かなのは、待ち合わせは正確に約束されており、今、それが果たされていないということである。

だがとりもおさず、人というのは急な報せには不吉なものを感じることが多いのか、電話という常に「突然」であるものには、看過しえない緊張感が漂っている。あのけたたましい着信音にしつこいほどのバイブレーション。早く受話器を取りなさい、なにをしてもとにかくその手を止めて、一刻も早く出なさい、と口うるさく喚き続ける。慌てて電話に出ようとして、様々なへまをする人を見たことがある。揚げ物を焦がしたり、カップ一杯のコーヒーをこぼしたり、終バスから飛び降りてしまったりという、まるで電話機が発している「さもなければ」という警告に逆らえない人たち。あるいは講義中や会議中に着信があり、慌てて切ったり、切るに切れない相手からかかってきているのを確認して顔を青く赤くする人。なにしろ伝わってくる報せの正体は出てみるまで明かされないため、出ない耳を傾けない、という決断をすることが非常に困難である。また一昔前、誰から掛かってきているのかわからなかった時には、声の正体すら掴めない。これでは出ないで見逃すわけにはいかないだろうという強迫観念が付きまとう。

だから私は時に電話機を壊してしまいたいという衝動に駆られることがある。だがそうはいかないことも明白である。それは現代では欠かすことのできない連絡手段であるのだから、電話機を持たない気楽さを認めるほど社会は寛容ではない。ところがこの社会の不寛容の原因は、この電話という不気味な代物であるに違いないが、だとすれば、少なからず多くの人が他人の電話機に対しては、正体の知れない気持ちの悪さを感じているに違いない。電車で隣の人が携帯電話をいじっているとき、不図何をしていいのか気にはなるが、覗いてはいけないという抑制が働く。それは新聞や書物よりもより強く感じる葛藤である。あるいは他人が電話をしているのを横で聞いていられる人は、よほど想像力がないのか、ある人かもしれない。私はこのことを考えた時、安部公房の『箱男』を髣髴として仕舞う。(実際「よほど想像力がないのか、ある人かもしれない。」という言い回しは彼の『箱男』講演会で使われたものだ)また、ころころと継ぎ目なく「携帯電話」という機械を通して入れ替わる主体への、不信任感というものが付きまとう。それは私の中でしばしば存在しているのが判っておきながら、實在感がなく、目を背けてしまいたくなることもある。電話は常に「切る」という行動、終末へと向かうべく話が運ばれる。いつまでも話していようなどとは誰も考えない。そんなに電話というのは気のおける通路ではない。

しかもその声は非常に虚偽に満ちていることを私たちは知っている。そこで語られるコミュニケーションの不全は全く顔や身振りがないことに尽きるのかもしれない。また実際に電子的に一度変換された音声は、実際に聞く声と、明言できぬほど些細であっても異なるのである。そしてとりわけ異なるのは、トーンである。そしてこの語調ほど言葉の意味合いを決定づけるものはないから、電話によってなされたコミュニケーションには常に——それは普段以上に——なにも伝えられていないし、嘘を伝えることになりかねない。揚句、私とあなたの間にはこれほどの断裂があります、そして言葉と言葉は剥離していきます、と示さなければならなくなる時がやってくる。

『おそらくフロイトは、電話が常に不協和音であること、そこから伝わってくるのが悪しき声、偽りのコミュニケーションであることを、感じ、予見していたのである。電話をかけるわたしは、おそらく、離別を否認しようとしているのである。(……) 電話線には、結合ではなく隔たりという意味が充電されているのだ。』【ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』p.172、みすず書房】

殊に、電話越しの沈黙ほど誤解を招くものではない。相手がなぜ「わざわざ話すため」に電話をしているにもかかわらず、黙り込んでいるのか、その理由が理解されることは永遠にありえないだろう。むしろそこは相手の想像力によって占領されてしまう空間となる。怒っているのか、何か別のことに気を取られているのか、無視をしているのか。とにかくネガティブな想像が付きまとう。それも当然である。電話越しでの沈黙というものは、そもそも電話をするという行為への否定的行為に他ならないからだ。

そしてこの隔たりは伝達可能性という点においてのみならず、心的隔たりへ直結していく。

『電話に出ているある人は、常に出発をひかえた状態にある。その声によって、その沈黙によって、あの人は二度立ち去るのだ。どちらが話す番だったか。二人ともどもにだまりこむ。二つの空虚のせめぎ合い。お別れします、電話の声は一秒毎にそう言っているのである。』【同右、p.173】

私はこのバルトの一節を読んだ時に、映画「パブリック・エネミーズ」で、ジョニー・デップ演じるジョン・デリンジャーが、離ればれとなった恋人ピリーへと、公衆電話から隠密裏に電話をするシーンが思い出された。これは確かに会う約束をする約束であった。しかしながらそれは同時に分かれを覚悟するための電話だった。彼らの会話が聴かれていないはずがないのだ。当時FBIは特定地区の電話交換機を占拠して、デリンジャー一味の動向を探るために傍受を続けた。しかもピリーは監視されていた。彼らは会うことは無論、電話すらできる状態ではなかった。このような極端な例を持ち出すまでもなく、いかなる関係の二人においても、電話というのは、「今切ります」「今別れます」という瞬間が付きまとい、僅かな間が、それを可能として仕舞う。

人は電話では過剰にしゃべることがある。長話よりも長電話の方が問題視されるのには理由がある。一つは電話料金。一つは他の利用ができなくなる。だが、もう一つは話し過ぎるという点に尽きる。そこでは二人きりの通路があり、囁きがあり、誰にも聞かれないメッセージがあるように思われる。話すべきでない秘密も簡単に暴露される、重大な告白、神経性の告白、全てがそこでなされる。個人的な秘め事が形成される段階では、人は夢中となる。電話という一對一の関係（あるいは、特定の規模での

密室的談話〔ディスクール〕は一つの特権的な文化圏で、デリダが大仰に、かつ無内容に言い表した夢世界に反抗する陶醉感を形成するのかもしれない。

『出版やジャーナリズムやアカデミズムの集中体制を通して、コントロールし画一化することによって、言説や芸術的実践を一つの可能性の格子、哲学的・美学的規範に、効率的で直接的なコミュニケーションの水路に、視聴率や商業利益の追求に従属させる。実際このような規格化は、移動可能で偏在的かつきわめて迅速なメディアの網の目を通して、つとより早く「売りものになる」衆愚的コンセンサスの場を毛再構成し、あとというまにすべての境界Ⅱ国境を越え、あらゆる場所、あらゆる瞬間に、文化的首都、霸権的中心、新しい帝国Ⅱ統治〔imperium〕のメディア・センターないし中央処理施設を作り上げるのである。』〔デリダ『他の岬——ヨーロッパと民主主義』高橋哲哉・鶴飼哲訳・みすず書房、p.31〕

この夢世界を見て、私が思い浮かべる作品はやはりジョージ・オーウェル『一九八四年』である。その中のテレスクリーンは今でいえば電話に非常に近いものであるのだが、私が言ったような個人的な営みがそこでなされることはない。主人公はテレスクリーンから隠れる場所・盲点を常に探している。一方で彼はテレスクリーンもない場所で、メモ書きという手法を用い、顔と顔を合わせ、恋愛を謳歌しようとする。抑圧された世界での青春時代は随分とロマンチックなものだった。つまりそれは現実を忘れているに過ぎない夢であったと、彼は思い知ることになるわけだ。

IT技術の革新により、スカイプを筆頭としたビデオ電話が可能になってきている現在、新種のウィルスによるウェブカメラやネット電話の傍受が問題となっているが、そうしたプライバシーの局所的な崩壊が取りざたされる以前に、私たちは一つの事実を忘れている。つまり、アメリカでは同時多発テロ以降、一切の通信が傍受されているということである。この超法規的状況は今現在も変わらないでいる。確かに恋人同士の睦言、あるいは友情間での約束、そして多くの小物活動家や政治家の密約ごっこなどには彼らは何の関心も示すことはないかもしれない。だが、通信傍受がなお行われ続け、彼らが必要に恐怖（テロ）のタネを探し求め、糾弾すべき正義の敵を、鋭敏な嗅覚をもって探し回っているのは事実である。電話という手段が、あくまで庶民にとっ

ては個人間の通路を開設するものに違いないが、そこには既に警察的な監視があるのだ。

かつて地下活動を行うものによるラジオもあったが、電話という手段を超えて、SNSを用いた革命がアラブ諸国で起きたことは記憶に新しい。それだけ政治活動というのは公然たるものであるが、昨今「公共圏」という言葉が乱用される由縁かもしれない。だがデリンジャーの件にしても、オーウェルの件にしても、それはあくまで監視でしかない。

通信傍受という諜報活動が現在でも当然行われていることを認識したうえで、改めて私は考え直したい。電話はかけるものか、かかってくるのを待つものか、改めて問う。拙速にメッセージを伝えるわけにはいかない。しかしながら待っていると、永遠に届かないものがあるだろう。結局のところ待ちきれないことがある。監視人に聴かれていると思えば、電話はかけることでしか有効ではないのだ。電話は会話の場ではない。一方通行では酷く寂しく思うかもしれないが、それはメディアと思ってあきらめるしかない。ここには「これを伝えたら、すぐに切る」という了解があり、返事は不要であるのだ。そして沈黙も、応答も、ありえない。ともすれば、私はますます電

話というものに嫌気がさしてくる。電話という機会を通すと、あらゆる言葉が実在感を喪失して、虚偽感に満ちてくる。ましてや現実を語りえるかどうか（それは「言説」といわれるような言語学的問いを想定するのではなく、衆人警察的に可能であるかどうか）が疑わしいのだ。電話という機会には果たして存在するのか。エジソンが霊界と交信することを試みたように、私たちは時に誰でもない相手と電話をしているのではないか。夜な夜なテレクラやチャットレディーといった性風俗サービスを利用するのは、いったい誰と通信しているのか。電話という存在に疲れ切って、電話の電源を切ったり、電話を叩き割る人間が出てきたとき、私たちはどちらの道へ進んでいるのか。アナログな世界か、デジタルな世界か。こうした問いかけはもう古いだらうか。ならば、私は別の問いをしたい。私たちは恋人と、電話をするのと直接会うのと、選べと言われたらどちらを選択するか。これは答えが決まりきっているかもしれない。

最後に一つ添えておきたいことがある。かつてドイツにはヘーベルという作家がいて、この人は仲の良かった妻と生涯別居していた。そして彼は手紙にこう記す。「あなたがいないからこそ、近くに感じる」全くこれは恋するものには正しい言葉である。つまり、電話というのは、手紙という少しでも相手の痕跡を感じとれ、物象化されるものであり、それ自体が恋人からの贈り物であるかのようなものとは対極に、何も残

らず、空虚な残響だけが、そして相手の声を聴いている最中に味わった甘美な感覚だけを遺して、消え去ってしまふ。相手の存在感はつゆほども残らない。記憶も蓄積されることがない。となれば、電話という手段は、不在という観点から、さも相手との近さを利那的に極度まで引き上げることができるものであるかもしれないが、同時にそれは瞬間瞬間の離別によって演出された幻想であり、記憶がないために、恋人たちの恋愛感情は常に解除され、そぎ落とされていくのである。だからこそ、電話程恋人たちに似つかわしくないものはないのだ。そういえばフィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』では電話が愛、そして命を崩壊させるものだった。警察から逃れるための、デリンジャーの不可能な電話と、一九八四年での電話を使わない恋愛、虚構の世界を見渡せば、その本質がまざまざとえぐり出されている。

(了)

特集 エッセイ

電話と言えば……

うさぎ

自分が電話ときいて、思い出すもの。それは携帯電話ですね。自分が携帯電話を持ったのは高校生の時。そのときはEメールなんか使えなかったし、電話代も無料じゃなかった。そもそも携帯電話はちょっと高いものでした。PHSという小型の電話が今より普及していました。何が違うのかというと、厳密には答えられませんが電波の周波数とか強弱とかそんな違いだったと思います。

さて、自分の年代は携帯電話が文化として受け入れられた過渡期にいました。携帯電話も先に書いたようにPHSと二分していたし、携帯電話でもD社では周波数の違うもの（片方をシティフォンと言った記憶がある）などなんか当時は複雑な未開発的などころがあった。Eメールではなく、半角カタカナで二十文字しか送れないPメールなどがあった。あれで会話をしていたんだから、現在では考えられないです。

とにかく、青春時代にそういう便利なものが入ってきたわけだから、自分より年が上の人が苦労していたことがなくなるわけ。たとえば、好きな子に電話するために

は持つてる携帯にかければいい。ちょっと前の年代だと、好きな子の自宅にかけて、お父さんが出てそこで気まずい雰囲気になるといいう、物語になりそうな甘酸っぱい思い出が一つ消滅しました。

小説においても携帯電話というのは、革新的でした。ミステリー小説だとクロードサークルを作るのが難しくなった。孤島や吹雪の山荘とか「電波の通じない」ということを読者に提示しなければいけなくなった。他にも村上春樹の小説の世界に携帯電話が存在したらすべてが簡単に解決するように思います。最近だったら、多崎つくるは携帯電話一つで、みんなと電話で会話して誤解がとけると思います。

自分の下の世代はそんなことなく、物心ついてるときに携帯電話があって、普通に友達と話してたりメールをしていたと思います。高校生のときの自分もしていましたが、生活の中にちゃんと組み込まれてはいませんでした。ツイッターもフェスブックなどがなかったから、メールが唯一他人と繋がる手段でした。

夜中に好きな先輩と電話をする。なんかやるせない気持ちになって、携帯電話の電源を切ったり、遠くにやったり、時には二つ折りのものを真っ二つに壊してみたり。

当時小さくて軽いと言われた細長い携帯電話の先には好きな人の影があった気がします。

そういえば、携帯電話の電池パックや電池のふたにプリクラを貼るのが流行りましたね。何だったんでしょうね。たしか何かしらの意味があったはず。思い出せない。思い出した人は教えてください（笑）。

こうやって語っている自分が、当時の自分からみればあきらかに年をとっているような気がします。それに携帯電話を持つことによって携帯を中心に生活が回って、それに縛られているような気がします。電話って、自分と相手があって初めて成立しているもので、それがスマートフォンになるころにプライベートスペースが広がったような縮んだような気がします。インターネットや SNS の存在のおかげで、他人と繋がる手段は増えたけど、その分「他人からの目」に晒されるようになりました。人と距離や境界線が曖昧になったような気がします。

昔がよかったのか、今が幸せなのか、わかりません。そしてこの語りのオチもぼんやりした感じで終わりたいと思います。

(了)

特集 エッセイ

孤独の音

日居月諸

空っぽになった電話ボックスを見かけて、荒野に立っているような孤絶を感じさせるな、と戯言が口をついた。昔、テレビで見た怪談か何かの影響しているらしい。町はずれのゴミ捨て場にぼつりと立っている公衆電話でおかしなダイヤルを回してみると、低い声が聞こえてきて、呪いにかかってしまうという。幼い頃の記憶だから、不安とともに頭に残ってしまったのだろう。

しかしあれは、声を発したいのに口を塞がれている、というこの世ならぬ者の切羽詰まった状況を表す暗喩か何かではないだろうか。現世の者たちが怪談を語りだしたのも、押し込めてしまったことへの後ろめたさを感じているからこそではないか。

そう考えてみると、人波が流れる中でぼつりと佇んでいる方が、押し込められている様子はうかがえる。まるで路地裏でうずくまっている人のような、関わりはないはずなのに、疾しさを感じさせる存在と似たものがある。

歩いていると、立ち止まっている姿はやけに目につくものだ。急いでいるならば、暢気に座りくつろいでいるような格好は見るだけでも苛立たしい。今の自分が忘れたがっている事柄に出くわすと、人は目を背けたがる。たとえば、日々の暮らしに汲々

とじているならば、野垂れているみすばらしい有様は、明日は我が身との焦燥さえ覚えさせるものだろう。ひょっとしたら電話ボックスを見かけなくなっていたのは、人々がその姿を見ると忌わしさを覚えるようになったからではないか、と携帯電話の普及を見過ごしながら濫りな考えは広がっていく。

まだ携帯を持たなかった頃、緑の電話機には随分助けられた。雪国の登下校は徒歩がもっぱらで、しかし部活が終われば足は棒になっていくから、楽をして家から車を出してもらおう。そのくせ、家とは反対の方向にある商店へと歩いていくだけの体力はなぜか残っている。

それにしても、ボタンを押すと受話器から聞こえてくる、機械特有の耳障りな音は堪えがたかった。子機から聞こえてくる小気味いい音に慣れてきたから尚更で、耳に押し当てなければダイヤルが出来ていくかわからないから抗いも出来ない。おまけに番号が表示されなかったから自分の行いが正しいかどうかもわからない。冷えた空気によってかじかんだ手をこわごわと伸ばして、間違えぬようにボタンを押しながら、耳は金属の音に浸されている。今にしてみればよく堪えていた。

あれは子供の横着だったから相応の仕打ちとして捉えられもするが、濫りに広がっていく空想に身を任せて、荒野に設えられている緑の受話器から、あの音が聞こえて

きたと考えたらどうだ。索漠とした眺めに目を晒していた者が、電話ボックスという外部との交通の手段を与えられたとしたら。

さびしさは鳴る、と綿矢りさは出世作である『蹴りたい背中』で書いていた。

さびしさは鳴る。耳が痛くなるほど高く澄んだ鈴の音で鳴り響いて、胸を締めつけるから、せめて周りには聞こえないように、私はプリントを指で千切る。細長く、細長く。紙を裂く耳障りな音は、孤独の音を消してくれる。気急げに見せてくれたりもするしね。葉緑体？ オオカナダモ？ ハッ。っていうこのスタンス。

（『蹴りたい背中』）

おおよそ、所在なさでもって周囲に妙な態度を取ってしまったわぬように我慢して、この音を封じ込めてしまおうと言ったところだろう。胸が締め付けられるのも、無意識に体がこうした意図を汲んでくれているからだと思われる。しかし、繰り返しを避けるために書き出された、孤独の音、というのはまずい。さびしさは周囲に人がいるからこそ感じられる。気急げに見せてくれたりもするしね、とは語りかけである。他人に語りかけているからこそ、声が届かないことにさびしさを覚える。孤独は時に、人さえないなくなる。語りかける相手もなく、ただただ自分と向き合わざるを得なくなる。

電話ボックスは隔絶された空間を作る。ただでさえ何も荒野に、さらなる荒涼を生み出す。試みに、知り合いに電話をかけてみるとしようか。おぼろな記憶に基づく情性で動く指にダイヤルを任せながら、耳はボタンとボタンのつなぎ目を切るような音を聞いている。仮に記憶が間違っていたら不安と、つながってくればという期待のもとに、点々とした音を聞いている。気付けばダイヤルよりも、途絶え途絶えに鳴っている、金を切るような音に全てを賭けている。孤独の音というのなら、こちらに賭けてみたい。もっとも、空想による提案ではあるが。

東日本大震災において公衆電話は重宝したという。互いの安否が知れない中、人々は電話ボックスに長蛇の列を作ったそうだ。

宮城の内陸にて地震に遭った私は、三日ほど誰とも口を利かないで過ごしていた。携帯は充電の手段が絶たれ、大学の人間との交友もほとんど絶っていたから、沿岸で何が起こっているかさえ知らないまま、太陽を頼りに本を読んで眠るための疲労を蓄えていた。

食料が尽き、バスタブの貯水も切れそうになったので、買い出しに行くしかないかと外に出てみると、電話ボックスで受話器を取っている年配の婦人が目に入った。その時はまだ停電にあっても機能すると知らなかったから、口が動いているのを見て、

思わず立ちすくんでしまった。実家のある山形に助けの手を伸べられるだけの余裕があるかは分からなかったが、受話器を取ることにした。

結果、その日の内に宮城を離れる事が叶ったのだが、向こうは番号通知に表示される見知らぬ数字を、はじめはどう受け取っただろう。続けて話しだされるあの時の声を、どう聞いていただろう。何も知らなかったくせに、誰かと話せたという事実に昂ぶって、軽々しく声をかすれさせていた記憶はある。はじめに息子であると告げなかったら、母親はまともに応対してくれていただろうか。

迎えを待っている間に電気の供給が戻り、災害の全容は知れた。母親の車に乗って山形に向かっていく間、三日の内に起きた事をそこで全て話し尽くすつもりのような、はしゃぐ口調を抑えられなかったのを覚えている。

(了)

自由投稿

歌集

セキレイの心

燈台の 真白き光りを うつしとり

鳥の群れ鳴く 日の岬かな

ひかる空を 遊ぶ千鳥の わらう海

腰かけて見る 春の声、色

日御碕灯台（大社）



イコ

「何メートル？」

聞く声すれど チョココかじり

ねころぶ崖の 岩はしづかに

潮風に 羽なびかせて わらいなく

鳥のこぼした 空の落書き

経島（大社）



セキレイの心

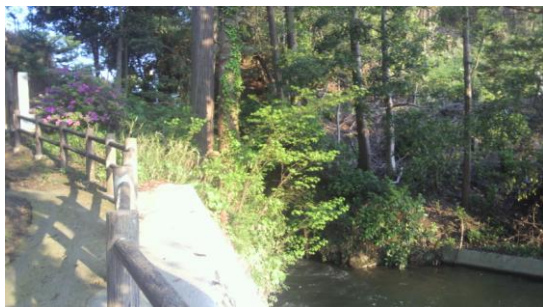
斐伊の川のみづひく岩樋 かがやく陽

しづかなる日の ささなみ祝ひ

しじま川をセキレイの心 進み行けば

砂州に展けし天の足跡

岩樋公園（大津）



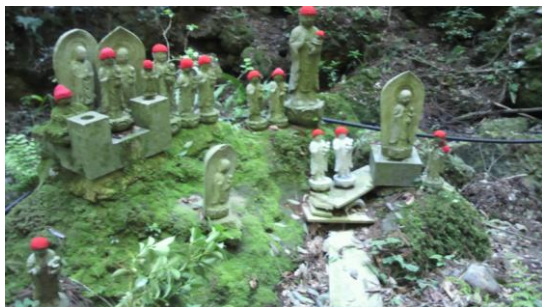
帰る日の
暗路に佇ちし 常夜燈

大鬼のカゲ 曳き連れて往く

峡谷に
遊ぶ子の聲 こだまする

苔生す樹下に 赤帽の地藏

立久恵峡千体仏（乙立）





立久恵峡 (乙立)

やまあいの 3人水辺に 近寄りて

瀬に石放る 27の暮れ

山峡の 汗ばむごとき 陽気にも

両足ひたす 水はまだ春

湧き出づる 水の落つるに 聞き惚れる 音のひろがり 音のすみかよ

暑気逃れ 無上の泉 おとづれて 野猿のやうに 水をすくえば

濡れ肌に 緑衣纏わす 佐田神の 艶やかなりし 指先を見ゆ

無上泉（佐田）



自由 小説

酒茶漬けの味

小野寺那仁

劉という自称財閥の息子が何やら騒いでいるというのでマジシャンとクリスタルと示し合わせて食堂に行ってみた。ふたりとも食事を未だとっていない。

寮監が喚きたてる劉をなだめている。私たちは寮監に対して大きな声で挨拶する。一年生同士で挨拶する必要はないが、先輩には必ずしなければならぬ。寮監にしなければならぬかとは定かではない。

「だから俺はね。ここにナップを置いていたんだよ。中には財布が入っていて、三万円はあったね。それで、棚からコメを出してみると、これがもう日本酒のスープに浮かんでいるのよ。食べられたものじゃないね。匂いがきつくてね。臭い。臭い。まあ、でもこれ、初めてじゃないし、よくあることだし。日本酒を飲まなきゃいけないルールは特になし、俺の部屋の先輩がしたわけじゃないから棄ててやるって思ったんだよ」

「え、酒茶漬けかよ」泣きそうな声をマジシャンはあげた。食器棚を確認すると二十ばかり残っている夕食が発酵を始めているかのように匂いたっていた。

「晩飯を抜くしかないな。棄てたらまずいよ」

「食ってるやつもたまにいるよね」

「いや、ほとんどの奴が食ってる。酒の好きな奴は平気なようだよ」

劉は私たちに気が付いたのか犯人捜しをするかのようにじろじろと見てくる。

「それで、俺がシンクに酒入りの飯を持って行ってじゃあじゃあ流したんだよ。食えないからね。戻ってみるとナツプがない。何人か、いや十人くらいかな、寮生がいたんだ。ほとんど一年だよ。俺はそこにいたひとりひとりに訊いて回ったんだ。お前か？お前か？

俺のナツプを持って行ったのは？ それとも他に誰か来てナツプを持って行ったんか？ とね。ところが誰も答えないじゃないか。知らないってさ。それで俺は頑張っただけで、あちこち捜したんだよ。すると出てきた。残飯を捨てるゴミ箱から。上からキャベツやコロッケを捨てるものだからナツプも汚れてしまったよ。だけど洗ってる暇もなく俺はナツプの中身を確認したよ。三万円は大金だから。台湾ではこれだけ働いて稼ごうと思ったら死ぬほど働かねばならないことを知らないだろう。お前らは、よう。で、臭いの我慢してナツプを開けて中の財布を確認すると、やられたよ。札だけが抜き取られていた。俺は泣きたくなかったね。日本人は嘘をつかないし日本はまともな国だと信じていた。でもそれは間違いだ。だいたい俺がここに留学する時、学校は外国人留学専用の寮だと説明したのに入ってみたら日本人とまあ在日のコリアンは

いるみたいだけど外国人なんかひとりもないじゃないか。それも何故か俺だけ」
 「残念だけどここは自治寮だから警察に訴えることも大学当局に相談することもできないんだよ。もちろん私に言うこと自体が間違いないんだ。君は自治会の役員に相談すべきなんだね」禿頭の定年退職した老人の寮監は言う。確かに彼に何を言っても無意味だった。彼はただただ給食の寮母の管理や食事の買い出しをしているだけであった。そしてそれだけでも二百人もいる寮の中では大変な仕事だった。だいたい彼は寮の体制をつくり出した張本人であるという噂だった。ただの老いぼれではない。そして顔のある唯一の大人だった。寮母たちはいつのまにかやってきて三度の食事を作る
 と風のように消えていく。もう三カ月にもなるのにただの一度も見ることがない。彼女たちはのっぺらぼうだ。

「劉くん、いや劉さん。あと一年我慢してくれないかな。二年になれば今の君の立場は解消されるんだ。君は三十歳だ。だから国際交流センターになるまで留学しているかどうかは保証できないけれども。君はさまざまな国から留学してきた学生の中では選ばれた存在なんだ。私たちはほとんどの学生を断った。彼らは日本語を話せないんだ。日本人とコミュニケーションを取らなくて何が交流センターだって私が反対したんだよ。近いうちにこの建物は自然に壊れて消滅してしまうに違いない。その時は私もこの仕事が勤まらなくなるくらい高齢になる。寮のシステムもすでに古ぼけていて

自治の精神も必要なくなるだろう。だが警察や時の権力が誤っていた時代に私たちが勝ち取り守り続けてきたものなんだ」

そうきくと寮は左翼の巣窟なのかと早合点するかもしれない。実のところは右翼というか、体育会系の幹部と応援団が支配し民主的とはどうもいえない言論の抹殺された空間だった。そして無秩序でアナキーなカオスでもあった。もうひとつある鉄筋コンクリート三階建ての「志学寮」がサヨク革命家に満ちているという噂だった。同じ学部の友人がいたから最近になって行ってみた。だが麻雀をしているとごく普通の学生にしか出逢わなかった。屋上から建物の側面には過激派〇〇の垂れ幕がなびいていた。不気味な旗もあったのだ。そういう知識はこの寮の支配層から教わった。彼らの夢は「志学寮」と戦い彼らを粉碎することに尽きる。はつきりした日時は教えられていなかったがいつかはやるだろうと私たちは思っていた。私が劉を見かけたのは初めてではないことを思い出した。小太りで眼鏡を掛けて自分の家は台湾では相当なブルジョワの部類に入ると吹聴していた。けれども彼の見た目は富裕な印象からは、かけはなれていた。

「あいつ、オリエンテーションの時も金を取られたって騒いでいたなあ」マジシャンがのんびりした口調で言う。

「だいたい目星はついているけどな。吉野か葛原かあのあたりじゃないか」とクリス

タル。

「意外に先輩が後輩の金を盗るってことはやらないよな」私が同調する。

「そうそう。それはしない。吉野たちは性質が悪いから」

「悪すぎる」

「金を盗るってことは別にして吉野のように毎晩ディスコでナンパするって羨ましい」クリスタルは言った。

「お前らは垢抜けないな」それは私とマジシャンに向けられた言葉だった。私たちは同郷だった。毛高校や毛町を知っているのはマジシャンだけだ。県内でも私の出身校について知っている者は僅かだった。クリスタルは広島出身で都会に憧れてここに来た。吉野や葛原は東京から都落ちしていた。新宿高校だの九段高校だの言われても私たちにはどういふ学校かわからない。けれども東京出身者は酒を呑むと自慢しあっていた。私の部屋の能面もそうだった。彼は私立の麻布高校とかいふ学校である。もし名門校なら彼は高校始まって以来の落伍者だろう。

「金があったら俺だって」クリスタルは悔しそうだ。

「毎日クラブで踊ってナンパするんだけどな」

「吉野たちみたいにか？」「ああ」

「俺は能面と若原の使い走りを毎日やっているから無理だよ。身分は奴隷だ」私は言

う。

「僕もそうだよ。宇佐美さんの奴隷なんだ」マジシャンが言う。

「それが普通だよな。クリスタルの部屋はどうなっているんだ？」

「ううん。あんまりしゃべらない。いつも自分のベッドで勉強してるな。二人とも。司法試験でも目指してるんじゃないのかな。だからお前らの部屋に行くんだけど。宇佐美さんは怖いし。能面は俺も嫌いだよ」そういえばクリスタルは宇佐美の部屋に来たことはない。私の部屋には毎日来るけれども。一緒に風呂に行くだけであった。クリスタルは清潔であるうと心がけていた。風呂は浴槽に辿り着くまでに数十人の先輩と顔を合わせるのです。そのたびに大声で挨拶しなければならず、面倒であった。ようやく辿り着いてもドブ川のような濁ったぬるい水に少し浸かるくらいのことであった。

「宇佐美さんはそんなに怖くない。能面も若原も君たちを嫌っているよ。もちろん俺の事も」

「俺たち、居場所がないなあ」私たちは近くの牛井屋まで食べに行くことにした。遅くまで外出している連中は酒茶漬けを食うことになる。それは奴隷の職務を怠った罰なのかもしれない。

三人が早足で食堂を出て行こうとすると先ほどの寮監に呼び止められた。

「君たちは何も知らないのか」

「ええ、もちろん」

「劉さんは私たちを疑ってないでしょう。信用してるからですよ」皮肉なことに寮監には一年生であっても生意気な口を利く。これでは用務員に過ぎない。

「ああ、信用してるみたいだね。それで君たちはA棟だったかな？」

「はい」そう私たちは揃ってA棟だった。私が102号でマジシャンは向かいの110号、クリスタルは隣の103号室、いずれも四人部屋で監獄のような小部屋だった。「大きな声では言えないが犯人はA棟にいるみたいだから責任者の宇佐美君に届けてもらって委員会に報告してほしいんだが」

「それっておかしくないですか？ 劉さんは他の棟でしょう。他の棟から委員会に報告しなきゃ」私が付け加えた。「はっきりA棟に犯人がいるのならわかるけど。証拠はあるんですか」

「ああ、言い方が悪かったな。さっき話してわかったんだけど劉君のいるD棟から被害届が既に委員会に提出されているんだけど委員会では公にしないと書いて撥ね付けられたそうなんだよ。それで宇佐美くんから改めて委員会に提出してもらえば委員会も動くかもしれないという劉君の希望だね。私にも何のことやらよくわからないんだけどね。おそらく宇佐美君なら何等かの情報を得ているのではないかという劉君の希望的観測だと私も思うんだけどね」

「わかるようなわからないような」クリスタルは言った。

「要はあれですよね。委員会がどうこういうより宇佐美さんの耳に入れとけばいいってことですよね」マジシャンが言う。

「そうそう、そうなんだ」

「ああ、そうか。どのみち委員会は動かないってことは決定されているわけなんだ。宇佐美さんもそれを知っているという」

「私有財産は認められないという風潮があつてな」寮監は笑っていたが私は冗談じゃないぜと思つた。三人の一年生は顔を見合わせた。「オリエンテーション時から感じていました」

「月に四百円ですからね。寮費は。そんな貧しい人たちは大金を持っていちゃいかんということですかね」とクリスタル。そう、この寮は食事代三食込みでも四百円しかからないのだった。それを目当てにしていたわけではない。千六百円の「志学寮」を希望しながらも空気がなくてこちらに廻されたのだ。すでにこの一ヶ月で逃亡者は十六名にのぼっている。

「宇佐美君はオリエンテーションの実行委員長だったし、新入生が彼を頼るのはありうるけど、積極的に動くとは考えにくい」寮監は無責任に言った。かつてはこの老人も寮で唄われる「逍遙の唄」や「芙蓉橋」などの名曲を作詞作曲したミュージシャン

であったそうだが、今となっては往時の気概は見る影もなく消え失せている。

「じゃあ、長谷川君だったかな、頼んだよ」

「はい、わかりました」マジシャンは引き受けた。マジシャンの部屋には最近になってようやく足を踏み入れる気になったので遊びに行くことにしている。陰鬱であり陰険でもある能面やピージーズ狂の無気力な若原とは話す気もしないのだった。そして新歓以来のだからなら果てしなく続いていく夜の飲酒がようやく途切れがちになってきたのだった。

まったく能面や若原といったら寮内でのつきあいの無さは格別であった。彼らを訪れる者はひとりとしていない。彼らが部屋から出て行くこともない。アルバイトしているわけでもない。私が朝から学校に行く頃にはふたりは寝ていて、帰ってくるふたりともいる。寮内では彼らの存在はほとんど無であった。それを上回るのはクリスタルの部屋のふたりであるそうなのだが。(クリスタル談) 実際のところは私にはわからない。彼らを見たことはただの一度としてなかったのだから。

深夜まで営業している店は牛丼チェーンしかなかった。煌々と明かりが漏れているのはいずれもビニール本の店だった。ビニール本は中が立ち読みできないようにエロ本をビニールで包装したものだ。黒々とした茂みにピンクのつぼみが映っているがた

いていはマジックでぼかされ目を凝らしてもはつきり確認することは難しい。三千円が最低価格である。盗聴テープも売っている。ラブホテルや公衆トイレで録音したものだ。いずれも高額で学生街に店を構えているが学生で購入する者などいるのだろうか。私は時折能面から頼まれて牛井を買いに店まで走っていた。タイムリミットは十五分だった。酒を呑んだ後の全力疾走はきつかった。店員がぐずぐず作っていると私は腹を立てて早く作れと怒鳴った。それでも私よりも年長の店員が聞きいれるわけもなく唐辛子を抜かれたりされるくらいのことであった。

店内で私たちが食べているとブルーの派手なジャケットとオールバックのテカテカに髪をオイル漬けにした吉野が乱暴にドアを開けた。彼の体格はがっちりとしていた。私たちをちらりと眺めた。そのあとを金縁眼鏡でリーゼントの顔色の悪い葛原が幽霊のように寄り添っていた。にやけた笑いが薄気味悪い。彼もまた同じように私たちに視線を投げかけたがすぐに眼を逸らした。葛原の乳首が透けて見える黒い下着のようなシャツが印象的だった。私たちは寮がいかにも運営されているか不思議に思うという話を延々としていたが、時折耳を傾けると彼らはデイスコでナンパした女とどうやってトイレでセックスするかという話に余念がなかった。盗み聞きしたところでは吉野は三人の酔いっぶれた女とセックスしたそうである。葛原はできなかつたと嘆いていた。吉野に言わせれば話で盛り上がるよりもセックスで盛り上がる方が楽なのだ

そうだ。傍らでそんな話をするものだから自分たちの冴えない話はそっちのけになり三人ともが彼らの話に関き耳を立てていた。

やおら吉野は四角張った顔をこちらに向けて話を中断した。そして私たち三人に向かって説教じみた調子で語りかけた。酔っているようだ。

「お前らはなあ、長谷川、今村、三好だったよな」まったく話したことがないというわけでもなかった。オリエンテーションの頃には少しは話したかもしれない。私は話していなくても彼らの印象ははっきり残っていた。ずば抜けて目立っていたから。他のふたりはどうかはわからないが私は毎日の飲酒で意識も朦朧としつつあった。二人とも同じA棟だから便所や浴場や廊下で毎日顔を合わせているが特に話はしなかった。

吉野「童貞なのは仕方がないだろう。だけど包茎なのは良くないぜ」

三人は言葉に窮した。そして顔を見合わせる。

私「なんで知ってるの？」

マジシャン「俺は童貞じゃない！」

クリスタル「どうだっていいだろう、ほっといてくれよ」

反応したのはほぼ同時であった。

吉野「そうらみる、やっぱり包茎じゃないか」

葛原は笑い転げている。

葛原「包茎だったとしても処女の女は気が付かないだろうな。確認するわけじゃないし、他の男と比較しているわけでもないし」

吉野「お前らはチンカスII恥垢を溜め込んでいるんだぞ！ 病原菌の塊じゃないか」
そう言われて私は愕然とした。男ばかりの監視された部屋の中ではマスターベーションはできないしパンツを汚してもいけない。そういえばこの三カ月は勃起した記憶さえ思い出すのも難しい。

私「どうして知っているんだ？」

吉野「いやあ、風呂で見かけたからだよ。お前自分のペニスと他人のペニスの形状が異なるのに気が付かなかったのか？」

葛原が口を挟む。

葛原「ああ、この三人は一緒に風呂にはいるからわからないんだよ。三人とも皮被っているから」

吉野「なるほどね！」今度は吉野が腹を抱え始める。

葛原「もうひとりいるんだよな」

吉野「塚本」

葛原「A棟じゃ、四人だ」

私「そんなの自然に治るんだろう」

吉野「いやあ、それはどうか。ちなみに俺は初体験の女に剥いてもらったけどな。そいつは三歳年上だから詳しいのさ。初めの女は年上にするかトルコ風呂に行った方がいいと思うぜ。女が可哀そうだから」

葛原「皮被りってできるのかな。ちょっと難しいじゃないか。激痛が走るぜ」

吉野「ううん、それは人によるだろう。仮性と真性があるらしいからな。包茎には。手術しなければ剥けない場合もあるそうだ」クリスタルは屈辱から顔を真っ赤に染めていた。

その程度の知識は私だって週刊「プレイボーイ」などの雑誌で得ていて知らないわけではなかった。だが亀頭の剥き出しになった、先の割れた状態ではデニムに突き当たると痛くてたまらないのだった。だから成人の状態にしたいくてもなかなかできない相談であった。それは私の頭痛の種でもあった。最近はそのどころではなかったのを忘れていた問題でもあった。

私以外のふたりはすっかりしょげていてどういいう状態にあるのかも訊きだしにくい。私も虚勢を張っているだけである。

ひとしきり吉野と葛原は隠微な話題にふけていた。私たちは黙っていた。

「あ、そうそう。今度の寮祭の委員長に推薦されたんだけど同じA棟の仲間として票を投じてくれよな。ここは俺が奢るから」

そう言われても私たちは答えない。

「塚本も仲間なんだろう。彼にも言っておいてくれ。あいつ苦手なんだよな。D棟じや評判悪いようだし」

私たちも塚本とは話さないけれどもA棟ではあるから顔を合わさないわけではなかった。

「君は金回りがいいんだな」私が言った。

「ああ、おかげさまでな」

別に犯人捜しをしているわけではないが私は確かめたくもあったので訊いてみた。

「ディスコ帰りなのか？」

「いいや、今日は行ってない。平日はダメだな。常連ばかりだ」

「じゃあ何でここにいるの？」

「なんでってお前らと同じ理由じゃないか！ 食堂の飯が酒茶漬けになってたからここに来たのさ。少しは食べたけどさ。あれは不味いし臭いな。初めの頃は我慢して全部食べたこともあったけど今ではムリさ。あれ、誰がやるんだろうね」

「宇佐美さんがやるっていう噂だぜ」と葛原。

「やらないでしょう」同室のマジシャンが言う。「宇佐美さん怒っていた時があったから」

「劉がやってんじゃないのか？」

吉野が適当に言うので私たちは三人で口をそろえて否定した。グレーの吉野に対して劉が財布から金を抜かれた事実は黙っていた。尻尾を出すのを待っていたのだ。

「やりそうな奴はいくらでもいるから、わからないよな」葛原。

「誰が残っていて誰が逃亡したのかもわからないぞ。逃亡者リストとかはないからな」勘定を吉野が支払い、私たちは店を出る。三人はとぼとぼと二人は意気揚々と歩いている。その気分の差なのか二人はどんどんと先に進んで街路灯のあるカーブまで来ると見えなくなった。隣にはカクテル光線のなかで男女がテニスを楽しんでいる。新しいテニスコート。私たちには縁遠く眩しかった。私になんらかの感情を取り戻した初めての夜だったかもしれない。

「やってるのかな、吉野」

「やっててもやってなくても流れは吉野犯人説に傾くだろうな。あいつ目立っているから」クリスタルが言った。

「宇佐美さんに告げ口するのか？」

マジシャンは黙っていた。少し間があって「俺は関係ないから知らないよ。委員会

が宇佐美さんに処分しろって命令するだろうな、たぶんA棟だから。だから俺が言っても言わなくても同じだから黙っているよ」マジシャンが答えた。

「それは良いよ。寮祭の実行委員長になるんだったらケジメとして処分されるに違いないな。でもあいつはなるだろう。あいつしか実行委員長になりそうな奴はいないだろうから」

そう私が言うと二人は納得してうなづく。

「だいたい逃亡できるなら誰だって逃亡したい環境なのにあのふたりは楽しんでるからな」

だがマジシャンとクリスタルはそれには同意できない様子だった。

「逃亡したいのか？」私に訊いてきた。

「したいよ」

「でも二年になれば天国なんだぜ。後輩が入ってきて奴隷にできるから」マジシャンが言う。彼らには私の苦労は分かっている。新歓コンパでどれだけの目に遭ったのか、私は誰にも話していない。今までに逃亡した十六人はおそらく私と同じような仕打ちを受けたに違いなかった。でもそれを今彼らに言う気にならなかった。不思議なものだ。寮生には心を固く閉ざしてしまう。ふだん大学で顔を合わせる仲間たちとはすぐに打ち解けて寮のことを愚痴として聞いてもらっているのだが寮生は信用なら

ない空気がどこもなくある。何かの拍子に寮の不満を委員会に告げ口されてしまうからかもしれない。事実、私たちだって吉野に関してはずいぶん憶測であれこれと噂話を形成しているのではないか。常に他人の目が気になる。逃亡してもいっこう構わないのだ。そうさせないのは見えない力が働いているからだ。私は二年になって自由を得ても奴隷などには必要ない。それでは自由とは言えない。むしろ奴隷が逃亡してくれた方がせいせいする。奴隷には常に自らの身分をわきまえさせるためにあらんかぎりの嫌がらせを常に考えておかねばならない。それが億劫だった。部屋単位でも和気藹々とした関係はここでは望めない。どういうわけだか「志学寮」のような自由な雰囲気はつくり出せないようだ。欺瞞の発する酸鼻は酒茶漬けのように寮内に満ちていた。

オリエンテーション

私たちはポロポロに剥がれた畳の敷きつめられた武道場に集められていた。不安から解き放されるために何時間も何日も要した。はじめは新入生たちはニコニコと笑っていた。そして私語もかなり多かった。竹刀を片手に現れた委員会の男たちが私たちをあっという間に支配した。その首魁、すなわち委員長は自己紹介で語ったところで

は北海道出身の文学部四回生で熊南（クマナミ）武史ということでもまさに名が体を表していた。身の丈は天井すれすれまであり体重は一〇〇キログラムは超えている。すっかり春なのに黒い革ジャンパーを身につけていた。かなりの高級品にみえる。小太りではあるが「北海のグリズリー」の名にふさわしく動きは敏捷だった。声も雷のようになり私たちの動きを止める力が籠っていた。彼は武道をしているのか定かではなかったが武闘派であることは見た目にも明らかだった。応援団の二〇〇キロ越えの後輩を常に脇にはべらせていた。熊南にふるえあがった新入生を彼は石ころでも眺めるように冷やかに見つめていた。眼からは強烈な光と云うか光線が放たれていた。それは獲物を見る眼でもあった。彼には笑いの欠片もない。そして号令や説明以外はほとんど何も語らず、機嫌が悪いのか不満をかみ殺しているかのようにみえた。奈の自治については彼の口から滔々と述べられた。そして寮の真の支配者は彼ではなく、彼が崇め奉る龍一郎さまだと付け加えた。彼が委員長であるのも龍一郎さまの決定に依るそうなので断じて熊南は独裁者ではないとおごそかに宣言した。龍一郎さまは一切の公式非公式な行事には参加しないが彼に非礼を行ったものは厳正に処罰すると言い放った。委員会の人事や寮の人員配置は龍一郎さまが独断で決めるという。それでは自治寮とは言えないではないかとなどという意見はもはや通用しない。

幹部たちはそれぞれに自己紹介を行った。けして熊南よりも目だったり受けたり長

くったりしないように心配りをしているのが見え透いていた。応援団の猛烈に肥満した茗荷谷は学ラン姿である。応援団旗を守っているという話だった。彼の部屋には寮旗も保管されていて狭くて眠る場所もないと冗談交じりに話すと受けるのは受けたのだがあつという間に静まりかえった。彼はまだ二年だった。

そうして判ったことは熊南はD棟の支配者。A棟は宇佐美、B棟はインテリジェンスな顔立ちの秋山、C棟は温厚で親切そうな二宮がリーダーであるということだった。そろいもそろって眼は笑っていない。それぞれが強靱な肉体を持っているのは間違いない。何日にもわたるオリエンテーションのさなかで座ったことは一度もない。ほぼ直立不動の姿勢を保っていた。私たちは座っていることが多かった。そして日ごとに快活さが消えていった。誰も口にしないが誰もがわかりはじめていた。

到着したその日は修学旅行の夜のように騒々しかった、消灯は翌朝七時に起床して万博公園までランニングとあったので九時であったが、蒲団が敷きつめられた武道場でおのおのが出身地や学部の話などをいつまでもしていた。闇の中ということもあって私は誰と話したのか何を話したのかも憶えていない。だが誰かとは話していたか、誰かの話を聞いていたかしていたのは確実であった。あとから想えば私が話していた相手は塚本だったかもしれないが話の内容さえほとんど記憶に残っていない。その夜に目立っていたのは劉と吉野だった。

翌朝から私たちの試練は始まった。新入生はジャージに着替えて名前入りのゼッケンを張った。僅か数カ月前のことだが何をどうしたのかも憶えていない。先導していたのは親切にも自分もジャージに着替えた宇佐美だった。宇佐美のジャージは擦り切れてところどころ穴が開いている貧相なものだった。霧がうっすらと立ち上る朝の舗道を宇佐美が軽やかに駆け抜けていくので私たちはついていくのに必死だった。最後尾には熊南や他の幹部たちが落伍者を取り締まるために竹刀を持って追いかけてきた。約四十分後に公園に到着すると受験勉強を終えて間もない私たちは息も絶え絶えになっていった。うずくまったり寝転んだりしている。「煙草を吸ってもいいぞ」宇佐美が怒鳴った。それに応えて煙草を吸い始めたのは吉野と葛原、そして宇佐美だった。五分も休まない。また回れ右して寮へのランニングは続けられる。「これから何日間はこのメニューだよ」誰も話さない。七十二名の新入生はぞろぞろと先導者に大人しく従った。まるでこのランニングを続けないとせつかくの合格が取り消されてしまうような恐怖にそそのかされて。

食事前のランニングにしては出発が遅かったので折り返して大学正門の辺りに辿り着く頃には日はすっかり高くなっていた。まぶしい光が私の周囲にまとわりついてくる。自動車一台や々と通れる路地には学生向けの食堂や不動産店、文房具店、喫茶店が縁日のように立ち並んでいて登校する学生たちで徐々に埋まりつつあった。正門

から右に折れて坂道をあがって降りればテニスコートの隣りは寮だった。正門には立て看板が林立していた。大きく日米安保粉砕や国際反戦デーの呼びかけなどが書かれていた。ハンドマイクを使いヘルメットを被ったどこかのセクトの学生がアジを飛ばしていた。私の地方ではあまり見かけないのだが大学ではよくある光景なのだろう。そして学生運動が引き起こしてきた数々の事件、連合赤軍事件やハイジャック事件など私は知ってはいたものの身近に感じはしなかった。その端くれなのだろうか、ここで語られる言葉はすでにすり減って人々に感銘を与えるにはほど遠く、けれども長年同じことをしゃべり続けてきたために妙に洗練されて専門的で何を言っているのかよくはわからないけど一種の芸の域に到達しているように思えた。サヨクらしく赤い旗が幾本か立っていた。そこでピラを配っているのはせいぜい五人くらいしかいない。学内にはもっと大勢いたかもしれない。ほんの一か月前に入学手続きに来た時にはかなりの数の運動家がいたのだが、たまたまなのか数が少ない。私たちは汗ばみはじめた。正門のサヨクを横目に右折する。それで駆け足を速めて一気に寮に戻りたかったのだが、先頭の宇佐美が足を停めた。それで集団は失速した。

後方を宇佐美が眺めている。私たちもそちらを見る。

黒ジャンパーがピラ配りと対峙している。私たちはばらばらと隊列を乱してそちらに駆け寄る。言い争っているのだ。ハンドマイクの学生が熊南に何か語りかけるとい

きなり熊南は殴りつけた。それまで大きな声が轟いていたが一気に静寂になる。私は目を見張ったが足は動かさずにすくんだままだ。サヨクの五人と寮生たちが殴り合いを始めているのだ。熊南はそれでもほとんどひとりで五人を相手にしていた。ほとんど一年生は参加していない。横たわったサヨクの学生のひとりが寮生に足蹴にされていた。その男は髯だらけだった。多勢に無勢だったから残忍な気分が誘発されたのかもしれない。私はサヨクとは警察を除けば絶対的な暴力装置だと思い込んでいた。民間人の手に負える連中ではないと。だから暴力学生には機動隊が立ち向かうしかないのだと。そう思う一方で彼らこそは体制に反逆するヒーローだとも思っていた。それはプロレスのヒールのような自由な存在という認識だったか。

不良学生同士の喧嘩ではないから熊南は容赦なく襲いかかって彼らも謝罪することもなかった。そうして誰も止めることなどできなかった。大学の職員や他の体育会系学生が多数駆けつけてきた。それで仕方なしにサヨクは逃げ出した。

その事件は私に暗い気分を背負わせた。私たちは集団としては右翼なのだ。ひとりひとりは反戦平和をサヨクと同じように望んでいるかもしれないが寮という括りでは右翼勢力であり暴力に加担し暴力学生を支持しているのだった。

「また今年もやったのか」宇佐美が吐き捨てた。彼は煙草を吸っていたが事件が収束すると慌てて足で揉み消した。そして急に号令を掛けて寮へのランニングを再開し

た。一部始終を目撃していた通行人や呑気な学生や新入生たちは私たちを異様なまなざしで眺めていた。それは私の思いすごしに過ぎないかもしれないが、疾しさを感じずにはいられなかった。

熊南のパフォーマンスに感動して心酔者に成った者が果たしてどれだけいただろうか？それは疑問なのだが、熊南は男だったら彼のようになりたいたいという気持ちにさせるエネルギーな面や強い意志や強靱な肉体は備えていた。そして懐の深さもあるかもしれない。ひよっとしたら根は優しい善人なのかもしれないと妙に想像を掻き立てさせるキャラクターであり彼が政治家に将来なつたとしても誰も疑わないだろう。貫録と言う点ではテレビで見かける若い議員などよりも圧倒的なアウラを放っていたのだ。だが彼と話したりするのは嫌だという気持ち先立つのは私だけだろうか。私が不安を抱いたのは熊南が私と同じ国文学科であり学校で遭遇するかもしれないということだった。そうして国文学というのがどうにも彼とは結びつかない。結びつくとしたら萬葉集の大神家持や古事記の素戔嗚尊あたりなのだろうか。あるいは防人か。いずれにせよ彼は神話の世界から降り立った一種異様な醜の益荒男だったのだが、顔立ちが醜悪だったわけではない。

朝食後、私たちには冊子が配られた。ひとり一冊ではなく經典のように何人かで回し読みする相当以前に印刷されたものだった。それは歌詞しかなく♪はないので委員

長以下が歌うのを真似て覚えるしかないものだった。曲目は大学の校歌である学歌（のちにカラオケで見かけたときには正直驚いた）や寮歌、逍遙歌、宴会の時に歌われるものや学祭や寮祭でしか歌われないものや卒業の時の歌などであった。おそらくは明治末期から大正ごろに作詞されたもので新しくても戦前のものである。内容があまりに古色蒼然としている。陋屋だとか華だの愛だのやたらとあらわれるがもっとも多いのは自治であり自由という言葉だった。委員会の歌はうまいとはいえなかったが一年生は意外にすらすら覚えて二時間も経つと誰もが口ずさむようになった。それで草生した中庭であらんかぎりの声を出して唄うことになった。正午までの小一時間、私たちは声をかぎりに熱唱した。それは何のためなのかは本当にわからない。発表会があるわけではない。宇佐美は面白がって竹刀が折れるほどに地面を叩きつけて声が小さいと怒鳴っている。おそらくは一種のイニシエーションだったのだろう。こんな古代歌謡を唄わされたらロックミュージシャンや現代音楽を志す者なら多少は音感に異常をきたすに違いなかった。

昼食後、再び武道場に集められた。今度は自己紹介の練習だった。一週間後、寮の全員が集められる。そこで全員に向けて自己紹介をせよと言うミッションだった。七十二人もいるのだからこれはなかなかに進んで行かなかった。途中で新入生を数えていた秋山がひとり足らないと宇佐美に告げた。宇佐美は首を捻る。だがひとりいなく

なっても自己紹介以前だから誰がいなくなったのかはわからない。探すのか？ 秋山が言うが探すと言ってても名前も顔もわからない十八歳か十九歳くらいの男をどうやって探せばいいのだろうか？

「逃げたんだよ」宇佐美が面倒臭そうに言った。「オリエンテーションで？」「名簿と照らし合わせれば名前はわかるだろう。まあ逃げたとは限らない。それに逃げてもいいんじゃないか？」そこまではそれほど気にならない会話だった。問題は宇佐美の次のひとこと。

「どうせそのうち逃げるんだから！」

その後父兄から連絡があり少年は荷物や靴を寮に置き去りにしてはだしのまま広島まで逃げ帰り無事。心配して探さなくてもいい、大学も入学辞退したということだった。早朝に逃亡したらしかった。それを聞いて笑わなかったものはいない。秋山は苦笑しながら、

「これからも逃亡者は数多く出るだろうが私たち委員会は追いかけて寮に連れ戻すようなことはしません。危険なわけではありませんで逃亡しないでください」と言ったが熊南は納得しなかった。彼の足裏には多数の石やガラスの破片が埋まり込んだことだろうと私は想像していた。

「それはちょっとおかしいだろうが。秋山、逃亡を前提に話していないか？」

秋山はどぎまぎしていた。

「いま二年は何人いるんだ？」

宇佐美がふたりのなかに割って入る。三人でひそひそ話になってしまったので私たちには聞こえなくなった。代わりに二宮が司会を務め自己紹介の方法についての説明を始めた。

二宮は腹に力の籠った低い声でゆっくりと前任者の言葉を引き継いだ。

「七十一人いるから自己紹介はひとり二分程度で行ってくれ。これは君たちを各々の部屋の先輩に引き取ってもらう参考になる。氏名や出身地は当然のことであるが体育会系、ことに武道、少林寺や空手、相撲、柔道、応援団などを希望する者は必ずアピールするように。部屋決めの際に参考にするから。ちなみに私は柔道部に属して……」と二宮は勧誘するような口調になり熊南の制止命令を受けることになった。新入生の中に体育会系の部活動志望者は若干名いるには違いないだろうが、見渡した様子ではほとんどいないようにも思えた。私はひ弱な方だと自分では思っていたが私よりも細い腕や青白い顔をしたいかにもひ弱な感じの男はいくらでもいた。最初にする人は大変だろうなど私は思っていたらア行から始まることになったので私は緊張が解けた。これなら参考になる人は数多い。

予想通り、初めの男はひどく緊張していきなりドモっている。声も聞き取れない。

いほど小さい。二宮と宇佐美が竹刀をバンバン畳に叩き付けて「もっと大きな声を出せ。やり直しだ」と騒ぐ。それでもちっとも大きくならない。余計に委縮してしまったのだ。彼の顔は泣きそうになっていた。名前だけ何度も静まりかえった武道場で繰り返し発せられた。

なかなか次には移らなかった。二分の自己紹介でもきちんと大声のできるようになるまで何度も繰り返しやらされるから結局十分くらいはかかってしまうのだ。とうとうしまいには半ばやけになったように声を張り上げていた。それでようやく合格と言われた。そのあと学部や出身地や何か一言という具合に均一の大声を張りあげるのだが準備してないので「つまらない。もう一回はじめからやり直し」と言われた。何か惹きつけるものがないと解放はされないのであった。「個性を出せ！」また言われる。その頃には、多くの、いや一年生全員がメモ用紙に発表する内容を書きつけはじめていた。私は、この人はいざれ逃亡するんじゃないかと思わずにはいらなかった。最初だからということはあるがどこも態度が反抗的にさえ思えた。大声を出すくらいいいじゃないか。とにかく大きな声が基本なんだと私は合点した。

やがて宇佐美が途中で遮った。

「全体集会の夜はいまここに二倍から三倍の人数が集まるのだからよほど大きな声でないと全く聞こえない。そのための発声練習だと思ってくれ。最初の人は気の

毒かもしれないがアピールポイントを絞り込んで最大の音量を出してくれ。緊張するな。緊張しても意味はないんだ。それから言い忘れていたが、この数日間で作ることと言えば朝のランニングと学歌等を歌えるようにすることとこの自己紹介以外には何も無い。僅かだが休憩時間はある。だから他の事は一切考えずにこの目標だけをクリアしてほしい」

一息つけたからか、その人は見違えるように大声になった。アピールポイントは「根性」とか言い始めた。それが付け焼き場ではあったが根性のなさそうな人が言うものだから多少は笑いを誘った。「あと一回だけ繰り返せ。もう一度聞きたい」と宇佐美が言った。それでまた今度はあらんかぎりの声を張りあげて同じセリフを繰り返した。「もう一回だ」宇佐美が調子に乗った。いたぶっているようにしか見えなかった。

次の人もつぎの人も同じように声が大きくはなかったのが何度もやり直すうちに良くなるという按配だった。そのうちに調子に乗った宇佐美たちは「妹はいるのか？ 彼氏は？ 美人か？」という投げかけをするようになった。だんだんと笑いが多くなってその盛り上がりは吉野の時に最高潮に達していた。彼は風貌からして委員会から気に入られた。彼は名前を言う前に「私には超美人の妹がふたりいます！」とやったものだから今までのパターンを大きく変えてしまった。彼の自己紹介はおどけていた。

趣味はデイスコ通いであるとか学校の駐車場に何日間も中古のRX7が止めてあるとか黒服のバイトをしていたとか聞きもしないことをべらべらとしゃべり始めた。途中から私ははたと気が付いた。彼は予防線を張っているのではないかと思いはじめた。彼は体格が良い。体力もありそうだ。当然、空手や柔道などの勧誘が来るだろう。だが自分はそんなことはする気はまったくありませんよという逆のアピールをしているのかのように思えてならなかった。彼のやり方をそっくり踏襲したのが葛原だった。これで寮内でのコンビは結成されたに等しかった。

私は自分の順番が巡ってくるのをひどく緊張して待っていた。とにかく早く終わってほしいと願っていた。だが、やや調子が変わってきた。というのには疲れもあり飽きてもきたのである。本当に最初の人は気の毒としか言いようがない。二時間も経つと宇佐美などは床に寝そべって半分眠っているかのようであった。声が小さくても内容が乏しくても二度か三度か繰り返すと合格になった。それでもいよいよ自分の順番になると私は緊張し、汗ばんで震えた。私は脳天から声を振り絞った。もともと大声だった。そして内容もつまらない部類だとは思いますが多少は受けたので二度も繰り返すと合格と言われた。二宮にはこれぐらいの声ならなかないというコメントを貰った。少し受けたのは一年生の中で熊南と同じ国文学科は私以外いなかったせいでもある。それを聞いて熊南は自嘲気味に私に「国文学科と言っても学内で俺に会うことはない

だろう」と言った。むしろそれが受けたのかもしれないが私は小さな困難を乗り越えることはできた。余談ではあるが私は本当に熊南には学内で一度も会うことはなかったのである。

何人かの武道系の志望者は自己紹介と言うより面談の形になって長くなった。彼らは委員会の興味を引いていた。

刺激的だったのは塚本だった。塚本はどうしても大きな声が出ずに困っていたがいきなり朝のサヨクの話し方を真似し始めたのである。「われわれは断固闘争に参加しこれを勝ち取る」これには熊南も面食らった。笑っていたがそのうちに「俺を侮辱しているのか」と言い始める。他の委員会のメンバーには大いに受けた。彼は民青じゃないかとかサヨクだとかと言い始める者が続出した。「お前はD棟に来るな!」「寄るな!」「スパイか!」熊南は動揺して塚本に言葉を連射した。「まあ正直でよろしい。共産党なんだな」と二宮は庇うように言った。「お前らが誰でもいれるからこういうことになるんだぞ」熊南はご機嫌斜めだった。そう言われれば思い出すと入寮時には面接があったのである。そして私のほんの短い面接をしたのは二宮だったような気がする。

「こんな自分ですがよろしく願います」と塚本はお辞儀をした。お辞儀する者は初めてで瞬間あっけにとられる。フオーというか殊勝な態度を見せておいてなかな

か狡猾な奴だと私は思った。塚本は私の方を見てニヤリと薄気味の悪い笑いを浮かべた。昨日闇の中で話したのは塚本だったのかと私は思った。彼のぶよぶよの体型や妙な笑顔や人を食ったような話し方がどうにも好きになれなかった。だが彼は私の中のサヨクを嗅ぎつけたようなのは明らかだった。

その日の夜に話しかけてきたのはまぎれもなく塚本だった！

もし私がすぐに昨日の夜の感触を持ちかけたなら昨夜と同一の人物と知れたかもしれないが私はそうはしなかった。それで真実は永久にわからなくなった。だが私は塚本を危険人物と感じていたので邪慳に扱った。塚本はほぼ一方的に水上勉の『ブンナ』よ木から降りてこい』を薦めてきた。私は水上勉の本は知っていたが読んでいなかった。そのうちにとお茶を濁した。その時の会話で塚本は浪人して私よりも年長であることがわかった。

翌朝もおなじような朝を迎えた。ランニングの途中でまたサヨクがいた。五人から四人に減っていた。その日は一年生のなかにサヨクに罵倒を浴びせかける者が数人いた。熊南への阿諛のようだった。サヨクは昨日ほどの精彩を欠いていたが、林木立の奥に潜んでいるいくつかの眼を私は殺気のように感じた。銀杏並木の奥にはなんらかの部隊がいるように思えた。私が気が付くくらいだから熊南が知らない筈はない。その頃の新左翼の内ゲバは凄惨を極めていて毎日のようにマスコミでは報道されてい

た。報復は誰だって怖い。

私は午後からの歌唱の時間に気を失った。日射病に罹った。宇佐美に背負われて「やわなやつちゃ」と嘆かれた。どうやら大声を出し過ぎて体力を消耗したようだ。

二宮はそんな私にぶっ倒れるまで歌うとは察の鑑だと称賛したが、それはほんの小さなエピソードに過ぎない。おかげで私はその日の自己紹介も免除され、楡の木陰で横たわっていた。うなされてもいたので何も感じることも考えることもできなかつた。たんに物理的な不具合ではなく精神的な変調の兆しだったのかもしれない。

翌日から私は積極的になった。塚本につけこまれるのを怖れていたのかもしれない。ようやくオリエンテーションも後半にさしかかっていた。

だが私はここでオリエンテーションの記述は終わりにしようと思う。後半についてはどうにも思い出せないことが多い。オリエンテーションは新入生歓迎コンパによってピリオドが打たれるがそれは連続性のなかにあった。新入生歓迎コンパというのは公式行事ではなく割り振られた部屋が勝手に行うものであったからだ。だからそこからは先は何が行われたのかは自分のことしかわからない。だからオリエンテーションは私を迎えに来た気弱そうにみえた若原と能面との初対面で終わったのであった。そのときの私の安堵はとんでもない間違いであったのだが、とりあえず私は熊南や宇佐美よりは接しやすと思うってしまったのだろう。

新入生歓迎コンパ

(二十五枚欠落)

おんな

マジシャンというのは入学早々にマジック研究会に入部したので私が勝手につけた名前で本名は長谷川、ついでに言うところクリスタルは今村である。クリスタルは田中康夫の愛読者で私に『なんとなく、クリスタル』を貸してくれた洗練した都会生活に憧れるごくごく普通の青年である。クリスタルは宇佐美を嫌っているのか怖れているのか私と宇佐美のいるマジシャンの部屋に出入りすることはめったになかった。ただ毎日のように私の部屋に来た。もっとも木製ベッドひとつが私の領土であり六畳ほどの部屋のほとんどは若原に占拠されていたのでベッドひとつに三人が集うのはかなり厳しい状況でもあった。六畳の部屋に二段ベッドがふたつあって三人ないしは四人で暮らしていたから下手をすれば監獄よりもひとりあたりの面積は狭いかもしれない。そんな状況ではマスターベーションだってできないわけであった。そればかりか私は寝る前にいつでも寝言で先輩の悪口を言わないかどうか心配する始末だ。私の持

参した本は僅かに二冊で一冊は『地下室の手記』でありもう一冊はサルトルの『嘔吐』だった。ただこの二冊はいま現在のシチュエーションに合致し過ぎるために読むのはばかられ『なんとなく、クリスタル』はあまりに合致しないために読む気が起きないのだった。もちろん三冊とも少しは読んだのであったが。

能面は日本文学の最上の作家は「和辻哲郎」だといってきかないので私は面食らった。その意見に若原も賛同していたのでさらに驚いた。そしてドストエフスキーやサルトルや田中康夫は「知らない作家だな」で片づけられた。若原は理工学部だからわからないでもないけれども能面は法学部だった。彼はいろいろ話を聞くと三浪二留年で年齢は二年生ながら私よりも六歳上の二十四歳だった。現役で入学した四年の若原よりも上だった。かといって彼は遊んでいるともいえず、だいたいいつも部屋にいた。マジシャンの部屋に行っても宇佐美がいることは実はほとんどない。彼は昼間は小グラウンドでダンベルを持ち上げているが夜は外出している。居酒屋でバイトしてるんじゃないかとマジシャンは言う。ときどき昼にマジシャンが帰ってきて部屋に入れないことがある。中から鍵がかけられているという。

私は端正な顔立ちのマジシャンのベッドが汗ばんでいたり砂が出てきたり酸っぱい匂いがあるのを知っていたが、ある時思い切って尋ねてみると「そうなんだよ」と言う。「シーツが汚れているんだよね。あっ、コンドームが落ちてるとき

もある。中にはたくさん精液が詰まっていて零れたりしてるんだよ」「きったねえ」

宇佐美だろうと思うが、歯向かえない。言うに言えない。残りのベッドは二段の上でありおそらくセックスしづらいだろう。天井に頭がつかえるし、動けないから。そしてここは逃亡者が出たためにふたり部屋だった。マジシャンも最近は考えてベッドの上を常にマジックの道具で一杯にしている。何に使うのかわからない壊れたヒョコミたいなものやリカちゃん人形セットのような館と人形も置いてある。トランプやハンカチやコインを使ったややこしい割には、さして驚きの少ない技を毎回見せられる。ときどき私は「あんまり面白くないね」と言ってマジシャンをがっかりさせた。「宇佐美さんだって褒めてくれるのに！」

あの酒茶漬けの夜から何日か過ぎていた。果たしてマジシャンは宇佐美に告げたのだろうか。私は気になってくしゃくしゃな赤いスカーフと格闘するマジシャンに尋ねてみた。

「ああ、あれか。僕は劉なんてどうでもいいんで言うつもりもなかったんだけど。あの日たまたま機嫌が悪くてね、宇佐美さん」

「へえ」

「宇佐美さんがいないときに僕ら牛井屋にいったじゃないか。だから部屋が誰もいなくて不用心だって怒るんだよ。寮の中には泥棒もいるから。特にA棟は性質が悪いっ

ていうから」玄関も裏口も二十四時間鍵は掛けられない。たいていの寮生は金目のものがないから平気だったが、宇佐美はそうではないのかもしれない。三年や四年になるとビデオデッキやテレビくらいは持っているものだ。

「それである日の行動について聞かれたから劉のカネが盗まれたことも含めてしゃべっちゃった。酒茶漬けの話もね」

「へえ、しゃべったんか」

「酒茶漬けってそんなに毎日起きない現象だから、それなら誰が盗んだか犯人を突き止めることができるかもしれないぞって言ってたよ。酒がご飯に注がれる時間帯もわかるじゃないか」

「酒を入れた奴と同一犯かな」

「宇佐美さんは酒を入れた奴ならすぐわかるって言ってたよ」

「じゃあ時間の問題だな」だけどうして泥棒が気になるのだろうか？別に構わないんだろう自治寮だから。ところが私の思いに反してマジシャンは次のように加えた。「劉が警察に駆け込んだらこの寮は終わるって焦ってたよ。宇佐美さん。新歓コンパの後も何人か巡查が来たそうさ。去年は死人も出てるんだって。塚本の部屋の先輩が逃亡したそうだし。あいつひとり部屋だって。羨ましい」

次の日の夕方頃、私は発熱して学校を休んでいた。レンガの壁紙をまた見ている。このレンガを眺めていたのは死んだ新入生だ。そいつがレンガの壁紙を張ったのだ。触ると安っぽい紙だ。ぼろぼろとはかなく崩れ落ちる。茶色と黒がくすんだ色で描かれている。こんなものを何故売っていたのだろう。こんなものを何処に貼るのだろう。まさにこの空間にしかふさわしくないようなシロモノじゃないか。あの日の私自身の嘔吐の跡が染みついていた。酒茶漬けと同じ酸っぱい匂いに浸されていた。

そして無数の落書き。オレハイキル。セメテハタチノソノヒマデ。最後に書かれた一九七六年七月。明らかに左翼と思われる呪文。萬國の労働者、団結せよ！ まさに呪いの言葉を綴って虐げられた後、彼は悶死したに違いない。この寮では五十年間で六人自殺している。事故死も含めれば三十人以上。七人目はお前かもしれない。それは誰に言っても信じてくれないが本当に能面は私にそう宣告したのだった……

メランコリーに苛まされる。薬さえない。薬さえあれば……ああ、薬をくれ！

私は図書館で雑誌からコピーした大江健三郎の発売されていない『セヴンティーン第二部』を読んで眩暈がしていたところだ。主人公は監獄で縊死する。またしてもまたしてもあまりに似つかわしいシチュエーションじゃないか！

そのときほとんど一度も開閉したことのない、廊下と通じている、看守から食事

を渡されるような頭上の小窓をこつこつと叩く音がした。こちらが開ける前に相手が開けた。

「やあやあやあ、元気かい、三好君」

鳴海！ 私は地獄で天使に出会ったような奇跡を感じた。抱きしめてキスしたいとさえ思った。

「どうしてここが……」

「うーん。ママンがね。教えてくれたんだ」美少年は寮生活で知り合った猫殺しの大滝に連れられて入った「源氏物語研究会」の仲間でありクラスメイトだった。

「おい。部外者の来るところじゃないぞ」

「ママンに行けって言われたんだ。三好が風邪を引いているって」

「どうして？ 誰に訊いたんだよ」

「あ、僕のママンはこの寮で賄のパートをしてるんだよ。それでねママンの同僚が宇佐美って人から聞いたらしいよ」

「ううん、そんなつながりがあったんか。同僚って誰だろう？」

「涼子さん。とっても綺麗な人だ。学部生なのに賄のパートをしている。ときどきウチにも遊びに来るのさ。君は知らないかもしれないが、僕の部屋から君の部屋までは歩いて五分なんだぜ。今度宇佐美さんや君を招いて焼き肉パーティーをやるうってマ

マンが言ったよ。来る？」

「ああ、そりゃ行かないでもないけれど、僕は宇佐美さんとはそれほど親しいわけでもないんだけど。たぶん宇佐美さんの部屋の長谷川がそういっただけだろう」

「まあこれでも食べなよ。チーズケーキ三個持ってきた」その頃はチーズケーキはとっても珍しい貴重品であったのだ。

「君の部屋は三人なんだろう？」気味の悪いほどに彼は私の居所まで把握していた。「同僚って誰だよ」

「ああ、知らないんだ。まあ、宇佐美さんの彼女みたいなものだろうな」

「ふうん」私はマジシャンの言ったことをまざまざと思いつく。しかしこの場では持ち出す話題でもないだろう。

「とにかく、ありがとう。それからもし迷惑でなかったら薬を持ってきてくれないか。いつまでたっても治らないんだよ」

彼は寮の怖ろしさも知らずにのんびりしていた。私は羨ましくてたまらない。

長谷川ことマジシャンが宇佐美さんが呼んでるからと事務的に呟いたのはそれから何日かのちのことだった。たまたまクリスタルが遊びに来ていたのでマジシャンの手間が省けた。わたしたちが向かいの部屋に行ってみるとすでに塚本はじめ吉野、葛

原とA棟の面々が顔を揃えていた。

「これだけかよ」

「五人しかいない」私たちは顔を見合わせた。「まだ直里（すぐり）がいるだろう」とっさに私が怒鳴るような声で言った。直里は女の子のような色白の可愛い少年だった。

「ああ、そんなやつもいたよな」

「あいつが一番童貞の皮被り臭いな」葛原が付け加えた。ふたりはくすくす笑っていた。

「何が面白いんだよ」宇佐美の不機嫌は絶頂に達していた。怒っているときの宇佐美は手が付けられないとマジシャンはよく言っていたが今はそういう状態なのか。

「これだけかよ」宇佐美が繰り返した。宇佐美の部屋にいたもうひとりも逃げていた。他の部屋の何人かも逃亡していない。直里はバイトでも行ったのだろうか。それともまだ学校にいるのだろうか。私は何度か声をかけたのだが反応がなかった。彼から見れば私もまた右翼になじんだ怖ろしげな奴に映っているのかもしれない。

「結論から言うとな、A棟に盗みがはびこっているんだよな」一年生は黙った。宇佐美は私の方を見ている。あきらかに不機嫌な顔を露わにしているので私は目を背けた。

「先日も三好の連れが入って来たらしいよな。部外者だろ。寮監に届け出したか？」

「いえ、出してません」

「お前ら、ちよっと舐めすぎじゃないの？」興奮を抑えようと煙草に火を点ける。

「A棟は落ちこぼれの集まりなんだけど、お前らは寮を壊そうとしているのか？お前ら逃げてくれた方がまだましな奴らばかりじゃねかよ。寮委員会の全体集会には顔を出さない。だいたいお前らの先輩たちがカスみたいなやつらばかりだからな、それに輪をかけてお前らはカスだ、チンカスだ」

「何があったんですか？」長谷川が話を進めようと尋ねた。そうしないと宇佐美はいつまでもグダグダ罵るばかりで話が進んで行かないのだった。私たちは部屋に入るように促された。それぞれにどんぶりが配られた。食堂のどんぶりめしがそこに並んでいた。宇佐美は一升瓶からなみなみと酒を注いだ。ひどい匂いが立ち込めた。「食え」やっぱり！酒茶漬けを作っていたのは宇佐美だったのだ。私は泣きたくなった。長谷川が慣れているのか甘いのか辛いのかわからないような米粒を無理やりに押し込んでいる。クリスタルもそれに続く。仕方がないから私も口をつけたがたぶん今夜は嘔吐するだろう。私は新歓コンパの四日酔いから酒を身体が寄せ付けない体質になっていた。カレンダーの嘔吐記録は六〇日を超えていた。それでも痛いだのかゆいだの言っただけじゃなかった。いつのまにか競うように不味い飯をかきこんでいる。

「おい、プレスレットが無くなったんだぞ！」宇佐美はマジシャンに言う。

「お前の手品のおもちじゃないんだぞ。あれは十二万もしたんだ。え、どうしてくれるんだよ。お前がいらないから盗り放題になってたんだよ。誰か、しらねえか？」まったく心当たりはなかった。誰も意味がわからずきよとんとしている。

「吉野！お前が怪しいな。お前前科あるよな」

「いえ、何を言うんですか。この部屋にはいるのは初めてですよ。やっぱり三好や今村がいちばん怪しいですよね」なにをぬれぎぬをなすりつけてくるんだ。

「前科あるだろ？」

「ないですよ」自慢の青色のジャケットがひるがえる。宇佐美と吉野は押し問答になった。

「だから劉のカネを盗んだのもお前らだろうって言ってるんだよ」どんぶりに酒を手酌して宇佐美は何度も一気に飲んだ。立ち上がった。不穏な空気が漂い、読めた。読めた何人かは立ち上がる。クリスタルとマジシャンが宇佐美の右と左から腕を抑えにかかる。暴れている入院患者のようにわめきながらふたりをふりほどいた。

「いつまでしらを切っているんだ。もう証拠はあがっているんだ。俺は劉なんてD棟の奴なんてどうでもいいと思っていた。D棟の奴のカネがA棟から取られてもそれはD棟の問題であってA棟から泥棒を出すよりもこのままウヤムヤになっても構わないうって思っていた。でも泥棒を続けるとなるとそれは問題だ。しかも今回はA棟の俺

のプレスレットじゃないか」

「どういう証拠なんですか？劉のカネって何の話なんですか？」

「おまえ、何をしらばっくしてくれてるんだよ。目撃者がいるんだ。お前が劉のナップサックから財布とカネを引き出しているのを見られているんだよ」

「目撃者なんていないですよ」

宇佐美は身体を捻って吉野の顔面を目がけて空手の蹴りを入れた。当たる瞬間に身を避けたので脚はうすい壁に当たってめりめりとペニヤの壁は凹んで壊れかけた。その瞬間、宇佐美は渾身の力を込めて吉野の顎を掬い上げるようにぶん殴った。めりめりめりとゆっくりと吉野の身体は壁に吸い込まれていきやがて隣の部屋にまで壁を抜けて侵入していった。壁が崩れ落ちていた。あっけにとられていたのは私だけだったのかもしれない。

「吉野、お前は墓穴を掘ったな、目撃者はいないことを確認してたってことだよな」
沈黙

「全部明らかにしなくちゃいけないのかよ」私はようやくわかった。おそらく寮母Ⅱ賭からは食堂内は見渡せるのだ。そして酒茶漬けをつくった後に宇佐美は厨房に入り込んで涼子といちゃついていたに違いない。プレスレットは涼子のもだろう。部屋に置き忘れたのだ。そして盗まれた。

「ブ、プレスレットは僕じゃないです」顎を押さえながら吉野は言った。眼には涙が溜まっていた。

「じゃあ、認めるんだな」吉野はうなずいた。

「おい、長谷川。劉を呼んで来い！」

壊された部屋の二年か三年かがおそろるおそろる顔を覗かせる。塚本は黙って酒を呑んでいる。やがて宇佐美に頭をこづかれながら吉野は汚れたジャケットを気にしながら謝りはじめた。三万円は戻ったが、プレスレットのありかがわからずねちねちと宇佐美の査問は続けた。私たちは疲労していた。劉は力ネだけ受け取るとべこりと一礼してD棟に戻っていった。宇佐美の体力が尽きて自然に解散になったのは明け方だった。日本酒の空き瓶がごろごろと転がっていた。

「いっそ壁を取って大部屋にするか？」宇佐美に聞こえないように隣の先輩たちが言う。

「セックスしてるところをみんなで見るとですか？」マジシャンが言うど何人かが忍び笑いをした。「あんな可憐な子が大きな声をあげるんだよね」

「塚本くん。今日からこの部屋だよ。これはホント。新入生のひとり部屋は認められないんだ」塚本はうなだれた。「てははじめに壁を直してよ」マジシャンは先輩風を吹かせる。

「わかってるよ。お前じゃないことはわかってる。吉野よ。プレスレットはお前じゃない」

宇佐美の寝言だった。ああ、帰っていいとは言われてないからここで寝るよ。吉野はごろりと横になった。私とクリスタルは部屋に戻ることにした。塚本も最期のひとり部屋を楽しみたいと言ってわたしたちと外に出た

別れ際、私の耳元で塚本は囁いた。

「あいつらはナチスだ」

(了)

連載小説

連載小説

I believe your brave heart (第二回)

常磐 誠

二・苛烈

試合中はもっぱら望を見ている。だからクラスの何人かは私と望をくつつけたがる。それが最初の頃は面倒でうざったらしくて嫌だったが、別段何とも思わなくなるのもあつという間だった。慣れというものは恐ろしいもので、便利なものだ。

卓球の申し子。望についてそんなことを書き付ける雑誌の文面を見て、ああなるほどと私は思った。けど、それと同じ所で私は、違う、と確かに思っていた。

望は卓球の申し子なんて綺麗なものじゃない。そんな神々しいものじゃない。公式戦で面と向かって立つことがない私が、見ているだけでわかること。きっとそれが記者にはわからないのだろう。

あれは神様とか、そんなものじゃない。もっと傲慢で、最低最悪で、それなのに見

ている人を惹き付ける。

望はまるで傲岸な獣だ。対戦する全ての相手が、倒すべき障壁。壁は越えるものじやなく、叩き崩し、穴を穿つべきもの。

小学生の時に大人を何人も吹っ飛ばしながら、薄ら笑いを浮かべていたあいつの顔が思い出される。

勝つことを諦めた人間に興味などない。大人の面子とか、そういうくだらないものに執着して、散々に粘り抗う人もいたけれど、そういう人の戦い方こそ、望が喜んで破壊したがるものだ。望の打球の鋭さは相手のレベルに合わせて変化する。より絶望するように。より苦しみが持続するように。

擦り上げられる球が短い悲鳴を上げて、突き刺さる。そういう苦しさを相手に味合わせている時の望の顔は、とてつもなく安定している。おぞましい笑み。

望という人間に、きつと魅力を感じる人なんていない。何を話しかけてもまともな返事は得られない。聞こえているのかどうかも悟らせないような微動だにしない顔。一日中同じクラスにいても一声たりとも聞く事が無い、なんていうことはざら。というより、声を聞く日の方が珍しい。話をする人間の方を向くこともなく、ただ一つ興味を持つとすれば卓球の強い人間、それか強制的、つまり力づくで意識を引っ張っていく力を持つ人——例えば父——のみ。

つかみ所が無い、何を考えているのかわからない。他人の事をバカにしている。大抵の人が望に対して抱く印象。それはしょうがない話だと思う。

幼稚園の頃だったか、もう一年生になっていたか、それはおぼろげなのに、望の打球と、その顔だけは妙に印象に残っている。

パァン！ かぁん！ こんこん。床で跳ねる球の音がする方向に私は球を拾いに行き、そして望に文句を言う。もう何度この方向に球を拾いに行ったのか数えきれなくなっていた。

「ねえ、のぞみ。はいよ。それに、なんでこっちにうつつ」

「……………」

「のぞみ。きいてる？」

望が我が家でプレイする卓球、というものの何に興味を抱いたのか、今ではもう思い出せない。けど、私は望が始めてすぐに追う様にして卓球を始めた。最初は父や日向さんや猛さんに相手をしてもらっていたけれど、いつの間にか私たちは二人でラリーを続けられるようになっていた。

だが、望は私が当時取ることでできなかった方向——バックの深いコース——に意図してドライブやスマッシュを打ち込んでくるようになった。続けることを目的に相手の打ち易い所へ打ち返す、という基本を、望はまるで理解していないようだった。

何回説明しても、聞く耳を持っていないようで、知らん顔をする。それを誰に言っても、そして誰から言われても、望は変わらなかった。日向さんの前でも、猛さんの前でも、父の前でも。

「どうしてのぞみはバックにうつのか？ わたしをこまらせるのがたのしいの？」

二人きりの時に、一度だけ怒って私も望に詰め寄ったことがある。珍しく、望はこう言ったのだ。

「なぜあれがとれない？」

怒り返すでもなく、謝るとかでもなく。本当に、単純に、純粹に、望は望が思う通りにならないことへの疑問だけしか抱いていないようだった。

「のぞみ。こわいよ」

あの時の望は、

「ねえ。どうして、わらっているの？ のぞみ？」

まあ、そういうことだ。と私は思っている。

それから数年後の、とある日の大会の応援席で、

「目にゴミが入っちゃってね」

と言って目を拭う日向さんが、私に笑ってみせた。だからどうしたと聞かれても、ただそれだけのこと。日向さんが泣いていることが物珍しいものだから、記憶に留ま

り続けている。ただ、それだけのこと。

家が近所で幼馴染。こういう関係は学校では実に便利だ。お互いどちらかが休めば片方がプリントなり連絡事項なり明日の時間割なりを渡しにいける。望がそういう時に役に立つかどうかは微妙な扱いだが、そういう時は兄か弟が違うクラスにいるのだから、そちらに頼めば良い。似通ってはいないが三つ子である私たちは三クラスのそれぞれに振り分けられていて、望とも確実に誰かが一緒のクラスになっていた。

今年からはそこに豪が追加された。望は役に立たない。仕事をすっぽかしたりしたこともあるし、何より学年中で噂になってしまっている騒ぎのせいで、クラスの人間全て——そう。担任まで含めて——が望をプリント渡しの役割にすることを避けた結果、私がそれを押し付けられる羽目になった。

「そんなに学校行くのが嫌か。ガキか」

と、私は朝っぱらから電話口で非難したが、その向こうから聞こえる、

「けほっ。バカ、そこまでガキじゃねえよ。俺だってな、げほっ。休みたい訳じゃねえし、ごほっごほっ。熱まであるんだから、さ、げふっ。……わかんる？ 頼むわ」

という声には確かな苦しさを感じ取る事ができた。

舌打ち一つ。部活を終えて望の家の隣、豪の家のインターホンを押して、さっさと終わらせてしまおう。そう思った時に、

「椿お姉ちゃんこんばんは」

と声をかけられる。黄色の髪の毛をポニーテールにして、緑色の大怪獣、ガーゴンの形そのままにデザインされたりユックサクを背負った背の小さな女の子、真由実だった。

彼女の父親である猛さんがドイツ人とのクォーターである関係からか、その娘である真由実にもその形質が遺伝したようだ——つまり、望の妹だ。望の見た目からは信じ難いが——。

「豪兄さんに連絡の紙を渡すんですか？」

その問いに私は無言で頷いた。笑顔を向けるでも無く、視線くらいしか合わせない私のこういう態度が周囲には生意気に見えたり、もしくは望とそっくりに見えたりしてあまり良い印象は受けていない。

だが、兄の所為で慣れっこになってしまっている部分もあるのだろう。真由実はそのような素振りについて何も言わず、自分の気持ちを書き続けた。

「豪兄さんに渡すんなら、お兄ちゃんが行けば良いんです。一人だけ何食わぬ顔で帰って来てまた走りに出かけたんですよ。自分勝手過ぎです」

その顔を見ると、十中八九、望と言いき争いを繰り広げてしまったのだろう。そしてその伝わらなさに本気で憤慨している顔——真由実は望とは真逆で非常に分かり易

い——をしていた。

「……………」

私が小声で呟いた声は、憤慨した真由実に伝わっているだろうか。そう思って真由実を見るが、

「昨日も、ちゃんと謝ったらどうなのって言ったたら、何を？　ですよ？　信じられない！　あんなに殴り合っておいて！　二日連続ですよ？　男の子って理解できない！　いや、年上だから男の人、ですか？　どっちでも良いですけど。そもそもナンセンスなんですよ。原因は誰も教えてくれないからわかんないんですけど。でもどうしてそうやって暴力に訴えて……」

伝わっていないのは確かだったし、止まりそうにもなかった。だから、

「先に暴力に訴えたのは豪だ」

という事実だけを伝えた。

「……………え？」

一気に冷静さを取り戻したように見えたのだが、

「じゃあ何で豪兄さんはお兄ちゃんに謝ってないんですか？　いや、もう謝ってるんですか？　お兄ちゃんそこも全然答えないし、皆もう終わった事だからとか言ってる全然教えてくれないし、というかそもそもその原因とか何だったんですか。試合に関係

していることくらいは想像付くけど、やっぱりお兄ちゃん何かしたんじゃないんですか……」

また止まらなくなる。子どもだからしょうがないと言えましょうがないが、溜め息が出る。

「……あ」

溜め息を吐いた私を見て自分が喋り過ぎていた事を悟った真由実はここでようやく黙った。

「……怒ってます？」

と律儀に確認までしてくる。私はこれくらいのことですら怒る程短気ではない。部屋でテストの勉強中、とかいう状況なら話は別だけど。

「何も考えていないし感じてない」

そう端的に答える私の顔を、真由実はじっと見つめ続ける。本当に怒ってないですか？ そう尋ねたような顔をして。

「何も私の顔から読み取れないんだから本当に何も考えてないし感じてない」

「本当……ですか？」

「強いて言うなら」

「言うなら……？」

「いや、何でも無い」

私はそう言いながら自宅の門扉を指差して、

「真由実は早く帰りなさい。そうしないと、そこで隠れて人の話を盗み聞こうとしているオヤジに攫われちゃう」

話を一方的に打ち切る。

「何その犯罪者超怖い」

門扉に隠れていた車椅子がひよこっと現れる。

「またもー。おじちゃんはその女の子の話をコソコソ聞いちゃダメって何回言ったらわかるのかなー？」

真由実が父親のところにはたばたと走っていく。それを良い機と捉えて私はさっさと豪の家のインターホンを鳴らして豪の母親にプリントと連絡事項の簡単な説明を済ませてしまふ。望でなく私であることをそれとなく聞かれたが、そこに何ら意味なんかないということの説明するのは、退屈だった。

家に帰って夕食を摂ろうとした時に弟、勇邁が道場から帰って来た。

「いつも通りだな。それじゃ、いただきます、と」

父が両手を合わせ言うのと、

「まだ手洗ってねえだろうが。ちっとは待とうって気にならねえのかよ！」

という勇邁のツッコミ。まさしくいつも通りというか、繰り返し過ぎて何も感じないやり取り。その食事中だった。

「なあ。望のことなんだけど、さ」

勇邁が口を開いた。

望は何も感じちゃいない。予想でしかないけど、多分当たっている。あの時小声で呟いた事。それがわかる私としては、気が重い時間の訪れに鼻で笑うような溜め息が漏れるばかりだった。

〈続〉

読書会・対談

第九回読書会 後藤明生『挟み撃ち』

『挟み撃ち』読書会 会場

6..こんばんわ。

あんな..こんばんわー

日居月諸..こんばんは

6..『挟み撃ち』は後藤明生の代表作で唯一まだ本屋さんで手に入る後藤の小説(！)で文学ファンのなかでも人気の高い作品です。あらすじをざっくりというところ……赤木という主人公らしき人物がお茶の水橋のうえで「山川」なる男を待っている。その山川を待つまでに赤木が回想する自らの過去や、それに合わせた文学作品の記憶を織り交ぜながら、進んでいく奇妙な小説というところでしょうか……。この小説はほとんどが回想シーンというところでもない構成のもとにつくられていることにも驚嘆しました……。

みなさんの感想はどんな感じでしょうか。どんな切り口でも大丈夫なので、どんなおっしゃってもらえればと思います。

あんな..6さんのおっしゃるようにほとんどが回想シーンで、しかも時間も

人も場所もあっちこっちに飛ぶのでかなり読むのに苦戦しました（汗）

6.. そうですね…：…しかも脈絡なくて思いつきか！っていうぐらい迷路のようになりうろろしますね。

日居月諸.. 現在のシーン（たとえば蕨町に向かう場面）と過去の回想がないまぜになっていきますね。

6.. でしたね：戦時や終戦直後の記憶が出てきますよね。

日居月諸.. 昔なじみのある土地に行く場合などはよくあるんですが、頭は昔のまま、けれど目は現在を見ている。そのギャップに戸惑う事が多いのですが、非常にそのギャップを描くことに長けている。中仙道に行き当たるシーンは特徴的です。

6.. その中山道に行きあたるシーンをあらすじも含めて、また日居さんの印象に残ったポイントと共に紹介してもらっていいでしょうか。

日居月諸.. ちょっと原典を確かめる余裕がないので、間違っていたら失礼します。主人公は「山川」なる男と待ち合わせをするのですが、その前に時間があるので、外套の在り処を求めするために昔下宿していた家に向かいます。そして中仙道への道に着く。けれども建物やらなにやらが昔とは違った配置になっているから、自分が中仙道を歩いているのか、それとも中仙道に行き

当たる道を歩いているのかわからない。

6.. (河出文庫版だと70Pぐらいかな)

日居月諸.. それから回想シーンが挟まれる。飲み屋で酔っぱらった帰りに、ゴーゴリの小説を思わせる女性の後ろ姿を見て、神社まで追いかけるシーンです。ここの叙述が特徴的で、普通回想する場合は説明するのですが、あたかも実況中継するような描写をするんですね。たえず疑問符を並べたりして、現在自分がその女性を追い掛けているような印象を作る。

ここがあくまで過去は過去ではなく、現在とひとつながりだという印象を生むのです。

6..ピスカーリヨフがネフスキー通りでみかけた黒髪(ブリュネット)女性と重ね合わせながら、赤木はベレー帽の女性をおっていましたね。そうでした!このやりとりはいろいろ不可解でしたね、火をかりようとして時間を尋ねられる...:女はなぜか時間をきいておきながら...:赤木をのこして歩き去ってしまったおうとする。

日居月諸.. 回想から現在に戻るシーンも特徴的で、街灯の下で振り返った女性のもとへと走っていく、という行動と、信号を無視して道路に飛び込みかけた行動をリンクさせている。警察官が肩をつかんでくれたことで立ち止ま

り、現在に留まるわけですが、おそらく主人公は中仙道にいる。過去にタイムスリップするかのような心地でいるんだと思います。それくらい過去と現在の区別がっていない。

あんなにたしかに読んで混乱してました。過去のことなのか現在のことを書いているのか、わかりづらかったです。

この書き方にも他にも沢山言えるのですが、過去と現在と何かその片方または両者にまつわる文学作品との混ぜ方がこの人にしか書けないような「天然」みたいな文章ですごいですね。なかなかこの方法を真似ようと思っても難しい……。

日居月諸、饒舌な語り口をしているのですが、自我は薄い。自分に関することだわりはみせないんです。疑問符を使うにしても、あの時は何故こんな行動をしたんだ？ ではなく、なぜお茶の水なんだ？ といった具合に、外側のことにこだわる。

日居月諸、自分が外側の物事に取りさらわれていくことに恐れがないんだと思いますね。

のわりと序盤の方で赤木という語り手がゴーゴリや永井荷風のように「名前のある橋」をわたしも小説の中に散りばめたかった！と羨ましがらるシーンが

ありましたね。

東京の路線名をそれと言った後だったかな……たくさん小説の中にだしているんだけどものすごく記号めいていて、ゴーゴリや荷風の使い方は異なっていたと思う。

ゴーゴリや荷風はまだ「名前がある」時代というか、そういうもののなかで小説を書いていたけれど自分はそんな時代に生まれなかったから幾つもの名前のない橋―歩道橋―を小説に出すほかはないみたいだな諦念をしていました。ただ一方で赤木（＝後藤？）は第二次大戦という時代を生きていて、北朝鮮や終戦を迎えた筑前ででてくる地名などにはとても「名前がある」感じがして羨ましくなりました。

日居月諸…地名を出す時、人は普通右、左と言った感覚で述べているんだと思います。つまり、肉体に地名がしみ込んでいます。少なくとも東京の路線、および地名は彼にとってなじみがないんでしょうね。知名度だとかそういう以前に、主人公にとって使うと居心地が悪くなるというか。

6…そしてさきほど日居さんもおっしゃったのですが、こだわりはほとんどない…すくなくとも歴史に残るような事件に対して自分の考え方も意見も持たず、どうしようもないぐらい個人史的な「外套のゆくえ」ばかりを気にし

ています。または映画館の旧式眼鏡時計や、外套のポケットの中にあつたピ
ーナツとか些細なことばかりを気にするように見えました。

日居月諸、戦争に関する意見も、素朴すぎて目新しさを覚えました。幼年学
校（陸軍の教育機関）に受験できなかった話があるんですが、御国のために
働けなかった、だとか、無駄な戦争に巻き込まれずに済んだ、というよりも
単純に忸怩たる思いを抱えているような感がある。

6. そうですね、兵隊になりたかつたとしきりに出てきますね。

あんなに読み手は外套のゆくえを探す、というただひとつのストーリーだけ
を頼りに読むんですが、それが読ませるために設定した罫だということにラ
スト数枚で気づかされました。というか外套探し自体が作者が意図して設定
した暗喩だったような気がします。

6. そうですね、いったい外套にどうしてそこまでこだわるのか……。山川
という人物はいったい何者なのかを頼りに読もうとしていましたが最後に手
品の種をみせられたかのようにあっけないおわりを見ました。でもそこで腹
をたてたのではなくて、笑いました。

あんなに山川の存在、橋、外套の三つは自分には過去の不確かさの象徴のよ
うに読めました。特に、橋は冒頭とラストに出てきて、渡るといふ行為が、

過去と現在を表しているような。

6..なるほど…。よくは知らないのですが「日本の橋」というのは昔から冥界などへの入り口として「お墓」の入り口などにあったんじゃなかったかな。あんなに名前がなくて格好がつかなくとも向こう側に渡るにはみな名前のない橋を渡って生きていかなければいけない…。…みたいなのが冒頭にあって、後から読み返すと意味があった気がします。

6..なるほど…。そう考えると最初にてくるお茶の水の群衆とかもなんかちよっと怖い感じがしますね。

日居月諸 『しかしいまさら愚痴をこぼしてもはじまる話ではない。こんな名前もないような橋など、誰が渡れるものか、というわけにもゆかない。自動車の波を手足でかき分けることが出来ぬ以上、誰もが名前も無い橋を渡らずには生きてゆくことが出来ないわけだ』 これです

annaendo: そういう中でピーナッツとか時計とかが、対比で確実なものとして出てくる。最後におばさんがピーナッツで思い出すけど、外套のことを思い出した訳じゃなく。結局外套のことは分らずじまいで。ピーナッツだけは確実に存在していたというのがわかる。

あんな…そこです！ありがとうございます！>日居さん

6…不確かなものと確かなもののバランスみたいなものがあつたんですね。あのピーナツがころころと出てくるシーンはとても面白かった…。言いようのない面白さ。言いようのない面白さと言えば、兄と一緒に穴をほって蓄音機で音楽を聴きながら、それを一枚ごとに割って穴の中に入れていくシーンはこの小説の中で一番好きなんです。が妙な悲しさというかムードがなかったでしょう。

あんな…あれなんで割ってたんでしたっけ？？

6…処分するためです。北朝鮮から引っ越して行かなくちゃいけないから、家財道具などを処分していて、その一場面として出てきました。155Pぐらいかな。

日居月諸…念入りにタイトルも記されていきますね。韓国語も交えられている。

あんな…そうでした。

6…兄と二人で軍歌を歌いながら、悪ふざけのように会話する場面がとてもよかった…。そんな好きな場面などお二人はありませんでしたか。

日居月諸…穴へと処分している場面を振り返って、脳髓にへばりついている

様子を兄が（地の文、つまり脳内で）茶化しますね。まさに掘り返すのはよせといつている。それかそれにあらがって饒舌になっていくところは、確かに言い知れぬ趣がある。

あんなに脇毛の女子高生のところは面白かったです。1333P

6..とつぜんが当然だという問答の場面ですね>日居さん あそこはこの作品の中でももっとも文章が乗っていると云うかうつとうしい記述に溢れていますね、脇毛の女子高生についてはわりと繰り返し出てきた気がします、あんなになぜそんなこだわる、とW

6..そうですね、めっちゃこだわっていた。よっぽど見たかったのか……。あんなに全体的に繰り返しが多かったように思います。早起き鳥くとかも何度も出てくるし。

6..反復はめっちゃ大事なテーマですよ。この小説の中において。

日居月諸、ゴーゴリの引用も再三再四出てきますね。しかもその後、現実の事柄とは違っている、と強調したがる

6..外套をさがしてさまようという構図自体が『外套』の反復でもあるし、アカーキーに対しての赤木とかもやりすぎなんじゃないかと思った、あんな出てきすぎてゴーゴリ読んでしまった。面白かった！

6.. 引用は後藤明生、すごく好きな気がする……。

あんな.. アカーキーって名前がもう好きなんでしょうね。

6.. そうですね、どうしても赤木にしたかったんでしょうね。引用もそうなのですが後藤明生は過去の先行作品に対してのオマージュ的なものをよく書いていく気がします。オマージュを書くこうとして、ぜんぜん違うものが誕生する作家! というか何と云うか。

日居月諸.. 語感が完璧ですもんね。ぜひとも日本で翻案してくれと言わんばかりに。そういう誰もが思いつくくだらない発想に飛びつくことを恐れないんでしよう。

6.. おバカな場面もけっこうでてくるし、笑えるんですよ。

『小説—いかに読み、いかに書くか』(後藤明生 講談社現代新書) と言う本があり、これは後藤が描いた小説創作の指南書のようなものなのですが、面白い文章が幾つかあるので紹介します。

「パロディー」という言葉は、文学に限らず、いまでは日本じゅうに氾濫している。それは、現代はパロディーの時代だといってもいいくらいの氾濫ぶり、小学生でも知っているのではないかと思うが、わたしはこれを「読む」と言う意味に解釈している。(後藤明生)

6. 「書く」という行為よりも時として「読む」という行為の方がエネルギーを使うのではないかと、後藤の「読む」という行為の説明。受動的な行為ではなくて、小説を読むという行為は「パロディ」。とても創造的なことなんだと言っていました！

わたしはキリスト教徒でも回教徒でもない。また、いわゆる神秘主義者というものでもないと思うが、小説家というものにも、憑依状態になった巫女のような状態が、体験されているのではないかという気がする。これは、禅でいうところの阿頼耶識（あらやしき）の状態に似ているのかもしれないという気もする。正確にはわからないが、とにかく、平たくいえば無我夢中、一心不乱といった「無意識」の領域を考えれば、そう見当はずれにはならないと思う。

そして小説におけるそのような領域を体験するのでなければ、小説を読んだことにはならない。いわゆる肝銘したとか、感動したとかいうのは、そういう体験である。また小説の醍醐味を味わうということも、同様の体験だろうと思う。（後藤明生）

6. この文章も凄い。読むと言う行為のすさまじさについて書いています。何故あなたは小説を書くのか——と言う質問に対して後藤の解答はつねに「小

説を読んだから」だというものだったそうですが、この『挟み撃ち』という作品もまた過去の尊敬するべき作品へのパロディであると思いました。

日居月諸…散文の起源を聖典（韻文）の翻案、翻訳としていた批評家がいたんですが、おそらく後藤にとつて原典は現実に存在している物事全てだと思います。すべてを翻案、翻訳している。そして原典と翻訳のズレに身を置いている

6. 挟み撃ちですね！

あんな…おお！

日居月諸…恐らく（典型的な）小説と小説を作り出している自分、という区別もあるんだと思う。ゴーゴリと現実があっているかという比較もそうなんですが、それと相即して、自分が小説の主人公になれるかどうか、絶えず噛みあわせを確かめるような感覚がある。そして、最終的には失敗する。

6. 忘れちゃうから… 失敗してばかりなんだけどそこがいいところなんですよね。後藤作品の。思いつきで書かれたような変な脈絡のない文章何だけど読んでいる方はそれこそ憑依しているようにこれまで体験したことのない「読む」という行為の中に没頭できる。

あんな…「書く」ことから始めた作家、というのが蓮實重彦のあとがきにも

ありましたね。

6.. ありましたね。。。あれも面白かったです。

日居月諸.. あえてキツク言うなら、失敗芸を広めちゃうことではばらく日本文学を失語状態に置いてしまったんじゃないかとも思う

あんな.. この作品が出た当時ってどうだったんでしよう？かなり注目されたんですかね？

6.. 「内向の世代」の作家の一人であり、事物や人間の関係性へ意識を向けた批評的でユーモラスな作品を著した。「グロテスク」という観点からニコライ・ゴーゴリとフランツ・カフカに影響を受けており、ゴーゴリの『外套』を起点とした『挟み撃ち』(1973年)は秋山駿、柄谷行人、蓮實重彦に評価され、文壇での地位を確立した。(後藤明生の wikipedia より)

6.. でも売れはしなかったと思いますw

あんな.. 一般受けはしなさそうですしねw

日居月諸.. 私はこの小説を読んでいて世界の成り立ちと言うか、作品世界創造の方法を教わった気がします。通常、小説は視点人物がいて、その他の人物は中心に引き寄せられる形で存在する。つまり引き立て役として存在するわけですが、この小説は逆ですね。主人公が考える以前に世界が存在する。

そんな感覚があります

あんな…一回読んだだけではまだ理解したとは言えない感じですし。つかみ所のない作品っていう感じがしました

6.なるほど…：そんな気がします。すでにある世界かー。

僕も初めて読んだ時は何が書いてあるのかさっぱりわからなかった…。

日居月諸…実はしばらく前に読んだから覚えているところがほとんどない

あんな…こんなに主人公に共感できない小説もめずらしいですよ。それだけ主人公は何も考えてないし、為すがままなんですもん。

6.たしかに共感はできませんね。でもその為すがままの行動のゆくえを追うことにはすぐ興味を持ちました。何でもないただのおじさんなのに。

日居さんの失語状態というのは二次創作的な小説がでてくることによって一次創作的ながちの文学を書くことがカッコ悪く見えてしまったってことかな。

あんな…世界＞主人公というのは勉強になりました

日居月諸…同時期（七年後くらい）に小島信夫の『美濃』が刊行されるんですが、これも自分のルーツを探っていく話なんですよ。400ページくらいで、後藤明生以上に脱線していく。それを思い出しながら、自分のルーツを探っていくって失敗するのに、根源には翻案すべき原典があるんですね。そん

な撞着めいた状態を生み出して行ったのではないかと思うのです。

6.. 失敗しちゃう文学ということですね。軽はずみに何かをやり遂げてしまうようなものが書けなくなってしまったと…。

日居月諸.. それもあるけれど、文学が文学を真似るというのも危険がつきものなのに、パロディ文学がパロディ文学を真似るというのは最早先細っていく

6.. なるほど…それは文学の世界に限らない悩みだったんでしようね。

日居月諸.. ぱっと思いつくだけでも80年代ってパロディに満ちた時代だったと思うんです。高橋源一郎、島田雅彦、筒井康隆、中上も大江もパロディをやっていた。ボルヘスが翻訳紹介されたのもこのあたりだったんじゃないですか。

日居月諸.. 一応ここに挙げたのは今も生き残っている、成功例を生み出した作家ばかりですが、そういった潮流の中で埋もれていった作家も多数いるんです。特にこの時期は芥川賞の該当者なしが続いた。全部とは言わないまでも、パロディを強いられて痩せ細っていった作家は多かつたんじゃないでしょうか

6.. なるほど…。パロディは好きだけどみんながパロディに走ってしまうの

は何だか嫌ですね。他に『挟み撃ち』の内容について何か気になるところなどはありませんでしたか…。

あ、そうだと蓮實の解説について語りましょう。

「書く」ことからはじめた作家。このときの「書く」という言葉は「書く内容をイメージしてから筆をとる作家」とにかく筆を走らせながら考えていく作家」として出てきます。つまり後藤明生は圧倒的に…後者であると蓮實重彦は言ってますね。

小説と言うのは言語芸術であって、決まりきった形などないはずなのに、前者の手法で書く作家が非常に多くて、まず書いてみて書くことの実験性に書けた作家と言うのはごくわずかだと言っていました。

小説を語ると言う行為はある特権的な資格をともなうものなのに、挟み撃ちの語り手はそういった特権性をほとんど持たない。語り手もつ絶対的に優位な立ち位置というものに疑念を持つことの正しさを証明してみせる小説であると言ってますね。

どこへ行くのか作者すら判らない小説と言うのはやはり読んでいてわくわくするし、作者の力量が試されるところであるので、ぜひそういった書き方で小説を書いていきたいと思いました。

きほどの話ともつながってくるけど20世紀の文学と言うのはすでに過去の作家たちに書きつくされてしまったものをどう書きかえるかと言う点に重きをおいた。すでに書かれた言葉と共にどう生きるのかということを真剣に考えた。それが後藤のような作家にも見られると言っています。ナルシズムをもつて、何かを語ろうとしてもそれはすでに誰かが書いてしまっていることなのだから、それを自覚して、どう発展させていくのかみたいなものを考えねばならないとおっしゃっています。

でも僕自身はやはり少しぐらいナルシズムを持たないとやっていけないと思うんですよね。ニヒルになっても面白いものは生まれるかもしれないけど、すでに書かれた言葉以外をみつけることにも価値はきつとあると思う。

だから蓮實さんの意見はすごい的確だけど影響を受け過ぎてはだめだと思う。日居月諸…ナルシズムを持ち出すなら、小説を書くにあたって自分のテリトリーを作ろうとしないんでしょね。本当の意味で素直に対象を描写していると思います。特に時代の雰囲気がそこに匂っていた。

6..おもったままに書いていますね。ぜんぜん奇をてらっていないなくて、わりと幼稚なというか近所のおっちゃんぽいような素直さがありますね。

あんな…気ままに書いているように見えて、客観的に書いているような不思議

議な読後感

6.. 読後感はたしかに何か不思議でした。奇妙な男の一日に付き合ったような。

これって考えて見れば250Pぐらいあるのに1日の話なんです。その分、回想で何十年と言う月日を行き来している。時間の伸縮がひじょうに極端でありながら、どこか繊細に書かれていて良かった。さてではそろそろお聞きにしましょうか。

あんな.. また10年後くらいに読みたいですねw なんか変な苦しさがありました、読んでいて

6.. 10年後.. どんな苦しさですか。

あんな.. どこに身を置いていいかよくわからない苦しさです。読書経験が少ないからだと思いますが、どうしても外套を探してしまいました。とりあえず外套どこいった、と。

6.. 外套どこいった.. 赤木よりも外套に執着する読者！

日居月諸.. 花はどこへ行った的な.....

6.. 花？

日居月諸.. そういう反戦歌があったんです

6.. ふーむ

あんな.. 悲しいお知らせですが、読書会中にスーパームーンは終わりました
日居月諸.. 仙台だとそんなに大きく見えなかつたつす

6.. スーパームーンで月が大きく見えるんですか。

あんな.. 月が地球に一番近づくと日らしいです

6.. あ、そうなんだ.. 次に期待！生きてるかわからないけど。

日居月諸.. 去年もありましたよね。たぶんしょっちゅうあるんですよ（適当）

あんな.. 一年に一回だった気が

6.. あ、そうなんです、でも多分あした見てもわりと大きめなんじゃない

でしょうか。

日居月諸.. >なお次回のスーパームーンは、2014年8月11日とのこと

6.. お盆か。

日居月諸.. 月くらい好きな時に見たいもんです。ま、てことで御開きということ
ことで.. 二次会に移行いたします (おわり)

対談 日居月諸×小野寺那仁

「突然」な女たち——日本小説技術史を読む・第三章——

日居月諸.. まず著者は「襯染」を話題にします。

小野寺.. 「しんせん」

「したぞめ」と読みます

これは前章から引き継がれる馬琴の稗史七則中の小説技術のひとつ

作品の読ませどころに先立って、その事件なり人物の言動なりの背景や由来などを効率的に書きこんでおく技法

日居月諸.. 言ってしまうえば広い意味での伏線と取れるものですね

著者は馬琴の言などを引用しながら、この「襯染」を作者にとっては苦の種だとしています。

日居月諸.. 小説において中心となるのは行動や会話です。ただ、行動や会話にいたらしめた理由を読者に納得させるため、背景を説明をしなければなりません。しかし、説明をすれば話が進まなくなり、冗長とも取られかねません。だからこそ、苦の種だとしている。

小野寺.. 「後説法」(前に起こっていたことを後から語る倒叙形式)これが近代化(下染の)

日居月諸.. しかし、こうした近代化は襯染自体の活性化は生んだものの、襯染への懐疑は生まなかった。馬琴の「偷聞(たちぎき)」をうたがえなかった馬

琴以降の作家のように。第二章で扱った四迷や鷗外はいまでもなく、襯染の影響力は鏡花にも及びます。

日居月諸…たとえば「外科室」で鏡花は手術のシーンから書き起こします。

その後、外科室で起こった事件を説明するため、執刀医と患者である伯爵夫人の出会いを描く（これが襯染となる）。外科室でのシーンを説明するには、この出会いのシーン（原因）は説明不足とも呼べるものですが、鏡花にとっては結果（外科室でのシーン）が鮮やかになれば問題なかった。小野寺…ぎっくり言うところまでん返しみたいなのなんですね

男性作家、露伴、鏡花、いずれも下染の影響下にあり、近代化（後説）はし

ているものの不十分であったということです。

日居月諸…続いて、男性作家が成し得なかった襯染の克服として、作者は樋口一葉を持ち出しますね。

小野寺…一葉作品に現れる女性が突飛な行動や狂気じみた印象を与えるけれども作者は作品の流れを断ち切ったり、下染のような来歴を書き込んだりしない

日居月諸…もともと一葉作品の草稿には来歴などが書き込まれていました。ただ、完成稿においてはそれがパッサリと省かれている事が多い。一葉が襯染を意図的に排していることは疑いありません

日居月諸…基本的に一葉作品は過去を

説明することが少ないと作者は言います。仮に過去を持ち出すことがあっても、現在の出来事によって想起されている場合が多い。同様に、登場人物の心情も、性格や気質ではなく、出来事が作り出すことが多い。

日居月諸…ただ、それが「にぎりえ」では崩れていきます。襯染を強いる、「男性」が登場してくる。

小野寺…結城朝之助

小野寺…が男性的な下染の世界に一葉作品を導く

小野寺…（結城II一葉の師匠半井の影がうかがえるのではと思います）

日居月諸…ただ、ここで一葉の作品世界は新たな広がりを見せていきます。

日居月諸…「われから」では離れ離れ

になる母娘のことが描かれています。一葉は例のごとく切断的な叙述を使って、襯染を排していきます。どうして母が去って行ったかはわからない。しかも、（主人公である）娘は以降母と出会うこともない。

日居月諸…同時代の匿名合評ではこの点は非難されています。要するに、男性は襯染を要求した。

日居月諸…ただ、母と娘のつながりとぼしいのはあくまで表面上の事です。実際のテキストは、母のたどった人生を娘が追っているという仕立てになっている（特にこれといった説明もないまま）。

日居月諸…つまり、母の人生が娘の行動を裏書きしている。とても巧妙な技

術を使いながら。

小野寺…有機化に反応する読者の分身としての作中人物（リカルドゥー）

小野寺…つまり縫合するのは読者ということですね

日居月諸…読者は母親のことを読んでいる。母親の行動があるから、娘の行動もわかるだろうと一葉は見込んでい。裏側では、実は高度な襯染が行われていたと著者は指摘します（区別をつけるために「縫合」と記しています）

日居月諸…あらずじはこんなところでしょうか

小野寺…はい。ご苦労様です

日居月諸…3章は実際のテキストからの引用、および検証が多かったのだからかはしよった感がありますね

小野寺…けっこう細かい論証や反駁が多くて作者の意図したところを読み解くのに骨が折れました

小野寺…それと今までの章はあらずじを知っていたり讀んだことのある作品（鷗外、四迷）が多かったのですが、一葉は自分が数作しか読んでいなかった。秋成、露伴、鏡花も読んでいない作品への言及でした。

日居月諸…とはいえ書き手としては中々実践に使える話でした。はじめのほうで、襯染を読者に納得させるための技法と言いましたが、一方で作者自

身が納得するためを使う技法でもあるかもしれない。自分が書いているものがどんなものであるか確かめながら、狂気に呑まれないようにするため。

小野寺…まさにそうですね。推敲で下染めいた部分は裁断していった一葉の方法は小説技術としてごくごく基本的なことなのかもしれません。

小野寺…そういう意味で読者がどの程

度まで理解するだろうかという自意識は多いに活用しなければならぬと思いました

日居月諸…勇気がいることですよ、文と文のつながりが取れないままのものを完成稿として出していくっていうのは。(第三回終わり。つづく)

編集後記——永遠対話のために——

ドイツのある写真家が撮った写真には、被写体が醸し出す不気味な雰囲気、に反して、「舞踏会に向かう三人の農夫」という無骨な題がつけられているらしい。小さな丘が見えるだけの農地を背景として、揃いのスーツをまとい一様にステッキをついている三人の若者が、右肩越しにこちらを見つめている。真ん中の男は悠然と構え、左手でわずかにポーズを取るくらいには自らの容姿への誇りを抱いている。右の男は姿勢を正しながらも、隣の男の取り澄ました様子に気後れしているのか、レンズという無機質なものに目を合わせることに慣れていないのか、強張った顔を

浮かべている。その二人から左手に少し離れて立つ男は、タバコをくわえ、シルクハットからくせ毛をのぞかせ、ステッキをだらしなくぶら下げ、と言った具合に幼児性を表しているが、顔には30とも40とも取れる皺が刻まれている。

この写真を見た者はまず、三つの視線をいちどきに食らってのけぞるような戸惑いを覚えるだろう。続いてこういう疑問に駆られるはずだ。彼らは何を見ているのか、何に對してそのような表情を浮かべているのか？ この三人を始めとした二十世紀初頭の人々の顔をまとめて撮影し、写真による博物館を作ろうとした写真家の無謀に皮肉な笑みを浮かべているのか。写真を見

て会社を辞めて小説を書こうと決心した若者の無鉄砲な情熱に驚き呆れているのか。それとも、写真を目の当たりにした多くの人々に対し、共に歩こうではないか、舞踏会へと向けて、このようにしようもなく救い難い世界という会場で共に踊ろうではないかと、わざわざ幼さを見せて親近感を漂わせながら誘っているのか。

1914年にこの写真を撮影したアウグスト・ザンダーは、『二十世紀の人間たち』と題すべき膨大なプロジェクトに向かつて邁進していた。写真という人間のありのままを映じられる機器でもって、容姿、性格、社会的地位のあらゆるタイプを撮り続けられ、百科事

典にも劣らぬカタログが出来上がるだろうと思っていたのだという。

1910年にスタートした遠大なる構想は、1929年、『時代の顔』と題された縮刷版によって一定の成果を収める。19年間撮りためた写真の中から選りすぐりの60葉を収録した写真集は、農民から成金まで様々な社会的階層を網羅した後、一人の失業者の不吉な姿を最後に印刷を終える出来となっている。しかしこの最後の写真は、同時期に台頭しつつあった政治勢力にとっては不都合極まりないものであった。不吉な写真を客観的な姿だと主張することによって、経済復興を指す気運に冷水を浴びせかねないと取られてしまったのだ。

1934年、ナチスドイツの介入によってこの写真集は発禁処分を課される。おまけに、彼の息子でありプロジェクターのパートナーであったエーリッヒ・ザンダーまで政治犯として逮捕されたため、嫌疑は写真スタジオにまで及ぶこととなる。ネガは気まぐれな家宅捜索によって没収され続けた。おまけに、戦争中のゴタゴタによってスタジオは破壊され、コレクションの大半はザンダーの元から離れていく。戦後になれば、手元に残った僅かな素材と、新たに撮り加えた写真を元手に展覧会を開けるくらいには地位も回復していたが、『二十世紀の人間たち』は未完のまま作者の死を迎えた。

とはいえ、時代の掣肘がなくともザ

ンダーの計画は不完全のまま終わっただろう。一人の人間がカバー出来る認識の範囲などたかが知れているし、何より写真とて一つの角度からしか撮影できない、恣意的な記録方法なのである。しかし、そうした膨大にして不完全なコレクションの中から何かが浮かび上がってはこないだろうか。不完全であるがゆえに、自らの欠陥を補完するよう呼びかけてくる声が聞こえては来ないだろうか。私はここに自らの労力を注ぎ込んだ、もとよりそれが時代の全てを覆い尽くせるとは思っていない、田舎生まれにして新しいテクノロジーに目がくらんだだけのアマチュアに編集の技術などあるはずもない、ではなぜこんな企てを思いついたのか

って？ こうした無謀な記録を未来へと差し向けることで、無鉄砲にして情熱に溢れる若者が俺ならもっと完璧に出来る、とばかりに動き出してくれるのではないかと思っただけ、いかなれば導火線に火をつけられないかと思っただよ……。

アメリカの小説家リチャード・パワーズは、デビュー作である『舞踏会に向かう三人の農夫』の中で、写真を見た時、人は見る者と見られる者の二重人格に分かれるのだと書いている。見る、とは言うまでもなく、被写体を眺める行為の事を指す。では見られる、とは？

絵画と違い、写真は大量生産を当て

こんだ表現手段であるため、作品は大衆の手元へと容易に舞い込んでくる。ゆえに、一対一の対面を迫られる。そこでは全てが自由だ。鑑賞者は昔ながらのサロンとは違い、誰の目を気にすることなく写真を評価することが出来る。人によってはザンダーの写真も不気味だと評価するだろうし、人によってはスタイリッシュな出来だと評する場合もあるだろう。場合によっては落書きをするなり、パソコンでカラーJPEGにするなり、自分の小説の表紙として用いるなり……そうした鑑賞の営みの中で浮かび上がってくるものがある。実は写真を見ることで人は自分をさらけ出すように迫られているのではないか、という疑問が浮かび上がってくる。

特に被写体がレンズを見つめているような作品ならば尚更だ。その眼差しは意図の有無を別にして、レンズの向こうにいる人間にこう語りかけているだろう。君は何者か、と。私はここにありのままをさらけ出している、ならば君も全てをさらけ出すのだ、あらん限りの力をもって私と対話するのだ、とばかりに訴えかけているだろう。その時、人は写真に見られている。素性を明かすように迫られているのだ。

パワーズはザンダーの写真をきっかけに、日本語訳にして400ページ（二段組）にもなる小説を書きあげた。ここには彼が有する知識のほとんどが描かれている。時に自動車王ヘンリー・フォードの伝記が挟まれ、時に写真に

関するエッセイも挟まれ、と言った具合に様々な要素が絡まりあいながら、三つの視点からなる物語を盛り上げている。彼は小説の中で自分を模した人間にこう語らせている。

私はやっと理解した。かつてのアウラを、ただひとつしかない芸術作品への宗教的畏怖を犠牲にしまったとしても、我々は機械的複製において何かをその代償に得ている。プリントを“本物”にする上では写真家も我々見る者と同様に無力なのだとすれば、逆に我々見る者は、プリントに歴史と意義を注ぎ込む作業において、写真家と少なくとも同等の資格を有しているはずだ。（中略）私もそうしなくてはなる

まい。大切なのは、感光乳剤の浮かんだ歴史の一断片ではない。我々がそれを“現像”することなのだ。

特に、ザンダーの写した三人の農夫をフィクシヨンによって描きながら、自分なりの歴史に対する認識を語っているシーンは、この引用を端的に表現している。写真を見ることでそこに写る人々に解釈を与えながら、自分自身をも作り上げていく。パワーズの成し遂げたのは、我々が普段写真を見つめながらなんとなく行っている対話を、膨大な小説に仕立て上げて芸術的に表現することであったのだ。

何も写真に限った話ではない。我々

は小説を書く時、モチーフに解釈を与えながら、自分自身をも作り上げている。いや、小説の執筆に限った話でさえない。我々は生きながらにして、たとえ口を閉ざしてしようと、絶えず対話に巻き込まれている。目の前にいる誰かに解釈を与え続け、自分自身を作り上げている。

“対話”とは常に行っているものであるから、“永遠”という言葉を付けるのさえ、そもそも余計なことなのかもしれない。しかしながら、小説家は常に孤独にあって作業しているゆえにこの事実を忘れがちだ。ともすれば、一人で小説を作り上げていると錯覚してしまうことだろう。保坂和志は師匠格であるところの小島信夫に、書き手が

小説に奉仕する限りにおいて小説は小説たりうるのであって、それが出来ているのは小島先生だけだと言ったという。それに対し、小島信夫はこう答えたそうだ。みんな小説家は自分の力で小説を書いていると思っっているんだから、こんなことをうっかりどこでも言ったら反感を買うだけだ——こうした事実がある限りは、「対話」の前には永遠”という言葉を付し続けなければならぬ。我々は一人で小説を書いていくのではない。常に誰か、もしくは何かとの対話関係にありながら小説を書いているのだと言いつけなければならぬ。

とはいえ、私もこうした認識に達するまでは時間がかかった。というか、

こうしてエッセイとして書いている間は威勢の良い言葉を並べられるが、実際に小説を書く段になるといつの間にか忘れてしまう事も多い。そうした忘却を少しでも食いとどめてくれるのは、**twitter** 文芸部という存在があってこそ、と言える。面白いと思っっている拙作の文章もまた、刺激し合っている仲間から教示を得たからこそ書けているのだと自覚することが出来る。

私が今回書いた小説の中には、どこかしらに **twitter** 文芸部の仲間の声が潜んでいることだろう。あるいは他の部員の作品にも同様の事が言えるかもしれない。今回残念ながら寄稿を見送った部員達の声もまた、多かれ少なかれ鳴り響いている。こうしてこの雑誌

は読者の元へと届いていく。そして読者の周りへと派生していき、どこまでも広がって未来へと続き……私はそうしたヴィジョンを夢見ている。小説という様々な要素を混ぜ込める媒体の中で多くの人間達が生き続け、読者の元へと伝わっていくという展開図を、小説として表現したいと考えている。

最後に今回雑誌作成のお世話になった人々に対し、その労力の多寡にかかわらず感謝を述べると同時に、拙い編集能力から出来た代物によって部員一同の切磋琢磨する姿が少しでも読者に伝わるよう願って、筆を擱くことにする。

日居月諸

編集後記

Li-tweet 夏号

発行日

平成二十五年七月七日

編集長

日居月諸

編集委員

イコ、うさぎ、小野寺

発行者

twitter 文芸部

ツイッターオフィシャルアカウント

ホームページ

<http://twibun.jindo.com/>

執筆者（五十音順）

安部孝作

あんな

イコ

うさぎ

小野寺那仁

崎本智（6）

常磐誠

日居月諸

表紙デザイン

うさぎ

まとめPDF作成

小野寺

本誌はホームページに掲載している「Li-tweet 夏号」をプリント用、電子書籍端末用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。

© twitter bungeibu 2013

Twitter 文芸部